

研究所レポート

2017

No.3

新宿区のまちの魅力の研究(2)

— 地域資源の集積と魅力形成メカニズムの分析 —



序章	今年度の研究の枠組み	2
I	地域資源と集積のプロセス	4
1.	歴史・伝統資源の集積	4
(1)	庭園・公園	4
(2)	伝統文化・芸能	5
(3)	神社仏閣	7
2.	教育資源の集積	8
3.	商業資源の集積	13
(1)	小売業	13
(2)	飲食業	16
4.	文化資源の集積	21
(1)	芸術家	21
(2)	劇場・映画館・劇団	24
(3)	ライブハウス・楽器店・音楽団体	29
5.	産業資源の集積	32
(1)	製造業	32
(2)	IT 産業	37
(3)	メディア・芸能産業	38
(4)	観光産業	41
II	地域資源の動向と社会経済環境の変化	44
1.	今後の大規模開発と交通網の整備	44
2.	産業の動向	46
3.	外国人居住者の動向	52
4.	大学・マンション開発の動向	53
5.	文化の動向	54
III	まちの魅力形成のメカニズムと今後の方向性	59
1.	時空間軸でみた地域資源の集積	59
2.	まちの魅力形成のメカニズム	66
3.	魅力的なまちであるための方向性	68



序章 今年度の研究の枠組み

— 地域資源の集積と魅力形成メカニズムの分析

研究の目的

新宿自治創造研究所では、平成 28 年度から 29 年度にかけて、新宿区のまちの魅力に関する研究を行ってきた。

新宿区は 34 万人の人々が暮らすまちであるとともに、多くの通勤・通学者や来街者でにぎわうまちである。しかし、今後、東京 2020 オリンピック・パラリンピックなどを契機に、都市間競争が一層激しくなることが予想される。新宿区がいつまでも「住み続けたい」「訪れたい」と思えるまちであるためには、新宿の多彩な魅力をさらに発掘・創造していくことが必要となる。

昨年度の研究では、にぎわいの実態把握と意識面からみる魅力の分析を行った。にぎわいの面からは、乗降者数日本一の新宿駅を持つ新宿には、通学・通勤から買い物・飲食や趣味・娯楽まで多様な目的で膨大な数の人が訪問していること（多様性）、また、多くの外国人が居住しているだけでなく、アジアを中心に様々な国からの外国人旅行者が観光やビジネス目的で新宿を訪れていること（国際性）などが明らかになった。意識面からは、新宿区は全国自治体の中で魅力が高く、認知度や訪問率などが最上位に位置し、新宿区のイメージとしては「利便性」「国際性」「先端性」の評価が高いこと、また、新宿のまちの良さは、「交通網の充実」「物や店が豊富」といった「利便性」であること、そして、新宿に魅力を感じている人がまちの良さとして「芸術・文化に触れる機会が多い」や「活気や刺激がある」をあげていることなどから、新宿には誰にでも受け入れられる普遍的な魅力ではなく、人によっては強烈な魅力となる個性的で独自性のある「特異性」があることなどが明らかになった。

今年度の研究では、新宿の魅力の源泉となる地域資源にどのようなものがあり、それらがどのように集積したのかを把握し、豊富な地域資源がどのようにしてまちの魅力形成するのメカニズムを明らかにする。そして、社会経済状況の変化を踏まえ、東京 2020 オリンピック・パラリンピック後も、新宿がまちの魅力とブランド力をさらに向上させ、魅力的なまちであり続けるための方向性を示す。

研究方法

第 I 章では、新宿の歴史・伝統資源、教育資源、商業資源、文化資源、産業資源といった様々な地域資源の集積の実態とそれぞれが歴史的・地理的にどのように集積されていったのかを把握する。まず分野ごとに地域資源を洗い出し、タウンページや実地調査などを用いて基礎データ整理し、データベースを作成した。次に経済センサス等の統計資料から 23 区間での比較等を行うとともに、データベースを GIS でマッピングし地理的分布を考察した。さらに集積の歴史的背景を書籍や社史、ホームページ（以下、「HP」）などの資料収集や関係者へのインタビューによって調査した。

第 II 章では、地域資源の動向と新宿を取り巻く社会経済環境の変化をまとめる。

第 III 章では、第 I 章、第 II 章で明らかになった地域資源の集積と展開、社会経済環境の変化から、まちの魅力が形成されるメカニズムのモデルを示す。まず、地域資源が新宿に集積するきっかけとなった、地理的条件と歴史的事象を踏まえ、時間軸、空間軸からみた地域資源の集積を把握し、新宿のまちの魅力形成のメカニズムを明らかにした。そして、魅力形成メカニズムを踏まえ、新宿が将来にわたって魅力的なまちであるための方向性を示した。

地域資源と集積のプロセス（第 I 章）

- ・ 統計資料の分析や実地調査による地域資源の集積状況の把握
- ・ 地域資源の 23 区間比較および新宿区内の地理的分布

地域資源の動向と社会経済環境の変化（第 II 章）

- ・ 今後の大規模開発と交通網の整備、産業、文化などの動向の分析

まちの魅力形成のメカニズムと今後の方向性（第 III 章）

- ・ 時空間軸でみた地域資源の集積のとりまとめ
- ・ まちの魅力形成するメカニズムの提示
- ・ 魅力的なまちであるための方向性の提示

新宿に関する研究の概要

今年度の研究では、地域資源の集積の歴史的背景を書籍や社史、HP、関係者等へのインタビューのほか、都市の研究を行っている研究者からも聞き取りを行った。以下に紹介している先行研究を参考に、新宿の魅力の形成のメカニズムを分析した。

まちの周縁性と新しい価値観・文化

大久保のまちの研究に詳しい法政大学の講師である稲葉佳子氏は、新宿のまちの多様性の起源を地理的周縁性にあると語る。稲葉氏によると、「江戸時代の新宿は様々な人が行き来する「宿駅」であり、明治・大正時代は様々な人が暮らす「郊外住宅地」であった。周縁であるがゆえに、人々が流れ、そこから伝統的価値観に縛られない新しい価値観や文化が生まれてきた」という。大久保については、「明治・大正期には文士、社会主義者、キリスト教活動家、外国人宣教師など、異色の住民たちも多かった。1960～70年代には多くの木賃アパートが建てられて、地方から東京に流入してきた多くの若者たちが住むようになった。1980年代中頃からは、アジアを中心とする外国人住民が増えており、常に多様な文化を受け入れてきた歴史がある」という。

コンテンツとなる文化資源とまちのイメージ¹⁾

音楽産業に従事し、コンテンツツーリズム学会の会長でもある法政大学の増淵敏之教授は、コンテンツ産業の立地行動と都市構造の変容性の関係を研究している。「コンテンツが地域イメージをつくる。例えば、富良野は「北の国から」をきっかけにイメージができ、観光客が増えた。新宿は、舞台になりやすいまちである。皆が自分の新宿のイメージを持っており、それぞれの趣味嗜好にあった新宿ができ、回遊路ができていく」という。また、新宿西口の「時屋」のどら焼きが「ドラえもん」が生まれる発想のヒントになったことなどを引き合いに出し、「まちは色々なヒントを色々な人に与えている。トリビア的なものも含め、一つひとつがこのまちの作ってきた文化的な資源になる」と語る。そして、都市には様々な魅力が存在し、今後、重要なアプローチになるのは、地域資源の選択と抽出の組み合わせであるとしている。

商業地における個性の形成

地理学者である東京学芸大学の牛垣雄矢准教授は、商業地の神楽坂を「都市内部構造論²⁾」の枠組みで研究した。「商業地において個性的な性格が形成される過程や背景には一定のパターンがある」と指摘し、狭い道路によって地価や賃料の安い空間があることで、挑戦的・個性的な商品やサービスを扱う、多くの小規模な店舗が集積することを示唆している。また、「商業地が形成された以降は、時代のニーズにあわせて変化しなければ、賑わいを維持することはできない」と指摘する。

1) コンテンツとは、娯楽・教養のために創作された内容物のことである。

2) 都市を面として捉えたバージェスの「同心円構造説（都心から外方に向かって、ビジネス→低所得住宅→労働者住宅→通勤者住宅に層化している）」が有名

本章では、歴史・伝統、教育、商業、文化、産業などの地域資源の実態を把握し、歴史的、地理的に地域資源がどのように集積されていったのかを把握する。

1. 歴史・伝統資源の集積

(1) 庭園・公園

新宿は、武蔵野台地東端部に位置し、数万年前に神田川によって浸食され、牛込台地、四谷台地などの低地が形成された。江戸時代には「内藤新宿」と呼ばれ、1604年に五街道の一つとして制定され、江戸以前の尾根道をもとにした甲州街道と、1606年に江戸城の拡張整備に必要な建築用資材（石灰）の運搬道路として設けられた成木街道（現青梅街道）の分岐点「追分」に、宿駅が開設された。現在の新宿には、新宿御苑や花園神社などの自然や公園、神社仏閣があり、神田川などの水の流れがまちに潤いを与え、坂の多い地形が景観に変化をもたらしている。ここでは、江戸の風情を残す庭園や公園について取り上げる。

図表 I-1 より、23 区内に現存する大名屋敷の庭

園は 23 園あり、文京区に 5 園、港区に 5 園、新宿区に 4 園ある。

庭園と公園

江戸時代、参勤交代の制により諸大名が江戸詰めを命じられ、高台に中屋敷、下屋敷を持つようになった。多くの大名屋敷は高台の尾根道の南側に立地し、敷地内の斜面となるところに、高低差による湧水を活かして池を造り、回遊式の庭園を設けていた。大名屋敷は、江戸末期、約 700 邸あり、新宿区内には 52 邸あり、主に下屋敷として利用されていた¹⁾。大名・旗本屋敷は、明治期に公共施設（官公庁・大使館、軍事施設、教育・文化施設）や京都から移った華族や新政府の重臣の邸宅になった。

図表 I-1 23 区の庭園一覧

番号	名称	所在地	大名屋敷
1	二の丸庭園	千代田区千代田 1-1	将軍家
2	ホテルニューオータニ東京	千代田区紀尾井町 4-1	彦根藩中屋敷
3	浜離宮恩賜庭園	中央区浜離宮庭園 1-1	将軍家別邸
4	毛利庭園	港区六本木 6	長府藩上屋敷
5	有栖川宮記念公園	港区南麻布 5-7-29	南部藩下屋敷
6	国立科学博物館附属自然教育園	港区白金台 5-21-5	高松藩下屋敷
7	旧芝離宮庭園	港区海岸 1-4-1	佐倉藩・紀州藩浜屋敷
8	檜街公園	港区赤坂 9-7-9	長府藩下屋敷
9	新宿御苑	新宿区内藤町 11	高遠藩下屋敷
10	甘泉園庭園	新宿区西早稲田 3-5	御三家・清水家下屋敷
11	大隈庭園(早稲田大学)	新宿区西早稲田 1-6-1	彦根藩下屋敷
12	箱根山(都立戸山公園)	新宿区戸山 2	尾張藩下屋敷
13	肥後細川庭園	文京区目白台 1-1	熊本藩下屋敷
14	小石川後楽園	文京区後楽 1-6-6	水戸藩上屋敷
15	椿山荘庭園	文京区関口 2-10-8	久留里藩下屋敷
16	六義園	文京区本駒込 6-16-3	川越藩下屋敷
17	三四郎池(東京大学)	文京区本郷 7-3-1	加賀藩上屋敷
18	旧安田庭園	墨田区横網 1-12-1	笠間藩・宮津藩下屋敷
19	隅田公園	墨田区向島 1、2、5	水戸藩下屋敷
20	清澄庭園	江東区清澄 3-3-9	関宿藩下屋敷
21	戸越公園	品川区豊町 2-1-30	熊本藩下屋敷
22	池田山公園	品川区東五反田 5-4-35	岡山藩下屋敷
23	鍋島松濤公園	渋谷区松濤 2-10-7	紀州藩下屋敷

※「東京の大名庭園全23 お気に入り順紹介 東京とっぴ」(HP)をもとに作成

1) 戸沼幸市編著『新宿学』

これらの庭園のうち、新宿御苑、戸山公園、甘泉園公園の3つが江戸風情が残る公園として利用されている²⁾。新宿御苑は、内藤家の中屋敷があったところで、庭園「玉川園」の一部が玉藻池を中心とする日本庭園として残っている。明治に入り、内藤家から上納された土地と買収した隣接地をあわせて、近代農業振興を目的とする「内藤新宿試験場」が設置された。その後、宮内省所管の「新宿植物御苑」となり、皇室の御料地・農園として運営された。1945年の空襲でほぼ全焼し、戦後、国民公園となり一般開放されることになった。

戸山公園は、江戸時代には尾張藩徳川家の下屋敷で、回遊式庭園「戸山荘」として整備され、敷地内には箱根山に見立てた築山がある。明治維新以後は、陸軍戸山学校が開かれ、終戦まで陸軍軍医学校、陸軍練兵場などに利用された。戦後、一部が都立公園

として整備された。

甘泉園公園は、江戸時代には清水徳川家の下屋敷の回遊庭園であった。当地から湧き出ている湧水がお茶に適して評判であったことから「甘泉園」と呼ばれ、明治時代に相馬子爵家の邸宅になった後、1938年に早稲田大学の施設となった。1961年、東京都に売却され公園になり、現在は区立公園になっている。

このほか明治期に華族邸宅とされた敷地から公園になったものとしては、おとめ山公園がある。おとめ山公園一帯は、江戸時代に徳川家康の鷹狩り場として一般人の立ち入りを禁止していたため、「おとめ山（御留山）」と呼ばれていた。その後、大正期に相馬家の屋敷となり、庭園「林泉園」が造られた。1969年に東京都が公園に整備し、開園と同時に移管され区立公園となった。

(2) 伝統文化・芸能

新宿区内に拠点のある主な伝統文化・芸能施設をみると（図表 I-2）、茶道については裏千家の拠点、華道については新進の流派の家元、箏曲の宮城道雄

記念館、国の登録有形文化財になっている能楽堂など、伝統文化・芸能施設が集積している。

図表 I-2 新宿区内の主な伝統文化・芸能施設一覧

番号	施設名	住所	分野	設立・発足年
1	茶道文化振興会 茶道会館	高田馬場 3-39-17	茶道(裏千家)	1950年
2	今日庵 茶道会館・東京道場	市谷加賀町 2-5-23	茶道(裏千家)	1956年
3	茶室 三徳庵	左門町 20	茶道(大日本茶道学会)	1964年
4	国際茶道文化協会 東京茶道会館	市谷甲良町 1-4	茶道(裏千家)	1947年
5	新宿御苑茶室 楽羽亭	内藤町 11	茶道	1987年
6	益田屋 正芳庵	百人町 2-20-7	茶道(裏千家)	1930年
7	龍生派 龍生会館	市谷田町 3-19	華道(龍生派)	1951年
8	華道松風会館	百人町 2-18-20	華道(いけばな松風)	1960年
9	大和花道会館	百人町 2-17-10	華道(大和花道)	1968年
10	宮城道雄記念館	中町 35	箏曲(宮城宗家)	1978年
11	正派邦楽会館	市谷左内町 3	箏曲(正派邦楽会)	1913年
12	矢来能楽堂	矢来町 60	能楽(観世九皇会)	1952年

※各施設のHPをもとに作成

① 茶道

江戸に幕府が置かれ、上方で栄えた伝統芸能が東京に普及した。茶道は、16世紀に千利休が堺で茶の湯の道を大成し、江戸時代には、武士や役人も修業の一貫として茶道を習うようになった。

武士以外に、一般庶民にもお茶が広がり、その家元として千家がある。千家茶道の礎を築いたのは、千家三代を継いだ千宗旦であり、不審庵（表千家）を三男に、自分は末子と邸内に茶室の今日庵（裏千

家）を建てて移り住んだ。後に、二男が建てた分家の官休庵（武者小路千家）とあわせて三千家という³⁾。裏千家11代玄々斎精中は、1872年の京都博覧会に際して外国人を迎えるための立礼式の茶礼を創案した。戦後、経済成長とともに茶道人口も増加したが、裏千家は真っ先に大衆化路線を推し進め、国際化への対応が早かったため、最大規模を誇るようになった。

新宿区には、1947年に裏千家14代淡々斎宗匠

2) 新宿区に徒歩圏内の場所に、小石川後楽園、肥後細川庭園、椿山荘庭園（以上文京区）、哲学堂公園（中野区）などがある。

3) 茶道の歴史については裏千家HP「裏千家歴代」(HP)

の発案で、茶道を海外に広めるために設立した「国際茶道文化協会」がある。裏千家の茶の道場として1950年に建築された「茶道会館」が高田馬場にあり、1956年に建築された「東京道場・今日庵」が市谷加賀町にある。また、1898年に茶道を広く普及するた

めに、田中仙礫が創設した大日本茶道学会の本部と教場（茶室三徳庵）などが左門町にある。この他に、茶事をたしなめる場所として、新宿御苑の茶室「楽羽亭」や益田屋の茶室「正芳庵」などがある。

インタビュー：益田屋 益田氏

オリンピックイヤー（2020年）に創業90周年を迎える益田屋は、大久保近辺で茶道具を扱う店を営み、茶室を持っている。現社長の益田氏の曾祖父は堺で鍛冶屋を営んでおり、上京し入谷で貸家経営をしていたが、祖父の代で中野に移り華道具を扱う店を興す。その後、華道の先生が多く住み、通りに花市場があった大久保に店を移転し、茶道具を中心に扱うようになったという。裏千家で学び、海外に茶道のパフォーマンスのイベントの仕事をするようになったことや、上海で茶室を開設したり、海外で活動した経験がある。そのため、国際フォーラム内の茶室でのお点前の披露や、茶道体験コースとして「正芳庵」での茶事や茶会の開催など、外国の方に茶道という伝統文化を広めることに一躍を担っている。

②華道

華道は1462年、京都六角堂の僧侶・池坊専慶によって「いけばな」として成立し、池坊専応によって確立された。その後、朝廷や武家に重く用いられていたが、江戸時代に入り経済力をつけた町人の間に広まっていった。京都に本拠を置き、朝廷や武家と深い関係を築いてきた池坊は、明治維新と東京遷都を機に、東京神田駿河台に1889年に池坊出張所を開設し、女学校におけるいけばな教育に力を注いだ⁴⁾。

池坊のほか300を超える流派があり、新宿区内には、自由で個性的な龍生派、大和花道などの本部があるほか、(社)日本華道連盟も事務所を構えている⁵⁾。龍生派は1886年、吉村華芸が池坊より分派して創流し、市谷田町に本部（龍生会館）を構えている⁶⁾。大和花道は、1930年、池坊を学んだ下田天映が創設し、百人町に本部（大和花道会館）がある。また、高崎に本部がある「いけばな松風」は、1921年に塚越応環により創流された松風流が発展した流派であり、東京本部（華道松風会館）が百人町にある。

③箏曲

箏曲は、戦国末期から江戸初期にかけて、賢順による「筑紫箏」を始祖とし、賢順の弟子の法水に師事した八橋検校が箏曲を芸術的な音楽として完成させた。孫弟子の生田検校によって「生田流」が生まれ、

京都や大阪を中心に広まった。大正・昭和の時代になり、生田流の流れを組む宮城道雄は中島検校に入門し、1905年「宮城宗家」をおこした。晩年までの26年間住んだ中町の敷地内に「宮城道雄記念館」が建てられている⁷⁾。また、1913年、中島雅楽之都が長野市においておこした「正派邦楽会」は、7年後に東京に本拠地を移し、現在、市谷左内町に正派邦楽会館で普及や教育活動を行っている⁸⁾。

④能楽堂

能楽は、室町時代に観阿弥が田楽や猿楽を芸術的に高め、息子の世阿弥が能を舞台芸術に高め確立した。江戸時代には、「猿楽」として武士に親しまれ、金春、観世、宝生、金剛の四家は、幕府直属の能役者として銀座に屋敷を拝領して住んでいた。その後、金春は麴町に、観世座の家元・観世太夫や一座の人々は神田神保町（現神田猿楽町）に移転した。明治維新により、能楽は保護者を失い廃業・転業を余儀なくされるが、伝統芸術の必要性を痛感した政府や皇族等の後援により、再興を果たした⁹⁾。

その後、神田近辺にあった能楽堂が関東大震災や東京大空襲で焼失後に、新宿や渋谷などに移転した。都内には11ヶ所の能楽堂があり、新宿区には、矢来町に国の登録有形文化財に指定された木造の「矢来能楽堂」がある。

4) 「IKENOBO いけばなの根源 いけばなの歴史」(HP)

5) 例えば、龍生派は「個性を表現するためのいけばな」を目指し、大和花道は「いける過程で、どれだけ自由に、大胆に、緊張に満ちた花とのやりとりを押し進めていけるか」を大事にしている。

6) 「いけばな龍生派」(HP)

7) 「てくてく牛込神楽坂」(HP)、内田百閒『東海道刈谷駅』

8) 「正派邦楽会」(HP)

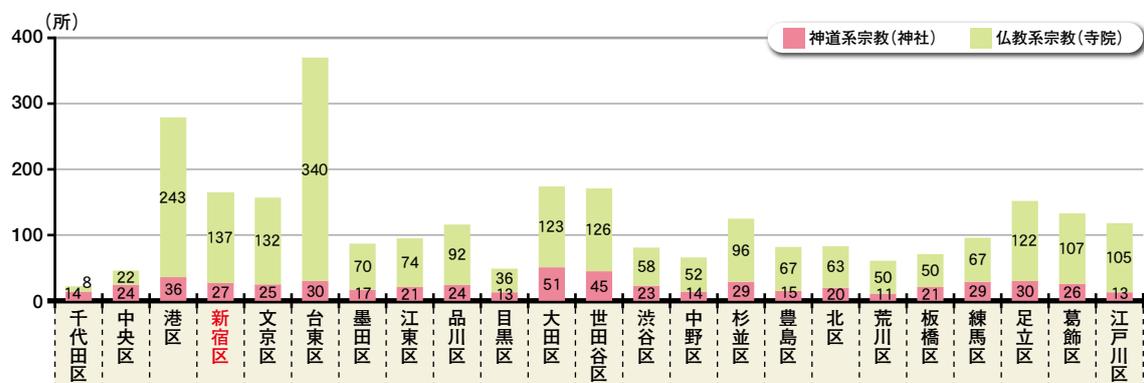
9) 公益社団法人 能楽協会「能楽事典（能楽とは）」(HP)

(3) 神社仏閣

図表 I-3 より、神社・寺院の事業所数をみると、神道系宗教（以下「神社」という）が 23 区内にまんべんなく立地しているのに対して、仏教系施設（以

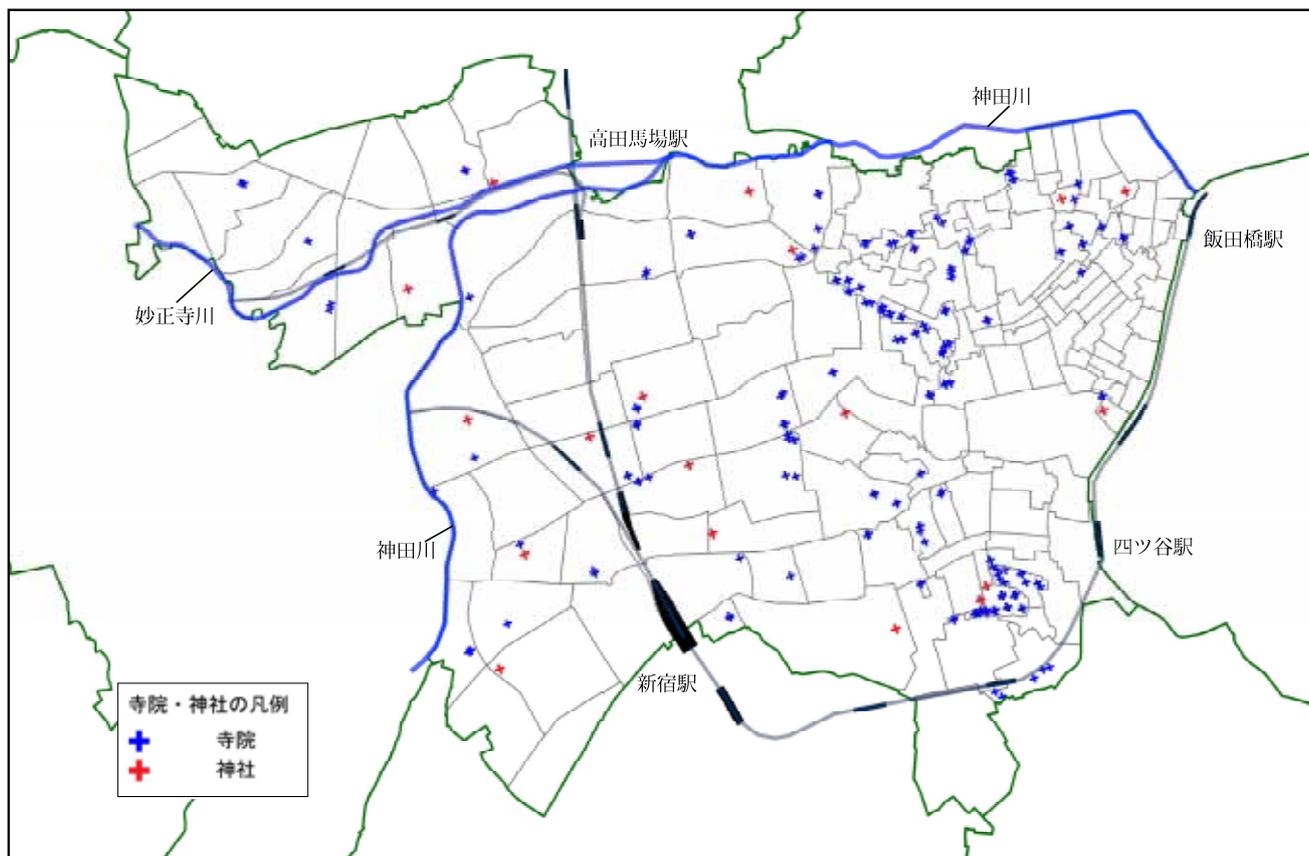
下「寺院」という）は地域により偏りがみられる。寺院の数は、新宿区は 137 所で、台東区、港区に次いで 3 番目に多い¹⁰⁾。

図表 I-3 23 区の神社・寺院事業所数



※2014年「経済センサス」より作成

図表 I-4 神社・寺院分布図



※2017職業別タウンページをもとに作成

10) 江戸初期は、新宿近辺にはあまり立地していなかった。寺院の分布は、東京都全体（2,872 所）からみると、区部（2,240 所）に多く、市町村部に少なくなっている。

I 地域資源と集積のプロセス

①神社

新宿区内には、江戸時代にまちの鎮守として移転してきた神社が立地し、庶民の信仰と生活の拠点となってきた。西の市の花園神社、流鏝馬の六八幡宮、三十六歌仙の須賀神社、坪内逍遙らが芝居の稽古に用いた清風亭があった赤城神社、景勝地と温泉の観光地であった熊野神社などがある。

②寺院

図表 I - 4 (P.7) より、新宿区内の寺院分布をみ

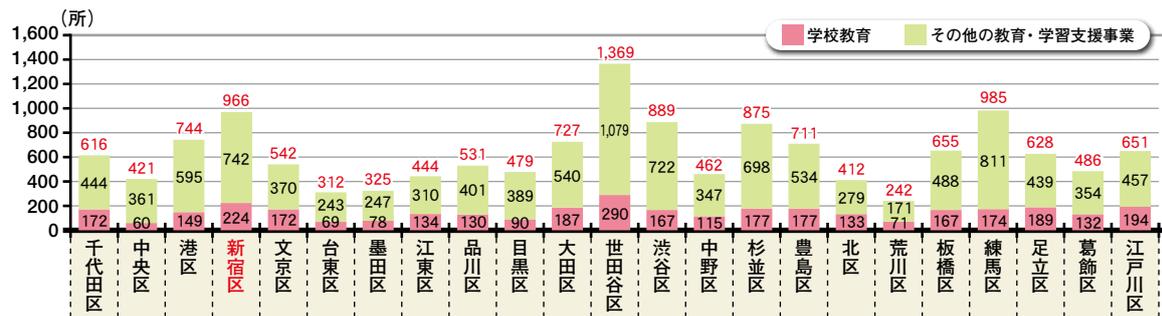
ると、四谷の谷筋の須賀町や若葉周辺に、寺院の約25%が集中している。四谷では、お岩さんで有名な於岩稲荷神社や陽運寺を始め、正覚寺などの寺院が隣接して並び、夏目坂通り周辺も誓閑寺や常楽寺などの寺院が連なっている。天龍寺、太宗寺、正受院、成覚寺、理性寺、東長寺、法雲寺、浄雲寺、全長寺など、内藤新宿にある寺院は、家康による江戸建設の過程で、江戸の内から内藤新宿の近辺へと移転させられ、甲州道中が走る台地上ではなく谷間に多く立地していた¹¹⁾。

2. 教育資源の集積

新宿区内には、早稲田大学や工学院大学をはじめとする大学や、専修・各種学校が多数立地している。図

表 I - 5 より、教育・学習支援事業所数をみると、新宿区は966所で世田谷区、練馬区に次ぎ3番目に多い。

図表 I - 5 23 区の教育・学習支援事業所



※2014年「経済センサス」より作成

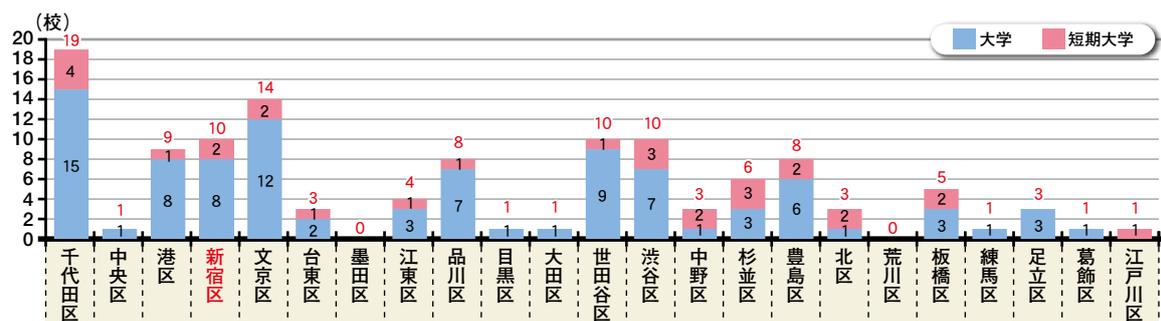
ここでは、大学、専修・各種学校を取り上げる。

①大学

全国の大学数は777校、短期大学は341校であり、都内には大学が154校、短期大学が38校の合

計192校ある。そのうち23区に約6割の121校が集中している¹²⁾。図表 I - 6 より、大学と短期大学の総数は、新宿区は10校で、千代田区、文京区に次ぎ3番目に多い。

図表 I - 6 23 区の大学学校数(総数: 121)



※東京都「平成28年度学校基本統計」より作成

11) 新宿区立新宿歴史博物館編『内藤新宿の街並とその歴史』

12) 文部科学省「平成29年版文部科学省統計要覧」

明治時代の大学の開学

図表 I-7 より、1900 年以前に創立された 23 区の大学を創立順にみると、幕末から明治初年にかけて、大学の前身となる私塾などが数多く創立されている。最初の頃の私塾などは、神田や麹町周辺、小石川周辺に立地していたが、交通網の整備とともに、新宿区、港区、渋谷区に立地してきた。新宿区内では、早稲田大学、学習院女子大学、工学院大学、東京女子医科大学、東京理科大学、慶應義塾大学（医学部）が開校している¹³⁾。

早稲田大学は、江戸時代の蘭学塾である北門義塾が閉校した跡に設立された「東京専門学校」が前身であり、多くの文学者を輩出している。

学習院女子大学は、華族（大名・公家）のための学校として設立された「学習院」が前身である。1885 年に華族子女の教育を目的として「華族女学校」が四谷に開校し、生徒数が増加したため校舎を永田町に移した。一時区外に移転したが、終戦後、現在地の戸山の近衛騎兵連隊跡地に移転した。

東京理科大学は、東京大学の卒業生が理学の普及を目指し創設した「東京物理学講習所」が前身で、当初は飯田橋の私立若松小学校内に設立された。その後、校舎を神田小川町へと移し「東京物理学校」と改称し、さらに 1906 年には神楽坂の現在地に移転した。

工学院大学は、富国強兵を推進する明治政府のもと、生産現場における専門的な技術者・管理者（工手）の不足を補うため、築地に「工手学校」として開校した。関東大震災により校舎を全焼し、新宿区内の中学校を仮校舎とした後、1928 年に角筈に新校舎を完成させ工学院と改称した。この他に、1923 年に中落合に創設された「研心学園」が前身の「目白大学」、1943 年に下落合に実務教育を行う「東亜学院」が前身の「東京富士大学」が誕生した¹⁴⁾。

医学教育と大学病院

現在、国内には 82 の医学部があり、23 区には 12 校が立地している。最も多いのが文京区の 4 校であり、新宿区には 3 校ある。

日本の西洋医学の伝来は、1594 年以降、布教や商館付医師として派遣された人々により南蛮医

図表 I-7 23 区の 1900 年以前に創立された大学一覧

番号	大学名	創立地（現在地）	創立年	前身
1	立正大学	品川区	1580 年	飯高壇林（日蓮宗）
2	駒澤大学	世田谷区	1592 年	学林（曹洞宗）
3	東京大学	文京区	1797 年	昌平学問所
4	順天堂大学	文京区	1838 年	和田塾（蘭方医学塾）
5	学習院大学	京都市（豊島区）	1847 年	学問所（公家の教育機関）
6	慶應義塾大学	中央区（港区 / 新宿区）	1858 年	蘭学塾
7	明治学院大学	港区	1863 年	ヘボン塾
8	東京学芸大学	港区（小金井市）	1873 年	東京府小学校教則講習所
9	立教大学	豊島区	1874 年	立教学校（英学塾）
10	青山学院大学	渋谷区	1874 年	女子小学校、耕教学舎、美會神学校
11	東京農工大学	新宿区（府中市）	1874 年	内藤新宿出張所内農事修学場、蚕業試験場
12	一橋大学	中央区（国立市）	1875 年	商法講習所
13	お茶の水大学	文京区	1875 年	東京女子師範学校
14	跡見学園女子大学	千代田区（文京区）	1875 年	跡見学校
15	東京海洋大学	港区	1875 年	私立三菱商船学校
16	日本医科大学	文京区	1876 年	済生学舎
17	学習院女子大学	千代田区（新宿区）	1877 年	学習院
18	二松学舎大学	千代田区	1877 年	二松学舎（漢学塾）
19	東京芸術大学	台東区	1879 年	東京美術学校、東京音楽学校
20	法政大学	千代田区	1880 年	東京法学社
21	専修大学	中央区	1880 年	経済・法律の専修学校
22	東京薬科大学	墨田区（八王子市）	1880 年	東京薬舗学校
23	明治大学	千代田区	1881 年	明治法律学校
24	東京慈恵会医科大学	中央区（港区）	1881 年	成医会講習所
25	東京工業大学	台東区（目黒区）	1881 年	東京職工学校
26	東京家政大学	文京区（板橋区）	1881 年	和洋裁縫伝習所（裁縫私塾）
27	東京理科大学	千代田区（新宿区）	1881 年	東京物理学講習所
28	日本獣医生命科学大学	文京区（武蔵野市）	1881 年	私立獣医学校
29	白百合女子大学	千代田区（調布市）	1881 年	聖パウロ修道会女の学校
30	早稲田大学	新宿区	1882 年	東京専門学校
31	國學院大学	千代田区（渋谷区）	1882 年	皇典講究所
32	テンブル大学	ペンシルバニア州（港区）	1884 年	Baptist Temple
33	東洋英和女学院大学	港区	1884 年	東洋英和女学校
34	中央大学	千代田区（八王子市）	1885 年	英吉利法律学校
35	共立女子大学	千代田区	1886 年	共立女子職業学校
36	東洋大学	文京区	1887 年	哲学館
37	工学院大学	中央区（新宿区）	1887 年	工手学校
38	東京女学館大学	渋谷区（閉校）	1888 年	東京女学館
39	日本大学	千代田区	1889 年	日本法律学校
40	日本赤十字看護大学	渋谷区	1890 年	日本赤十字社看護婦養成所
41	東京農業大学	千代田区（世田谷区）	1891 年	徳川育英会育英養農業科
42	日本体育大学	千代田区（世田谷区）	1893 年	日本体育会体操練習所
43	東京外国語大学	千代田区（府中市）	1897 年	高等商業学校附属外国語学校
44	実践女子大学	渋谷区	1899 年	実践女学校と女子工芸学校
45	拓殖大学	千代田区（文京区）	1900 年	台湾協会学校
46	津田塾大学	千代田区（小平市）	1900 年	女子英学塾
47	女子美術大学	文京区（杉並区）	1900 年	私立女子美術学校
48	東京経済大学	港区（国分寺市）	1900 年	大倉商業学校
49	東京女子医科大学	千代田区（新宿区）	1900 年	東京女醫学校

※大学HPより作成

学やオランダ医学であった。1861 年、長崎養成所（現長崎大学医学部）が設立され、1862 年には神田に蘭医らの集会所が設けられた¹⁵⁾。

慶應義塾大学医学部・同病院は 1858 年、福澤諭吉が江戸築地鉄砲州に蘭学塾（慶應義塾の前身）を開き、三田に移転後、1873 年に「慶應義塾医学所」を設立した。その後、四谷区信濃町の陸軍用地を購入し、1919 年、四谷の新校舎で医学科本科を開き、1920 年、大学病院を開院した。空襲により医学部・病院施設の約 6 割が焼失してしまうが、1948 年に病院本館を再建、1952 年には新制大学医学部が発足した¹⁶⁾。

東京医科大学・同病院は 1916 年、自主退学した日本医学専門学校（現・日本医科大学）の学生が、理想の学

13) 「神田学会 KANDAアーカイブ」(HP)

14) 他にメディア系の学部を持つ宝塚大学などがある。

15) 日本の西洋医学の伝来については『都市紀要 11. 東京の理科系大学』、各大学の沿革については各大学の HP による。

16) 「慶應義塾大学医学部」(HP)

問の場を求め、東京物理学校の教室を借り、「東京医学講習所」を設立した。1918年には官界、医学界、財界等の有志からの支援を受け「東京医学専門学校」が設立された。1931年には附属淀橋診療所を開設し、後にこの病院は博済病院を統合し淀橋病院と改称している。1946年に東京医科大学に昇格し、附属淀橋病院も東京医科大学病院に改称された。

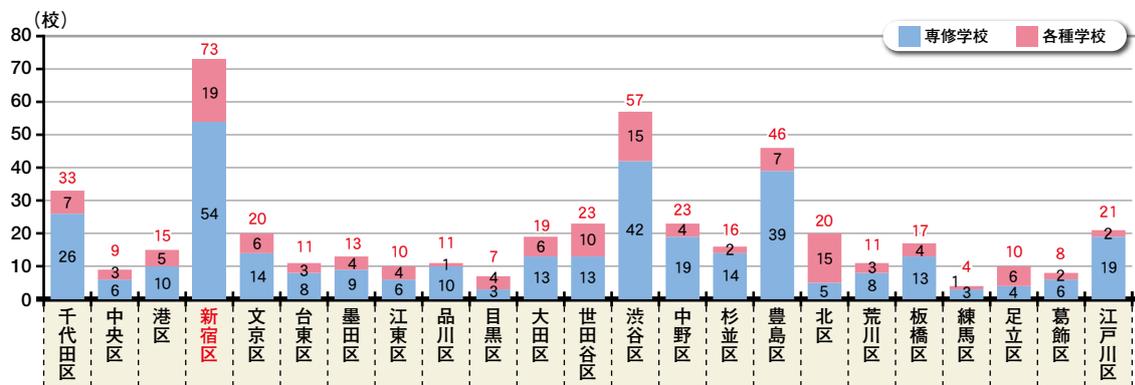
東京女子医科大学・同病院は、1889年から「済生学舎（1895年、本郷元町に創業）」で猛勉強して医師資格を得た吉岡彌生が、女医養成機関の必要性を痛切したことがきっかけで、1900年、飯田町に設立

した至誠医院の一角で「東京女医学校」を創立した。1903年に飯田町から陸軍獣医学学校跡地のある河田町に移転している¹⁷⁾。

②専修学校・各種学校

図表 I-8 より、23 区の専修・各種学校数をみると、新宿区は 73 校で最も多く、渋谷区が 57 校、世田谷区が 46 校で続いている。なお、2016 年の全国の専修学校は 3,183 校、各種学校は 1,200 校の合計 4,383 校である。都内には約 13 % の 554 校があり、その多くが 23 区内に立地している。

図表 I-8 23 区の専修・各種学校数



※東京都「平成28年度学校基本統計」より作成

図表 I-9 は、大学・高校および教授分野別にみた専修・各種学校等の分布図である¹⁸⁾。分布図から、専修・各種学校等は久保・新久保駅周辺と高田馬場駅周辺などに多く集積している。久保・新久保駅周辺には、音楽や外国人向けの日本語学校などの語学が多い¹⁹⁾。

戦後の専修・各種学校は、主に職業、洋裁・料理

の家政、その他生活に必要な知識・技術を習得させることを目的として設立された。最近では、企業の即戦力になるような I T 関係や医療福祉系の学校が増えている²⁰⁾。新宿区内の専修・各種学校の多くは戦後に開校しており、交通利便性の良さから区内に学校を設置する機会が多い。

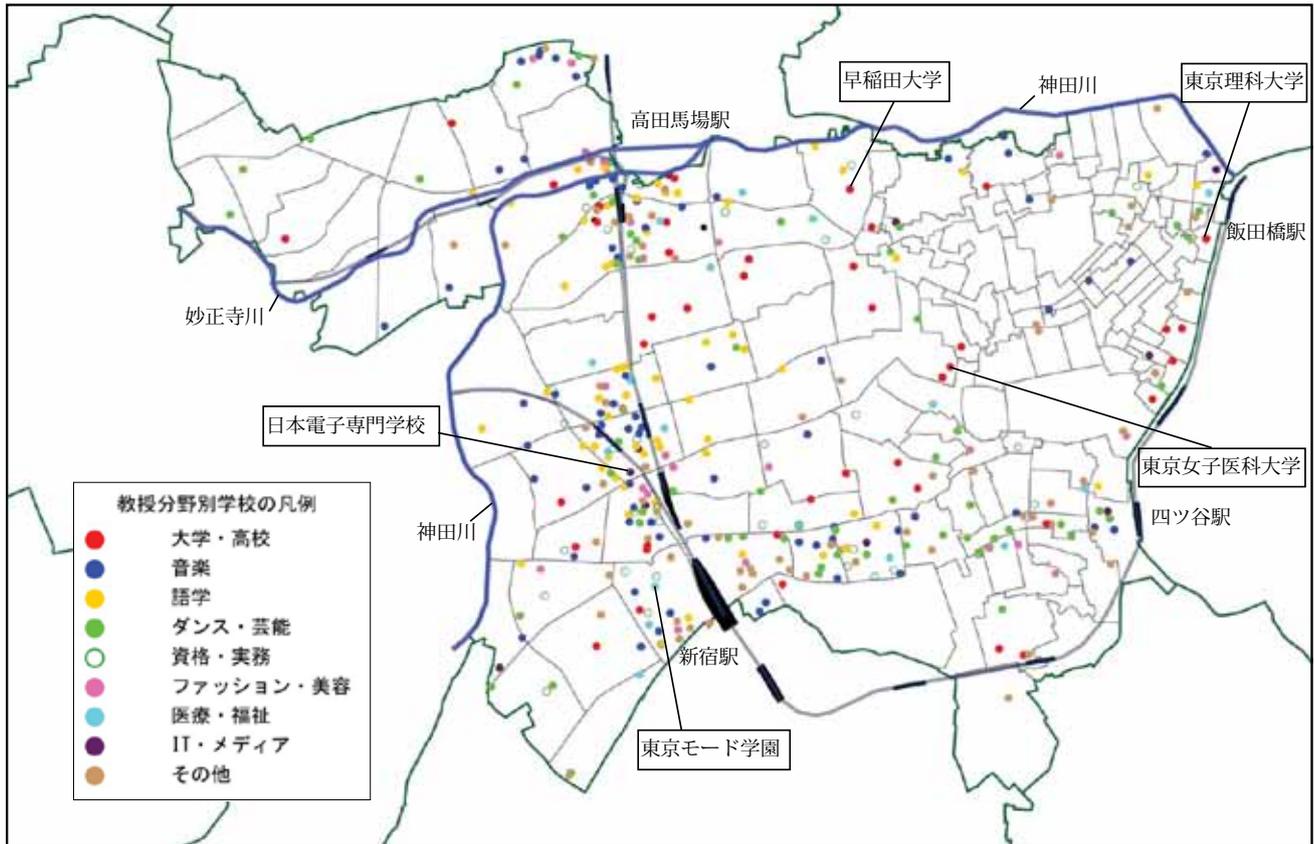
17) 「東京女子医科大学」(HP)、折井美耶子・新宿女性史研究会編『新宿歴史に生きた女性 100 人』

18) なお、専修学校は 1976 年の専修学校制度により創設され、「修業年限 1 年以上、年間授業時間数 800 時間以上、学生数常時 40 人以上」などの学校設置基準をみたし、認可を受けた教育施設である。各種学校は、年間授業数 680 時間以上などの基準となっている。

19) 音楽には楽器演奏やボーカルの教室が含まれ、ダンス・芸能には、バレエ、社交ダンスなどの教室、タレント養成の学校、伝統芸能の教室などが含まれる。

20) 文部科学省『学制百年史』

図表 I-9 専修・各種学校等分布図



※「東京都内の私立専修・各種学校一覧(平成29年4月現在)」と「2016職業別タウンページ」から、各種教室・スクールのデータ(予備校・塾は除く)を分野別に整理して作成

専門学校と外国人留学生

新宿区内の専門学校には留学生を受け入れる学校が多いことも特徴である。このような学校が多いことで、留学生が集まり、留学生の増加とともに、語学学校も増えている。また、母国語である外国語を教える学校も集積している。新宿区の日本語学校は、2017年12月13日現在、55校ある²¹⁾。

新宿区内で40年以上営業をしている「新宿日本語学校」は、1951年に、主にカトリックの神父を対象にして日本語教育を行っていた「聖ヨゼフ日本語学

院(六本木)」が前身である。1975年に西新宿で「新宿日本語学校」として設立し、1982年に学校の拡張に伴い高田馬場に移転した²²⁾。

日本電子専門学校は、1960年代から留学生を受け入れており、1970年代に留学生担当部署を設置している。現在は、日本で就職したい留学生の9割は、国内で就職している。モード学園(東京・大阪・名古屋)の現在の留学生総数は519名で、最も留学生が多いHAL(東京・大阪・名古屋)は673名が在籍している²³⁾。

インタビュー：電子学園 内田氏

百人町に立地する日本電子専門学校は、1951年に日本ラジオ技術学校として創立し、ラジオ・テレビの技術者の育成を行っていた。1953年に日本高等テレビ技術学校へと改称したのち、創立10周年の1961年に日本電子専門学校に改称し現在に至る。日本電子専門学校は、1960年から1970年代には、エレクトロニクスとコンピューター教育を開始した(公式HP)。総務担当の内田氏のインタビューからも、新宿駅には小田急線・京王線などが乗り入れており、大久保駅からのアクセスがよいこと、通学や飲食店が多いことでアルバイトがしやすいことなど、立地の良さがあるという。また、1960年代から留学生を受け入れており、日本語学校を経て入学する方が多く、現在は学生の約5分の1が留学生であるという。

21) 株式会社 SiKi「日本語学校データベース」(HP)

22) 本段落については、『新宿区成立70周年記念誌 新宿彩物語～時と人の交差点～』第2章 新宿人70

23) 日本電子専門学校は内田氏インタビュー、モード学園は青木氏インタビューによる。

インタビュー：日本教育財団 青木氏

西新宿にある総合校舎モード学園コクーンタワーには東京モード学園・HAL 東京・首都医校の3校が入っている。同専門学校の運営元である日本教育財団は、1966年に名古屋モード学園を開校して以来、地理的には大阪、東京と進出し、教育内容ではモード学園（ファッション・美容・デザイン）、HAL（IT・CG・ゲーム）、医校/医専（医療・福祉・スポーツ）を展開してきた。日本教育財団理事青木氏によると、1980年に東京に進出するにあたっての立地の必要条件是、若者の集まる場所であることとターミナルであることが重要であったという。当時の東京駅では若者の滞留が少ないこと、渋谷駅では商圈が小さいことから新宿に進出することを決めた。さらに、新宿駅周辺であっても西口はインテリジェンス、東口は歓楽街、南口は商業ビル開発などそれぞれの顔がある中で、西口が当時、最先端なモードというイメージと親和性が高いため選ばれたようだ。また、ターミナルであるということは学生を集めるのによいだけでなく、全国で活躍する人材を講師として集めるため、そして就職活動にも優位に働く上で必須であった。

3. 商業資源の集積

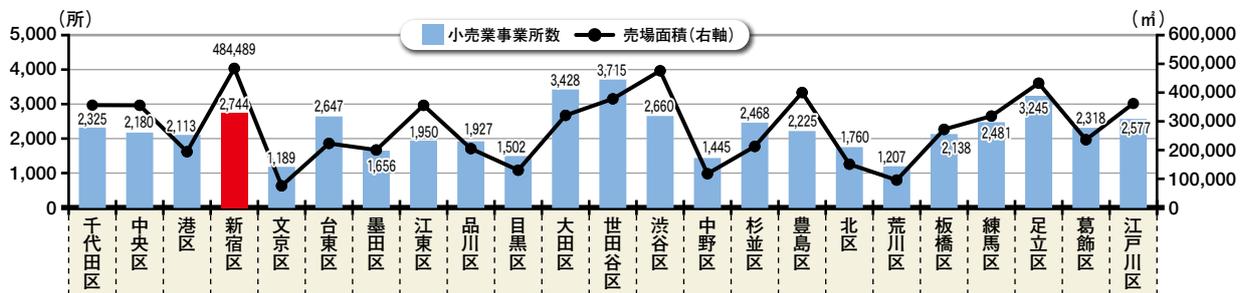
(1) 小売業

図表 I-10、I-11 より、23 区の小売業の事業所数、売場面積と年間商品販売額を比較すると、事業所数では世田谷区が 3,715 所と最も多く、次いで大田区、足立区と続き、人口の多い自治体が上位を占めている。新宿区は人口が世田谷区の約 4 割であるが、事業所数では 2,744 所で 4 番目になっている。また、売場面積と年間商品販売額をみると、売り場

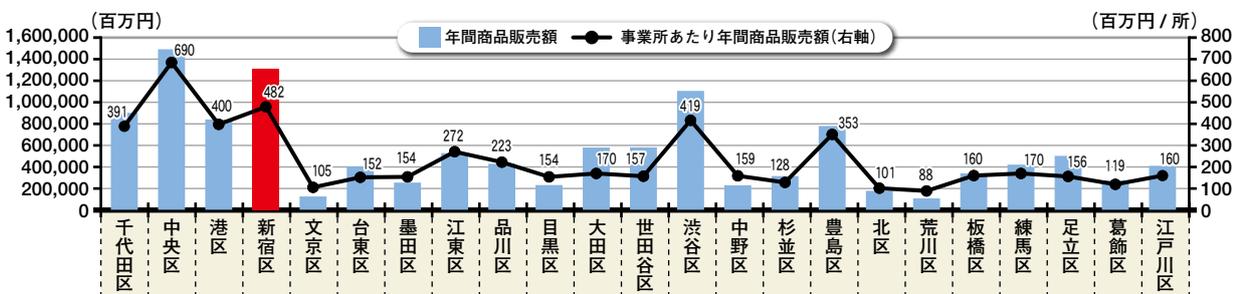
面積は 484,489㎡で第 1 位であるが、1 事業所あたりの年間商品販売額は、新宿区は 482 百万円で中央区に次ぐ。

この年間商品販売額を用いて都心 5 区（千代田区、中央区、港区、新宿区、渋谷区）の小売中心地性を比較すると、新宿区は 3.42 で、千代田区（13.71）、中央区（9.32）、渋谷区（4.34）に次ぐ 4 番目である²⁴⁾。

図表 I-10 23 区の小売業事業所数・売場面積



図表 I-11 23 区の小売業年間商品販売額



※2014年「経済センサス」より作成

ここでは、小売業のうち、大きな売上高を示す百貨店と家電量販店について取り上げる。

①百貨店・ファッションビル

百貨店は、1850年代のパリのボンマルシェ百貨店が始まりとされ、日本では1904年の三越百貨店が第1号である²⁵⁾。なお、三越百貨店は1673年、江

戸本町に開業した「越後屋」が前身であり、従来の上流階層の顧客を対象に、取扱商品を拡大することによって百貨店化を進めた。その後、関東大震災後、百貨店の大衆化が進み、食料品や日用雑貨などを含む商品構成に拡大され、一般大衆層を顧客とした電鉄系のターミナル百貨店が登場した²⁶⁾。

24) 小売中心地性(顧客流入比率)＝商業人口÷人口(商業人口＝年間商品販売額÷都道府県内人口1人当り年間商品販売額(2014年7.1現在)) 小売中心地性はある市区の小売業がその市区の属する都県の顧客をどれだけ吸収しているかを示している。この数値が1なら市区内の消費者が市区内の小売店で全てを購入していると考えることができ、1以上なら市区外の消費者が買い物に来ていることになる。

25) 百貨店誕生の経緯をみると、1877年に殖産興業の政策の一貫として上野公園で開催された「内国勧業博覧会」をきっかけに、様々な形で博覧会のような空間(勧工場など)が各都市に拡散し、それが百貨店へとつながった。勧工場は、洋品、小間物、時計などの商品を現金で陳列販売する店のことで、博覧会の売れ残りを販売したことが始まりという。勧工場の最盛期には、銀座、京橋、上野広小路、牛込肴町など、30軒近く設立されていた(吉見俊哉『視覚都市の地政学—まなざしとしての近代』)。

26) 木綿良行「わが国の百貨店の歴史的経緯とその評価」

新宿駅周辺の百貨店等の集積

図表 I - 12 より、2017 年度の全国の百貨店売上高ランキング 20 位までをみると、東京圏が 12 店舗を占め、新宿駅周辺に立地している 3 店舗が含まれている。

図表 I - 13 より、新宿区内の百貨店の歴史をみると、1923 年に追分交差点に三越マーケットができたのが最初であった。1925 年には、新宿東口駅前に三越百貨店が開店した。1930 年には場所を新宿大通りに移して地上 8 階の三越新宿店を新築した（2012 年 3 月閉店）。また、新宿東口駅前店は食品に特化した「二幸」となり、1980 年にはテレビスタジオが入る「新宿アルタ」になった²⁷⁾。

1926 年には、1877 年に麹町で創業した布袋屋が新宿三丁目に進出した。1933 年には、神田旅籠町に呉服屋を開業していた「伊勢屋丹治呉服店」が、布袋屋の隣地に新宿本店を開店し、1935 年に布袋屋を買収して、一体の建築物となった²⁸⁾。

1931 年に中野で月賦百貨店の「丸井」は、1948 年に丸井新宿駅前店を開店した。1984 年、5 館体制になった後、現在は新宿マルイ本館、マルイアネックス、マルイメンの 3 館になっている。この他、電鉄系百貨店の小田急百貨店（1962 年）、京王百貨店（1964 年）が開店した。

ファッションビルは、1964 年に新宿民衆駅ビルが開設され、新宿ステーションビルになった後、2006 年、ルミネに吸収合併され「ルミネエスト」になった。ルミネは、1976 年、新宿に第 1 号の「ルミネ 1」、1987 年に「ルミネ 2」

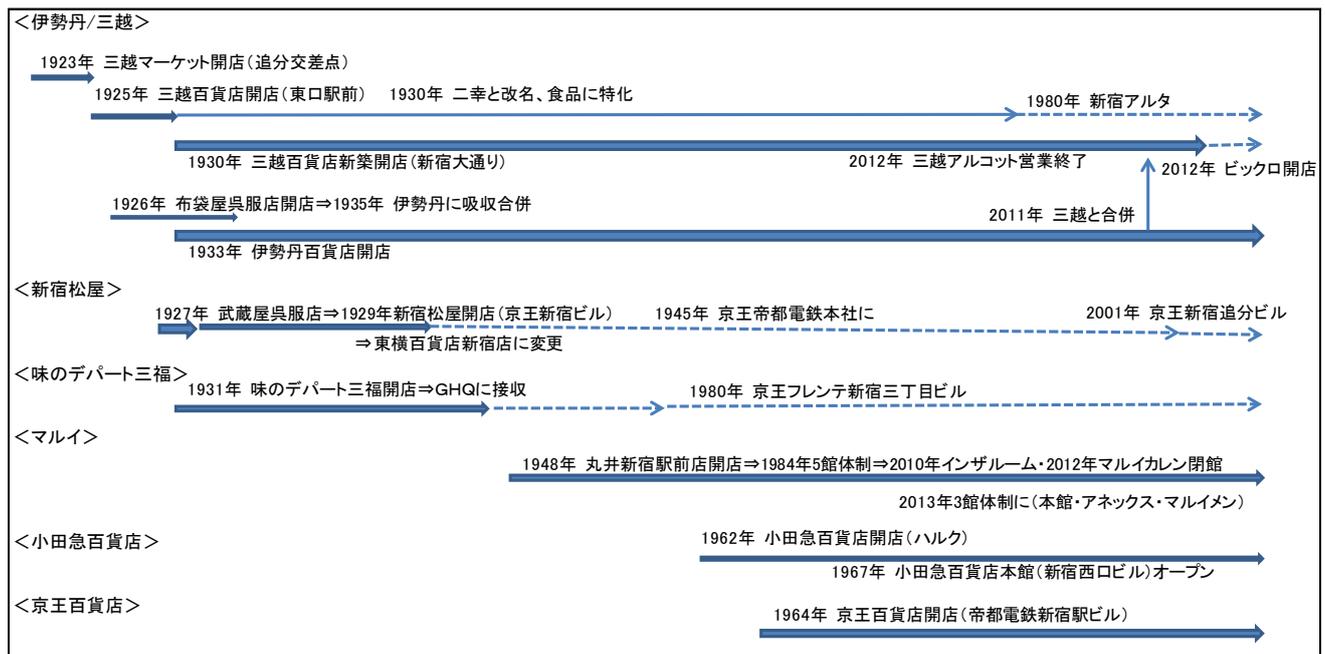
図表 I - 12 全国の百貨店売上高ランキング

順位	百貨店名	所在地	売上高(億円)
1	伊勢丹新宿本店	新宿区	2,685
2	阪急うめだ本店	大阪市	2,205
3	西武池袋本店	豊島区	1,865
4	三越日本橋本店	中央区	1,651
5	高島屋日本橋店	中央区	1,329
6	高島屋大阪店	大阪市	1,299
7	高島屋横浜店	横浜市	1,294
8	JR 名古屋高島屋	名古屋市	1,286
9	松坂屋名古屋店	名古屋市	1,206
10	そごう横浜店	横浜市	1,096
11	あべのハルカス近鉄本店	大阪市	1,023
12	東武池袋本店	豊島区	987
13	東急渋谷本店	渋谷区	918
14	小田急新宿本店	新宿区	914
15	高島屋京都店	京都市	848
16	大丸神戸店	神戸市	824
17	三越銀座店	中央区	810
18	京王新宿本店	新宿区	770
19	JR 京都伊勢丹	京都市	752
20	大丸東京店	千代田区	748

※日経流通新聞「2017年度全国百貨店売上高ランキング」

を開業させた。1973 年には地下街の「サブナード」が、1976 年には西武新宿駅に「西武新宿ペペ」がオープンした。さらに、新宿南口側に、1996 年には「タカシマヤタイムズスクエア」、2016 年には J R 新宿ミライナタワーに「NEWoMAN」が開店した。

図表 I - 13 百貨店の変遷



※各百貨店のHPをもとに作成

27) 三越伊勢丹 HD 企業情報 (HP)。戸沼幸市編著『新宿学』

28) 東京名所図会「新宿三丁目百貨店栄枯盛衰物語～伊勢丹とほてい屋」(HP)、三越伊勢丹 HD 企業情報 (HP)。以下各社 HP

②家電量販店・カメラ関連のギャラリー

新宿駅周辺には、ヨドバシカメラ、ビックカメラ、ヤマダ電機などの家電量販店やカメラのキタムラやカメラのアルプス堂などのカメラ専門店が集積している。図表 I-14 より、2017 年度の決算売上高のランキングをみると、新宿に本社がある「ヨドバシカメラ」が第3位に入っている。

カメラ屋からはじまった家電量販店

ヨドバシカメラは 1960 年に渋谷に藤沢写真商會を創業し、1967 年に新宿区淀橋に（株）淀橋写真商會を設立した。創業当初はカメラや写真用品が主力であったが、その後、パソコン、ブランド品、玩具など取扱商品を増やして、現在の形態になった。当時、カメラは高額商品であり利幅が大きかったこと、その後のカメラ市場の縮小を受け、総合家電量販店になったといわれている。

「ビックカメラ」は 1968 年高崎市で創業、1978 年に池袋に進出した。当初は、カメラ専門店であったが、その後、家電・パソコン等の販売に参入、1990 年以降、ブランド品や玩具など多様な品目を取り扱うようになった。その後、新宿には 2002 年に新宿西口店、2010 年に新宿東口駅前店、2012 年に衣料品のユニクロとのコラボレーションで「ビックロ」を開店している。

1946 年創業の「サクラ屋カメラ店」は、1963 年に「東口店」を開店したが、1990 年代以降の家電量販店の競争激化により、ベスト電器の傘下に入ったが 2010 年、会社は解散した。この他に、1934 年に高知で創業した「カメラのキタムラ」が、新宿駅前に 3 店舗展開している。

ヤマダ電機は、1973 年、前橋市にナショナルショップの「ヤマダ電化センター」を創業し、1983 年「ヤマダ電機」を設立した。新宿区内では、2010 年に「LABI 新宿東口館」、2011 年に「LABI 新宿西口館」が開店している。

カメラ関連のギャラリー・ショールーム

新宿区内には、家電量販店の前身の一つであったカメラ関連のギャラリーやショールームが多く立地している。

新宿に最も早く進出したカメラ関係のメーカーは、コニカミノルタである。1873 年に立ち上げられた薬種問屋「小西屋六兵衛店」が、1902 年、日本で最初の写真感光材料国産化のために研究・製造拠点「六

図表 I-14 2017 年度 家電量販店 売上高ランキング

順位	家電量販店	創業年	本社所在地
1	ヤマダ電機	1973 年	高崎市
2	ビックカメラ(コジマ含む)	1978 年	豊島区高田
3	ヨドバシカメラ	1960 年	新宿区北新宿
4	エディオン	2001 年	大阪市
5	ケーズデンキ	1947 年	水戸市
6	ノジマ	1959 年	横浜市
7	上新電機	1948 年	大阪市
8	ベスト電器	1953 年	福岡市
9	キタムラ	1934 年	横浜市
10	ラオックス	1930 年	墨田区

※各社HPから2017年度決算資料をもとに作成

桜社」を、西新宿（現新宿中央公園付近）に設置した。同社は 1963 年に新宿副都心の開発により八王子へ移転した。また、1954 年、銀座に「小西六フォトギャラリー」を開設し、1988 年には新宿東口に移転して「コニカプラザ」となった。1993 年には新宿高野ビルに移転、「コニカミノルタプラザ」に改称したが、2017 年 1 月、運営を終了した。

オリンパスは、1919 年、「高千穂製作所」として渋谷区で創業し、顕微鏡等の理化学計器類の製造・販売を始めた。戦災で本社と本社工場を焼失したが、焼けなかった渋谷工場に本社を再建した。2003 年、オリンパス株式会社に社名変更し、新宿に本社を移転した。1997 年、神田小川町にある「オリンパスプラザ東京」を 2015 年に本社近隣の西新宿のビルに移してリニューアルオープンした。

HOYA は、1941 年、保谷町（現西東京市）で「東洋光学硝子製造所」として創業した。1984 年、中落合に本社を移転、2008 年、ペンタックス（株）と合併した。2011 年、ペンタックスより引き継いだイメージング・システム事業をリコーに譲渡し、2016 年に西新宿に移転した。「リコーイメージングスクエア新宿」は、1981 年に設立され、2007 年には新宿センタービルに移転している。

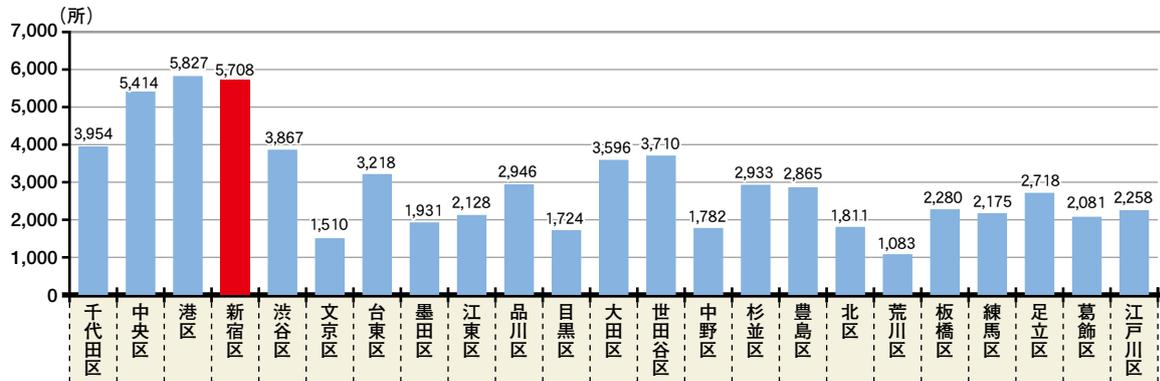
この他、ニコンは、新宿区内にショールーム「THE GALLERY」を開設している。ニコンは、1917 年、東京計器製作所の光学計器部門と岩城硝子製造所の反射鏡部門を統合し「日本工学工業株式会社」として文京区小石川に設立された。関東大震災後、光学兵器の開発を主に行っていたが、終戦後は双眼鏡やカメラ等の民生用光学機器に転換した。1968 年銀座に写真活動の場となる「ニコンサロン」を開設、1971 年には「新宿ニコンサロン」を開設し、2017 年に「THE GALLERY」としてリニューアルオープンした。

(2) 飲食業

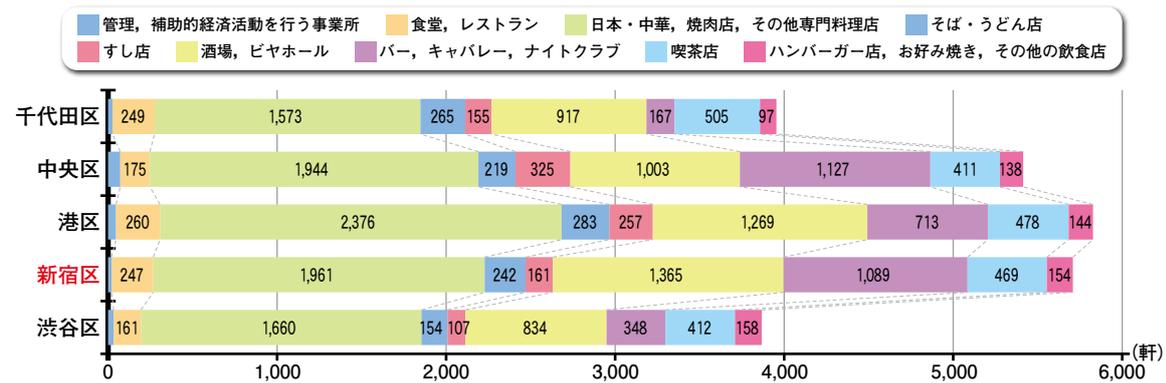
図表 I - 15 より、23 区の飲食店を営む事業所数をみると、新宿区は 5,708 所と港区に次ぎ 2 番目に多い。特に、図表 I - 16 より、都心 5 区（千代田区、

中央区、港区、新宿区、渋谷区）の種類別飲食店舗数をみると、新宿区は酒場・ビヤホール、バー・キャバレー・ナイトクラブなどの飲食店や喫茶店が多い。

図表 I - 15 23 区の飲食店を営む事業所数



図表 I - 16 都心 5 区の種類別飲食店舗数



※2014年「経済センサス」より作成

ここでは、酒場等で夜を楽しむ「ナイトライフ」と多国籍料理店、喫茶店を取り上げる。

①ナイトライフ

新宿区内には、新宿駅などの駅周辺や歌舞伎町の繁華街に加え、新宿ゴールデン街、思い出横丁、神楽坂、荒木町などの昭和レトロな飲み屋街がある。昭和初期の新宿にはカフェやバーが多くあり、郊外にできた住宅開発によって生まれた新しい中間層であるサラリーマンや、学生、芸術・文学青年などが集まった。満州事変の頃から支那事変まで戦時景気が続き、三越裏の地域で甲州街道と新宿駅に囲まれる三角地帯や、二幸裏、新東宝裏から二丁目遊郭街に続く、今日の飲食店街の広がる地域には夜の飲食

店・興行屋が多く立地していった²⁹⁾。戦時中、空襲により焼失してしまうが、戦後、エリアごとにバー、キャバレーなどの飲食店が集積した。

闇市からはじまった歌舞伎町

歌舞伎町は、もともと淀橋台地を下る低湿地であったが、淀橋浄水場の設置に伴い出た残土により一帯の低地は埋め立てられ、住宅、商店、学校などが立地していった。空襲により壊滅的な被害を受けたが、戦後、角筈地区の町会長を務めていた鈴木喜兵衛を中心に、劇場や映画館、ダンスホールなどの建設をもちこんだ歌舞伎町復興計画が立てられた。

戦後の新宿駅周辺には、露天商が広がっていたが、やがてGHQの方針による露店撤去令と戦災復興等土

29) 新宿大通商店街振興組合「新宿大通り」(HP)

地区画整理事業（1948年に都市計画決定）によって、露店や闇市の取り締まりが厳しくなり、まとまった土地が残っていた歌舞伎町に、露天商が集団移転した³⁰⁾。

復興計画は実現されることなく終わったが、歌舞伎公演ができる劇場の誘致を目指していたため、1948年に「歌舞伎町」と名付けられた。1950年には、「東京文化産業博覧会」が開催され、博覧会は失敗に終わったが、その後の興行街の原型となる建築物が残った。1956年には、東急文化会館が完成し、映画館「ミラノ座」やスケートリンクが併設され、「新宿コマ劇場」が開業した。劇場を中心として周辺の飲食店も潤い、歌舞伎町は国内有数の繁華街として発展していった³¹⁾。

文化人を集める新宿ゴールデン街

新宿ゴールデン街は、戦後「赤線」に対して「青線」とよばれる非公認の売春宿の集まる地域であった。1949年の露店撤去令によって、新宿二丁目からも、多くの店舗が新宿三光町に移転し、今の新宿ゴールデン街が形成された。1958年、売春防止法の施行を受け、木造建築の建物は残したまま、多くの店は飲食業などに業態変更した³²⁾。

その後、新宿ゴールデン街に来る作家が直木賞や芥川賞をとったことにより、文化人が集まる場として脚光を浴びた。店ごとに演劇関係者、映画関係者など異なる客層が集った³³⁾。そして、現在のような作家や文化人の集まる飲食店街となった。

インタビュー：新宿ゴールデン街商業組合 外波山氏

劇団「椿組」の主宰を務める外波山氏は、新宿を根城に演劇活動を行っている。役者だけでは生活できないため、約40年前にゴールデン街の「クラクラ」を引き継いで店を始めた。外波山氏は、「戦後は青線だったため茶屋が多く、いかがわしさもあったが、店のルールがわかれば、2回も来ればその店の常連になれた」という。「演劇や映画関係者が多く、田中小見昌や滝田ゆう、立松和平、中上健次、俵万智なども訪れていた。今はあまり見られないかもしれないが、昔のゴールデン街には、喧嘩をしながら芸術論を語る話がたくさんあった。現在は、昔、常連で来ていた親たちの息子世代が訪れている」という。

遊郭からはじまった新宿2丁目

新宿2丁目は、1699年、内藤新宿の宿駅が開設されてから戦前まで、遊郭として栄えた場所であった。1921年の新宿大火により新宿2丁目の遊郭街が全焼したが、53軒の貸座敷が再建し、「新宿遊郭」とよばれるようになった。関東大震災後、交通の発展により、新宿駅周辺は繁華街として発展したが、新宿2丁目の遊郭には、妓楼が53軒あり、娼妓数500人余りいた³⁴⁾。

戦後の新宿2丁目は、戦前からの遊郭を引き継ぐ「赤線」と呼ばれる地帯であった³⁵⁾。1958年、売春防止法の施行を受け、旅館などに業態変更する店もあったが、多くが店をたたんだ。その空白地帯にこれまで新宿3丁目付近に点在していたゲイバーが移ってきた³⁶⁾。

花街として発展した神楽坂

23区には現在、向島（22軒）、新橋（8軒）、浅草（8軒）、赤坂（5軒）、大井大森（5軒）、大塚（4軒）、神楽坂（4軒）などの花柳界が残っている。花柳界は江戸時代から始まり、明治時代には芸娼妓解放令が発令され、届出により誰でも芸者になることができるようになり、新しい花街が誕生した。東京では明治政府の高官が多く訪れた新橋花柳界や、軍人を受け入れた赤坂花柳界は、特に発展をとげていた。新橋や日本橋に比べ、四等地の神楽坂や深川は安い花代であったため、主な客層は周辺地域の軍事施設の軍人や大学の書生であった³⁷⁾。

神楽坂は、1857年頃、善国寺の門前に非公許の遊女屋の集まる岡場所が形成され、風紀の取締りから、遊女から芸妓への転身が進み「花街」となった。

30) 稲葉佳子『台湾人の歌舞伎町 — 新宿、もうひとつの戦後史』

31) 歌舞伎町商店街振興組合「歌舞伎町オフィシャルポータルサイト」(HP)

32) 渡辺英綱『新宿ゴールデン街物語』

33) 「プーサン」や「モッサン」のママが佐木隆三や吉行淳之介らの文化人を連れてくるようになったといわれている（増淵敏之『路地裏が文化を生む！細街路とその界隈の変容』）。

34) 本段落は、戸沼編著『新宿学』参照。

35) 赤線とは、GHQによる1946年の公娼廃止令から売春防止法施行までの間、特殊飲食店の営業を認められた地帯である。

36) 砂川秀樹『新宿2丁目の文化人類学 — ゲイ・コミュニティから都市をまなぐ』

37) 本段落は、東京花柳界情報舎「花柳界の歴史」(HP)や牛垣雄矢「東京内部地域における商店街の歴史的变化 — 神楽坂を事例として」を参照

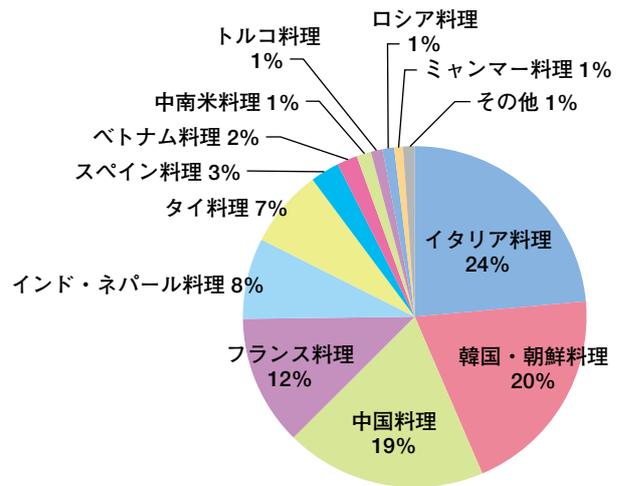
1874年の火事により神楽坂の花街は全焼したが、1887年には多くの夜店で賑わい、演芸場や寄席も増えた。日清・日露戦争時に、三業地（料理店・置屋・待合）として発展した。

② 多国籍料理店

図表 I - 17 より、新宿区内にある多国籍料理店の数は、全部で365件あり、イタリア料理が86件(24%)で最も多く、韓国・朝鮮料理、中国料理、フランス料理と続く。

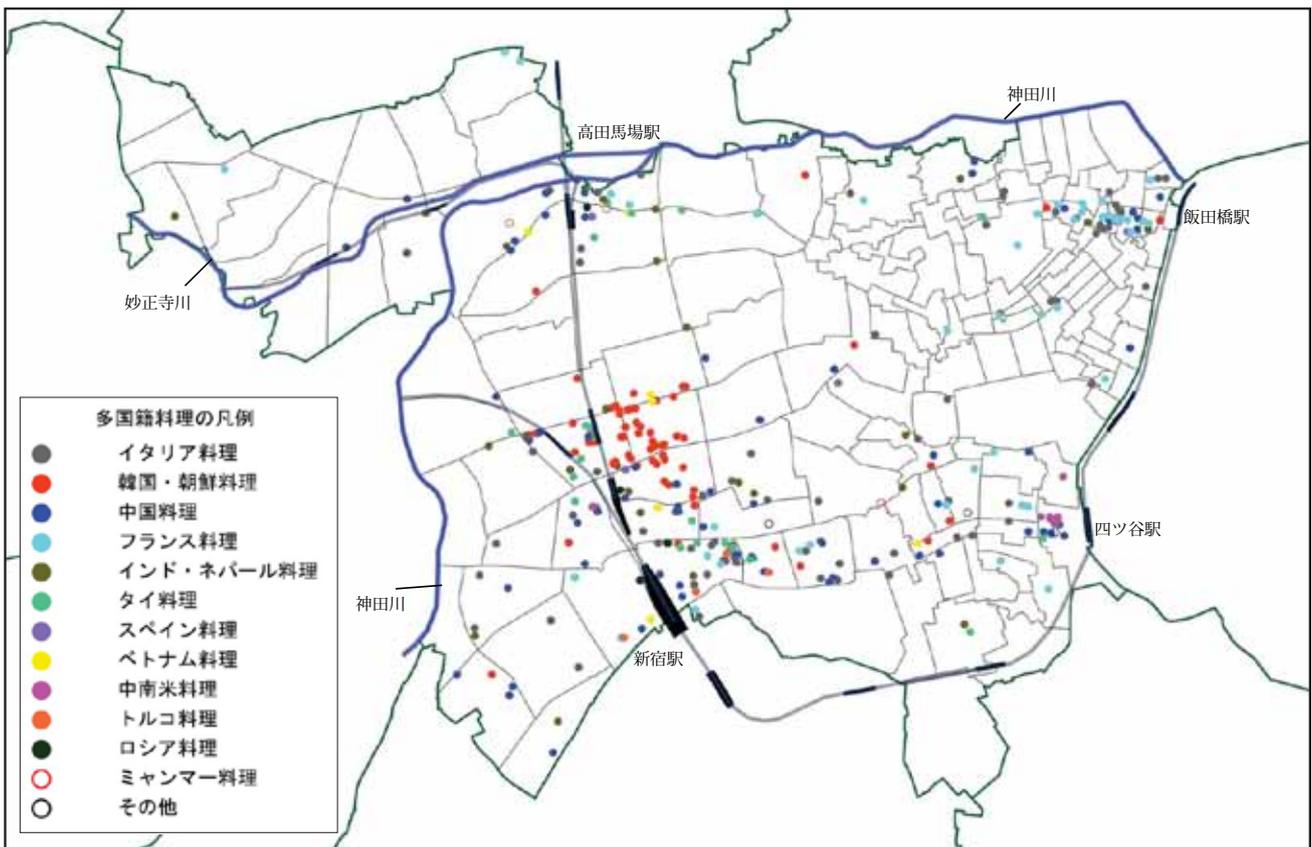
図表 I - 18 より、多国籍料理店の分布をみると、イタリア料理は新宿駅周辺と神楽坂に、フランス料理は神楽坂に多い。大久保駅、新大久保駅周辺には韓国・朝鮮料理店はもちろん、中国料理店、インド・ネパール料理店が多く立地している。その他、新宿区には様々な国の料理店が分布している。

図表 I - 17 国別多国籍料理店(総数：365)



※2017職業別タウンページをもとに作成
(新宿に本店がないチェーン店を除く)

図表 I - 18 多国籍料理店分布図



※2017職業別タウンページをもとに作成

外国籍料理店の進出

1854年の日米和親条約締結により、欧米各国との国交が開始し、新たな西洋の食文化が伝わった。新宿も多くの多国籍料理店が進出し、1909年開店の「中村屋」を始め、1947年にフランス料理の「墨繪」、

同年に台湾料理の「三珍居」、1954年に中国料理の「天津飯店」、1960年にロシア料理の「スングアリー」、1963年に北京料理の「随園別館」、1972年にスペイン料理の「カサベリヤ」などの多国籍料理店が開店した。

中村屋は、1901年に相馬夫妻が、帝国大学正門前のパン屋を譲り受け開業した。その後、新宿追分に支店を開設し、1909年には店舗拡大のため、現在の地である新宿3丁目に移転した。また、戦後、大陸から引き揚げ者や戦勝国であった中国や台湾、ロシアなどから外国の「食文化」が伝わり、ホルモン料理、焼肉、ロシア料理などの店が増えた³⁸⁾。

地域ごとの多国籍料理店の特徴

大久保・百人町に韓国・朝鮮人が増えたのは、1950年にロッテの工場が新設されたことによる、在日韓国・朝鮮人が職を求めて集まってきたからといわれる³⁹⁾。1980年代になり歌舞伎町の飲食・サービス業で働く、ニューカマーが増えた⁴⁰⁾。1990年代には、職安通りに近い地区からエスニック系施設の立地が進んだ⁴¹⁾。最初は中国、台湾、マレーシア・タイなどの東南アジア系の店舗が立地し始め、その後、韓国系店舗が6割以上を占めていった⁴²⁾。2004年の冬ソナブームにより「韓流」が流行し韓国料理店はさらに増えた。近年、「脱・韓流」の動きがあり、「新宿韓国商人連合会」によると、2011年には500店舗あった焼肉店や商店などが、2012年に200店が閉店したという。かわりに、ネパール料理店、韓国からのフランチャイズチェーンの出店などもみられる⁴³⁾。

神楽坂には、日仏会館、リセ・フランコ・ジャポネが立地していたことに加え、神楽坂の景観を好んだフランス人が住んだことから、フランス料理のレストランが多く立地している⁴⁴⁾。

③ 喫茶店

図表 I - 16 (P.16) より、都心5区の種別飲食店舗数をみると、新宿区の喫茶店の数は469軒で、都心5区のうち千代田区、港区に次ぎ3番目に多い。

文化人に愛された喫茶店・カフェ

日本で最初の喫茶店は、1911年、銀座に開業したカフェ・プランタンと言われている。東京美術学校(現東京芸術大学)出身の松山省三が、パリのカフェのような文人や画家が集うサロンを作りたいと、友

人の平岡権八郎とともに開業した。2階を会員専用にしており、洋画家の黒田清輝、岸田劉生、作家の永井荷風、岡本綺堂、島村抱月ら新宿にもゆかりのある文化人が多数会員になっていた。これに続いて、カフェ・ライオン、カフェ・パウリスタが銀座に相次いでオープンし、芥川龍之介や平塚らいてうなど文化人のほか、学生や社会人が出入りした。カフェは小説などの舞台になり、新宿にゆかりのある作家の描いた作品では、永井荷風「つゆのあとさき」、広津和郎「女給」、谷崎潤一郎「痴人の愛」、林芙美子「放浪記」などがある。

新宿区内では、関東大震災後、交通機関の集中と東京西郊の人口の増加により、新宿駅周辺は、デパートや映画館、飲食店やカフェとともに喫茶店も増加した。1931年、車屋の先代が「武蔵野茶廊」を新宿駅東口に開き、大学教授やインテリ、無名時代の田村泰次郎や富田常雄が訪れたが、2004年に閉店している。

また、1947年に新宿の焼け跡の一角に「青蛾」という喫茶店が誕生した。マスターの五味敏郎は、映画関係の仕事をしていましたが、終戦後、絵を描くための自由な時間を取るため喫茶店を始めた。また、店の2階は、日本画家のグループが結成した創造美術、映画助監督協会の会合、軽演劇のムーラン・ルージュ新宿座の俳優宮坂将嘉・三崎千恵子夫妻、映画監督の新藤兼人など、様々な会合に使用された。1950年、区画整理により、隣接地に移転した。高度経済成長が終わり、時代の風潮や地価の上昇もあり、1981年に閉店している。

早稲田大学近くでは、1947年、早大OBの富安龍雄が、自宅を改装し自らの蔵書を開放して「茶房早稲田文庫」を始めた。同店は、文学部の学生を中心に、談話室のような役割を果たし、井伏鱒二、尾崎一雄、五木寛之ら、早大出身者が店を訪れていたが、1984年に閉店した。

うたごえ運動と関連の深い喫茶店

歌声喫茶の草分けは、歌舞伎町の西武新宿駅近くに1954年に開店した「灯」である。もとは、ロシア料理専門店であったが、ロシア民謡にあわせて客

38) 佐藤洋一・ぶよう堂編集部『地図物語 あの日の新宿 — 昭和25年から30年代の思い出と出会う』

39) AISE(株)「WOW 新大久保」(HP)

40) ニューカマーとは、1980年代以降に日本に渡り、長期滞在する外国人のことを指す。

41) 稲葉佳子『オオクボ都市の力 — 多文化空間のダイナミズム』。エスニック系施設とは、エスニック集団独特の商品やサービス、外国人を対象にしたことを明示的に判断できる施設のこと。

42) 稲葉佳子『オオクボ都市の力 — 多文化空間のダイナミズム』

43) 「読売新聞」2017.1.12

44) 牛垣雄矢「商業地における地域的個性の形成に関する一考察 — 東京都心周辺地域を事例として」

が合唱したことから、アコーディオン奏者を雇い歌える店に生まれ変わったという。昭和 20 年代から 30 年代にかけて声楽家の関鑑子が始めた「うたごえ運動」によって、労働歌やロシア民謡が歌われるようになり、職場を中心に合唱サークルが急速に広がっていった。昭和 30 年代には、「カチューシャ」「蟻」「エルベ」「牧場」「どん底」などができ、若者が歌声喫茶に集うようになった。しかし、労働運動・学生運動の退潮などにより、ロシア民謡や労働歌は歌われなくなり、次々と歌声喫茶は姿を消した⁴⁵⁾。

名曲喫茶とジャズ喫茶

戦後、銀座の三越裏の一带に名曲喫茶、シャンソン喫茶、ジャズ喫茶、歌声喫茶、ロック喫茶などの「音楽系喫茶」と呼ばれる喫茶店が開店した。LP レコードなど個人では入手困難な時代であり、音楽鑑賞をする場所として人気になった。ここでは名曲喫茶とジャズ喫茶に焦点をあてる。

レコードを流した名曲喫茶の草分け的存在として、新宿駅東口の「風月堂」がある⁴⁶⁾。「風月食品工業」のパン工場で焼いた洋菓子を販売する店として 1947 年に開店し、飲み物の提供や、クラシックが好きだったオーナーのレコードを店内でかけるようになった。新宿駅東口の区画整理により、1955 年に中央通りに面した店舗を新築した。店には、音楽、美術、文学、映画、演劇などさまざまなジャンルに関心を持つ人々の文化的なサロンになった。ロックや現代音楽が中心になり、当時の最新トレンドの前衛・抽象絵画の個展を企画するなど、芸術家の作品発表の場となった。当時の来店者には、岡本太郎、寺山修司、岸田今日子、蜷川幸雄がいた。東京オリンピックの開催を機に、外国人観光客、ビート族やヒッピーなど様々な人が訪れた。また、唐十郎や磨赤児などのアング

ラ演劇のメンバーや学生運動家が訪れ、流行に影響を受けた若者が集まってきたが、1973 年閉店した。

1950 年、中央通り沿いの風月堂の隣に開店した「らんぶる」があり、区画整理により新宿 3 丁目の現在地に移転した。山荘風の内装で、400 名もの客を収容し、専従者を置いて演奏するレコードのプログラムと解説にあたった。歌舞伎町には、名曲喫茶の「でんえん」(1953 年)と「スカラ座」(1954 年～2015 年)が立て続けに開業した。

また、アメリカでモダンジャズが全盛期を迎え、日本にもジャズブームがやってきて、「ジャズ喫茶」が続々と生まれた。レコードもステレオも高価で簡単に入手できず、ライブを聴く機会もなかったため、最新のジャズに接するには、ジャズ喫茶に通うしかなかった。日本初のジャズ喫茶は、1929 年に本郷赤門前に開店した「ブラックバード」であると言われている。1960 年代に新宿には、「キーよ」「ヴィレッジ・ゲイト」「木馬」などのジャズ喫茶が乱立していた。現在は、国内に 550 軒以上のジャズ喫茶が営業しており、23 区には 93 軒あり、うち新宿区には 14 軒と最も多い(図表 I-19)⁴⁷⁾。

図表 I-19 新宿区内のジャズ喫茶一覧

番号	ジャズ喫茶店名	住所
1	いーぐる	四谷 1-8
2	イントロ	高田馬場 2-14-8
3	喫茶茶会記	大京町 2-4
4	キャット	新宿 3-26-2
5	サムライ	新宿 3-35-5
6	スティック	新宿 3-22-10
7	ニカ	新宿 3-9-2
8	シラムレン	歌舞伎町 1-1-10
9	ジャズナッティ	西早稲田 1-17-4
10	DUG	新宿 3-15-12
11	ナルシス	歌舞伎町 1-13-6
12	マイルストーン	高田馬場 1-23-9
13	コーナーポケット	神楽坂 1-14
14	ゆびそ	西新宿 7-16-6

45) 奥原哲志『琥珀色の記憶 — 時代を彩った喫茶店』

46) 喫茶店の記述は、奥原哲志『琥珀色の記憶 — 時代を彩った喫茶店』

47) ジャズ喫茶の記述は、「ジャズ喫茶案内 Gateway To Jazz kissa」(HP)。なお、このうち DUG はライブハウスとしても使用されているため、次節でライブハウスとして言及している。

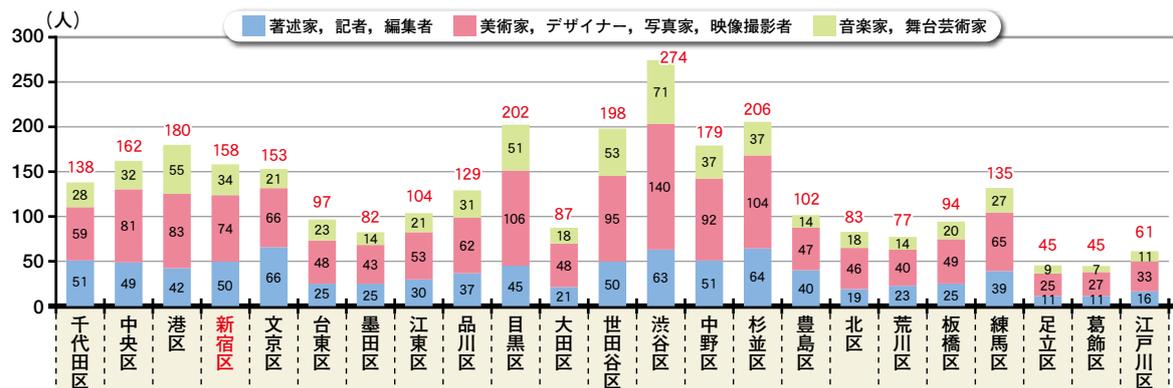
4. 文化資源の集積

(1) 芸術家

図表 I - 20 より、23 区の人口 1 万人あたりの芸術家人数をみると、新宿区内に居住する芸術家の数は、158 人で、渋谷区、杉並区、目黒区、世田谷区、港区、中野区、中央区に次ぎ 8 番目に多い⁴⁸⁾。この

内訳は、美術家、デザイナー、写真家、映像撮影者が 74 人、著述家、記者、編集者が 50 人、音楽家、舞台芸術家が 34 人となっている。

図表 I - 20 23 区の人口 1 万人あたりの芸術家人数



※2010年「国勢調査」より作成

新宿区に一時居住したことがあるという新宿区ゆかりの芸術家は、現代に至るまで多数いるが、ここではその黎明期である江戸から昭和初期の文学者を中心に取り上げる。

①江戸時代の文学者

江戸時代中期から後期にかけては、狂歌師・劇作者・漢詩作者・考証随筆家として活躍した大田南畝（1749～1823）、「南総里見八犬伝」の滝沢馬琴（1767～1848）、狂歌師の便々館湖鯉鮒（1740～1818）、浮世絵師の月岡芳年（1839～1892）が一時居住していた。また、1839年に湯島に生まれた落語家の三遊亭円朝は、1888年から1896年まで新宿に居住していた⁴⁹⁾。

②明治時代から昭和初期の文学者

江戸時代から俳諧を読むための場の「連」が各地に生み出され様々なメンバーが集った。1920年代になると、ヨーロッパで文人のサロンがみられたのと同様に、日本においても、文学の大衆化を背景に、多くの文人らが出版社周辺やカフェを中心に集まってきた。文人らの集会所となったのは、カフェのプランタンやパウリスタ、レストランのメゾン鴻巣などであった。洋行帰りの学者らは、同志を求めて集まり、貸家のある場所を中心に文士村を形成した。芥川龍之介、久保田万太郎、室生犀星らの田端文士村、広津和郎、川端康成、尾崎士郎らの馬込文士村、新宿区内では落合文士村、大久保文士村などが形成された⁵⁰⁾。

48) 本項での芸術家は、国勢調査の職業中分類別の「美術家、デザイナー、写真家、映像撮影者」「著述家、記者、編集者」「音楽家、舞台芸術家」の3つの類型の合計と定義している。

49) 「新宿区 新宿ゆかりの人物」(HP)

50) 「東京都立図書館 江戸東京デジタルミュージアム」(HP)、池田平彌三郎・若林真・中田美喜・安東伸介「シンポジウム『文学における東京』」

図表 I-21 地域別にみた新宿区ゆかりの主な文学者一覧

番号	名前	生没年	在籍学校(現名称)	番号	名前	生没年	在籍学校(現名称)
牛込	夏目漱石	1867-1916	東京大学	大久保・戸塚	小泉八雲	1850-1904	
	尾崎紅葉	1867-1903	東京大学		坪内逍遙	1859-1935	東京大学
	有島武郎	1878-1923	北海道大学		江戸川乱歩	1894-1965	早稲田大学
	生田春月	1892-1930	独逸語専修学校		国木田独歩	1871-1908	早稲田大学
	泉鏡花	1873-1939	北陸英和学校		島崎藤村	1872-1943	明治学院大学
	押川春浪	1876-1914	早稲田大学		高田敏子	1914-1989	女学校
	葛西善蔵	1887-1928	東洋・早稲田大学聴講生		太宰治	1909-1948	東京大学
	加能作次郎	1885-1941	早稲田大学		田村泰次郎	1911-1983	早稲田大学
	川上眉山	1869-1908	東京大学		永井荷風	1879-1959	筑波大付属高校
	北原白秋	1885-1942	早稲田大学		若山牧水	1885-1928	早稲田大学
	窪田空穂	1877-1967	早稲田大学		石井柏亭	1882-1958	
	島村抱月	1871-1918	早稲田大学		岩野泡鳴	1873-1920	明治学院・東北学院
	田山花袋	1872-1930			片上伸	1884-1928	早稲田大学
	近松秋江	1876-1944	早稲田大学		国枝史郎	1887-1943	早稲田大学
	広津柳浪	1861-1928	東京大学		志賀直哉	1883-1971	学習院中等科
	正宗白鳥	1879-1962	早稲田大学	種田山頭火	1882-1940	早稲田大学	
	柳川春葉	1877-1918		戸川秋骨	1870-1939	明治学院	
	吉田健一	1912-1977	ケンブリッジ大学	吉江喬松	1880-1940	早稲田大学	
	秋田雨雀	1883-1962	早稲田大学	會津八一	1881-1956	早稲田大学	
	宇野浩二	1891-1961	早稲田大学	林芙美子	1903-1951	高等女学校	
	江見水蔭	1869-1934		安倍能成	1883-1966	東京大学	
	小川未明	1882-1961	早稲田大学	尾崎一雄	1899-1983	早稲田大学	
	大佛次郎	1897-1973	東京大学	九条武子	1887-1928		
	金子薫園	1876-1953		舟橋聖一	1904-1976	東京大学	
	金子光晴	1895-1975	早稲田大・東京芸大・慶応大	村山知義	1901-1977	東京大学	
	楠山正雄	1884-1950	早稲田大学	矢田津世子	1907-1944	麹町女学校	
	サトウハチロー	1903-1973		吉屋信子	1896-1973	女学校	
	佐藤春夫	1892-1964	慶應義塾大学	大田洋子	1903-1963	高等女学校	
	竹久夢二	1884-1934	早稲田実業学校	尾崎翠	1896-1971	日本女子大学	
	谷崎精二	1890-1971	早稲田大学・工学院大学	片岡鉄平	1894-1944	慶應義塾大学	
	徳田秋聲	1871-1934	金沢大学	神近市子	1888-1981	津田塾大学	
	半井桃水	1860-1926	共立学舎	川路柳虹	1888-1959	東京芸術大学	
	野口雨情	1882-1945	早稲田大学	芹沢光治吉良	1897-1993	東京大学	
広津和郎	1891-1968	早稲田大学	千家元麿	1888-1948			
松岡譲	1891-1969	東京大学	壺井栄	1899-1967			
真山青果	1878-1948		壺井繁治	1897-1975	早稲田大学		
三木露風	1889-1964	早稲田大学・慶應義塾大学	萩原恭次郎	1899-1938	前橋中学校		
森田草平	1881-1949	東京大学	平林たい子	1905-1972	女学校		
芥川龍之介	1892-1927	東京大学	宮本百合子	1899-1951	日本女子大学		
安藤鶴夫	1908-1969	法政大学	柳瀬正夢	1900-1945	日本美術院研究所		
岸田国土	1890-1954	東京大学	吉川英治	1892-1962			
斎藤茂吉	1882-1953	東京大学	西條八十	1892-1970	早稲田大学		
中島敦	1909-1942	東京大学	佐多稲子	1904-1988			
長田幹彦	1887-1964	早稲田大学	相馬黒光	1876-1955	明治女学院		
長谷川時雨	1879-1941		田辺茂一	1905-1981	慶應義塾大学		
二葉亭四迷	1864-1909	東京外国語大学	内田魯庵	1868-1929	早稲田大学・立教大学		
三島由紀夫	1925-1970	東京大学	大町桂月	1869-1925	東京大学		
宮嶋資夫	1886-1951		中野重治	1902-1979	東京大学		
内田百閒	1889-1971	東京大学	吉井勇	1886-1960	早稲田大学		
宇野千代	1897-1996	高等女学校					
里見弴	1888-1983	東京大学					
武林無想庵	1880-1962	東京大学					
中原中也	1907-1937	立命館大学					
馬場孤蝶	1869-1940	明治学院大学					
三上於菟吉	1891-1944	早稲田大学					
三宅やす子	1890-1932	高等女学校					

※新宿歴史博物館編『新宿ゆかりの文学者』より作成

牛込地区の文学者

牛込地区は早い時期から市街地化し、なかでも神楽坂は「山の手銀座」と呼ばれ、近隣に大学が集積していたことから、文人らが多く住んでいた。1877年には文京区本郷に東京大学、1882年には神楽坂の西側にあたる戸塚村(現西早稲田)に、東京専門学校(現

早稲田大学)、1906年には牛込神楽町に東京物理学校(現東京理科大学)が創設されている。図表 I-21 より、新宿ゆかりの文学者をみると、牛込地区には、尾崎紅葉と夏目漱石などが居住していた⁵¹⁾。ここでは、尾崎紅葉と夏目漱石を中心としたグループを取り上げる。図表 I-22 は尾崎紅葉、図表 I-23 は夏

51) 新宿歴史博物館編『新宿ゆかりの文学者』

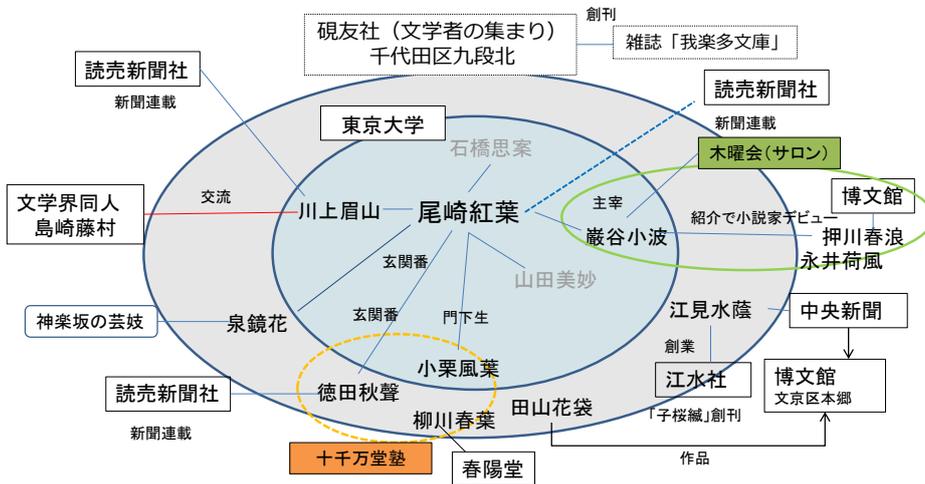
目漱石を中心とした文学者の集まりを図表化したものである。

1889年から横寺町に尾崎紅葉が居住したことで、九段の硯友社周辺の文学者やその弟子たちも住むようになった。硯友社は、尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案、丸岡九華によって発足し、巖谷小波、川上眉山、小栗風葉らが参加

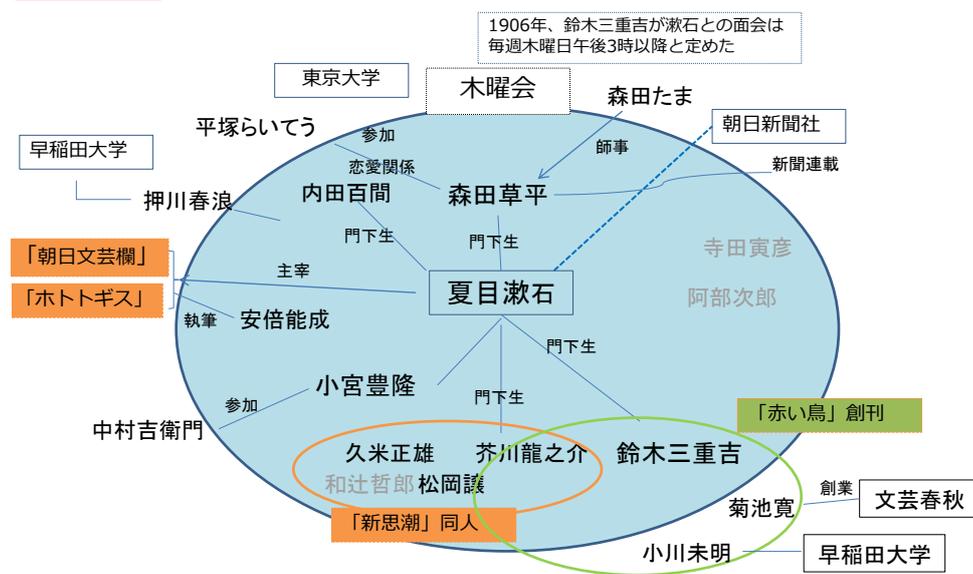
した文学結社であり、文芸雑誌「我楽多文庫」を発刊した。

早稲田南町には、夏目漱石の居宅「漱石山房」があり、門下生ら多くの文学者たちが出入りしていた。1906年、門下生の鈴木三重吉が毎週木曜日を漱石の面会日と定め、「木曜会」となり、森田草平、内田百間、芥川龍之介の他、歌舞伎の中村吉衛門らが参加していた。

図表 I-22 牛込地区の文学者の集まり(尾崎紅葉中心)



図表 I-23 牛込地区の文学者の集まり(夏目漱石中心)



大久保・戸塚地区の文学者とサロン

大久保・戸塚地区には、早稲田大学で教鞭をとった坪内逍遙を中心としたネットワークや文士たちのサロンがあった。図表 I-24 は、坪内逍遙を中心とした文学者の集まりを図表化したものである。坪内逍遙は、1906年に島村抱月らと新劇運動のための文芸協会を設立し、1909年には余丁町の自宅敷地内に「文芸協会演劇研究所」を開設した。この1期生には松井須磨子がいたが、1913年に島村抱月と芸術座を開設したため、研究所は解散した。

明治後期の久保保地域では、岩野泡鳴や国木田独

歩を中心に、いくつかのサロンが生まれ、作家や画家たちが交流を行っていた。「十日会」は自然主義作家の岩野泡鳴を中心としたお茶会であり、1年たらずで会場は日本橋に移転してしまうが、岩野泡鳴を中心にその妻である岩野清子、愛人である荒木郁子らの女流作家をつないだ。次に、岡落葉・茅原茂らによる「大久保文学倶楽部」には、正宗得三郎、前田夕暮らが参加した。また、国木田独歩による「大久保会」には、作家の水野落舟、吉江孤雁、窪田空穂らの他、国木田独歩の『武蔵野』の装丁を担当した画家の岡落葉も参加していた⁵²⁾。

52) 茅原健『新宿・大久保文士村界限』

落合地区の前衛芸術家、プロレタリア作家

落合地区では、大正末期に文士達が集まって住むようになった。最初は、村山知義を中心とした前衛芸術家やプロレタリア文芸の作家が集まるようになったが、その後は尾崎一雄、壇一雄らが居住するようになった⁵³⁾。

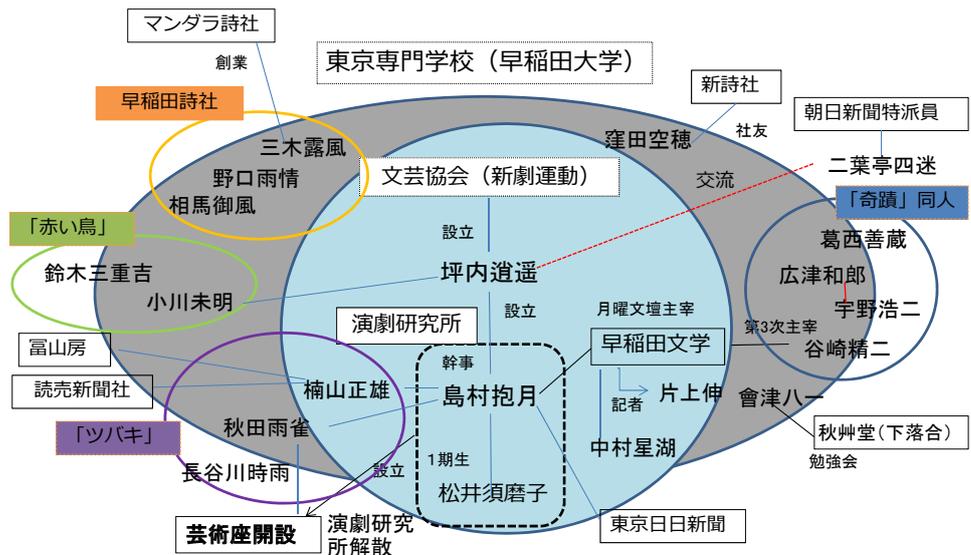
また、この時期に多くの宅地開発が行われ、西武グループの創業者の堤康次郎が、1914年に目白の土地を購入し、

1922年から1925年にかけて「目白文化村」を開発した。1922年には、東京土地住宅(株)が、芸術家が住むための「アビラ芸術村」を開発した。1925年には、東京土地住宅(株)が破たんし、事業はストップしたが、島津家の所有地は独自に宅地開発事業が続けられ、50棟の住宅を建設し、松本竣介、林芙美子など、多くの芸術家が住むことになった⁵⁴⁾。

その他の地区の芸術家

四谷地区には、三島由紀夫が生まれ育った他、斉藤茂吉が晩年を過ごしている。現在の新宿1丁目に

図表 I-24 大久保・戸塚地区の文学者の集まり(坪内逍遙中心)



あった「四谷花園アパート」には、装幀家・美術評論家である青山二郎の他、中原中也、小林秀雄らが住んでいた⁵⁵⁾。青山の部屋には、三好達治、大岡昇平、永井龍男らも集い、通称「青山学院」と呼ばれた文芸サロンの一つであった。現在、跡地は「花園アパート跡」として新宿区の地域文化財に認定されている。

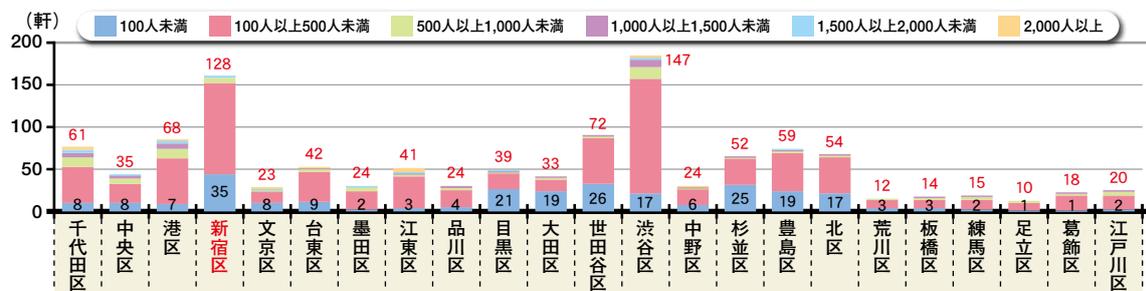
また、柏木には、幸徳秋水、森近雲平、大杉栄、荒畑寒村、堺利彦を始めとする社会主義者が多く住んだ。大杉栄は官憲の厳しい監視を逃れるために、当時としては郊外であった柏木に転居してきたと言われている⁵⁶⁾。

(2) 劇場・映画館・劇団

図表 I-25 より、23区の劇場・ライブハウスの収容人数別の施設数をみると、新宿区内には128軒の劇場・ライブハウスがあり渋谷区に次いで多い。

収容人数100人未満の施設でみると、新宿区は第1位の35軒で小規模な施設が多くなっている。ここでは、このうち劇場と映画館・劇団についてみていく。

図表 I-25 23区の劇場・ライブハウスの施設数



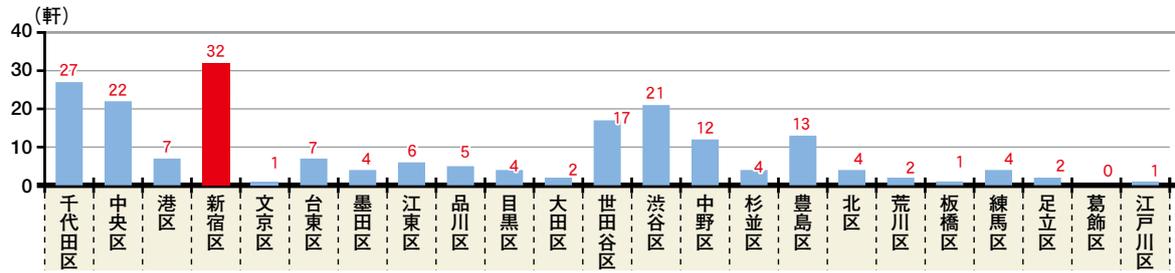
※東京都生活文化局「ホール・劇場等問題に関する東京都の取り組みについて」(HP)で公開されている「ホール・劇場・伝統芸能関連施設・ライブスペース」の情報をもとに作成

53) 目白学園女子短期大学 国語国文科研究室『落合文士村』
 54) 「落合道人 Ochiai-Dojin」(HP)
 55) 新宿区「地域文化財認定物件一覧」
 56) 茅原健『新宿・大久保文士村界限』

① 劇場

図表 I - 26 より、23 区の劇場数をみると、23 区では 198 軒あり、新宿区は 32 軒と最も多い。

図表 I - 26 23 区の劇場数(総数：198)

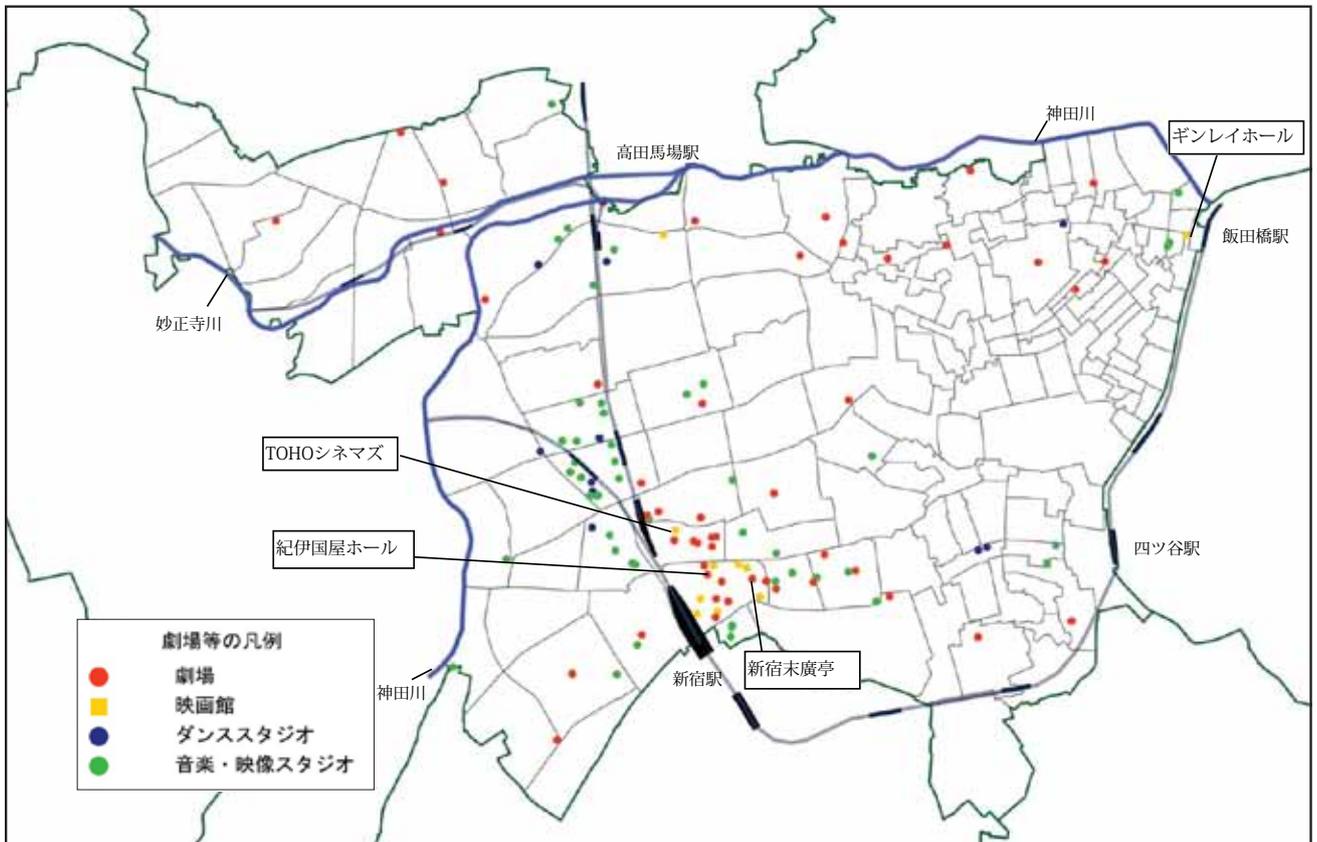


※タウンページの検索結果をもとに作成 (2017年10月20日)

図表 I - 27 より、劇場・映画館・スタジオの分布をみると、劇場は新宿3丁目、歌舞伎町1・2丁目の新宿駅東口エリアに多く立地している。ここには、「紀伊国屋ホール」「新宿シアターモリエール」「シアターPOO」などがある。新宿ゴールデン街には2005年に開業した「新宿ゴールデン街劇場」があり、花園神社では新宿梁山泊、唐組、椿組の3つの劇団が公演を行っている。早稲田には、鈴木忠志らの劇団早稲田小劇場の常打ち小屋「早稲田小劇

場」のあった場所に、「早稲田小劇場どらま館」がある。この他、上落合には、東京俳優生活協同組合（俳協）のビルに1998年に開場した「フリースペースTACCS1179」がある。また、新宿3丁目に「新宿末廣亭」があり、「シアタートップス」があったビルの跡地に「松竹芸能 新宿角座」、新宿駅南口に「ルミネ the よしもと」が開館している。また、新宿区内にはダンス、音楽、映像制作等で使用できるスタジオも多数立地している。

図表 I - 27 劇場・映画館・スタジオ分布図



※2017職業別タウンページをもとに作成

落語を主とする寄席⁵⁷⁾

図表 I - 28 より、新宿区内には、新宿末廣亭と永谷グループが運営する新宿永谷ホール（新宿 Fu -）がある。新宿末廣亭は、鈴木演芸場、池袋演芸場、浅草演芸ホールとともに東京に 4 軒ある定席の一つであるが、唯一木造建築で、新宿区の地域文化財に認定されている。1897 年に「堀江亭」として創業したものを 1910 年に末廣亭清風が買い取り、「新宿末廣亭」と改名した⁵⁸⁾。明治時代には伊勢丹裏にあったが、大正時代に現在地へ移転した⁵⁹⁾。その後、1946 年に建築業を営んでいた北村銀太郎が戦災で焼失した元の建物・地所を買い取って開業した。

図表 I - 28 23 区の主な寄席一覧

番号	名称	所在地	開設年
1	鈴木演芸場	台東区上野 2-7-12	1857 年
2	新宿末廣亭	新宿区新宿 3-6-1	1897 年
3	池袋演芸場	豊島区西池袋 1-23-1	1951 年
4	浅草演芸ホール	台東区浅草 1-43-12	1964 年
5	木馬亭	台東区浅草 2-7-5	1970 年
6	国立演芸場	千代田区隼町 4-1	1979 年
7	東京芸術劇場	豊島区西池袋 1-8-1	1990 年
8	お江戸両国亭	墨田区両国 4-30-4	1990 年
9	新宿永谷ホール (Fu-)	新宿区歌舞伎町 2-45-5	1992 年
10	お江戸日本橋亭	中央区日本橋本町 3-1-6	1994 年
11	お江戸上野広小路亭	台東区上野 1-20-10	1996 年
12	神田連雀亭	神田須田町 1-17	2014 年

※各施設のHPをもとに作成

インタビュー： 新宿末廣亭 北村氏

新宿末廣亭では、通常、落語協会と落語芸術協会が交互に公演を行っている。2ヶ月に1度位、金曜の夜「深夜寄席」を催し普段の定席枠では出られない立川流や円楽流などが演じている。また月に数度、午前中に約1時間半で、学校の生徒等対象に落語鑑賞会を行っている。北村銀太郎の孫であり三代目の席亭を務めた北村幾夫氏は、「今は敷居が低くなって、若い女性が一人で来るようになった。若い人が寄席にきて、高齢の噺家がかわいいと言ったりする。女性が相撲や落語などを情報発信して広めていく。女性はパワーがあり、文化の担い手だと思う。一方で、課題はある。現在はネット社会になり、テレビの広告宣伝費が減っており、古典落語は15分間通しでやる（コマーシャルを入れられない）ので、スポンサーがつきにくい。末廣亭イコールこの建物であり、建物は残していきたいと思うが、老朽化とのせめぎあいでありどこかで決断は必要だ」という。

民間劇場と仕掛け人

新宿では、戦前、映画館から劇場への転用がみられた。軽演劇を提供した「ムーラン・ルージュ新宿座」の建物は、もともと「新宿座」という映画館であったが、浅草オペラ出身の佐々木千里が1931年にムーラン・ルージュ新宿座を開業することになった。ムーラン・ルージュ新宿座では、浅草から起こったレビューを中心に上演していた⁶⁰⁾。新宿では、歌舞伎はあまり受けなかったが、ムーラン・ルージュの提供したモダンでウィットに富んだ出し物は若年層を惹き付けた⁶¹⁾。

また、紀伊國屋書店は、新宿駅におろされる荷を東京市内に運ぶための薪炭問屋であったが、1927年に書店を開店し、2階に日本橋の丸善、銀座の資生堂につぐ東京で三つ目のギャラリーを併設した⁶²⁾。1964年の紀伊國屋ビルの建築にあたっては、ホールや画廊を併設し、新進の演劇人や画家たちに発表の場を提供した。文学座、民藝、こまつ座、つかこう

へい事務所など、日本を代表する劇団や新進の小劇場演劇の劇団が公演を行った。

1895年京都で創業した「松竹」は、1910年に新富座を買収し東京に進出した⁶³⁾。歌舞伎座をはじめ浅草六区に多くの劇場を持っていたが、1923年には関東大震災により多くを失い、新宿に進出した。松竹は、1924年に「新宿松竹館」を開場し、1929年には山手劇場（以前は大黒屋）を直営とし「新宿松竹座」を開場している。1937年には「松竹株式会社」を設立した。

1956年には、東宝グループ傘下の株式会社コマ・スタジアムによって、コマ劇場が開館した。コマ劇場は、舞台全体がコマのように回転する仕掛けで、2008年に閉館するまで演歌や演劇の舞台として使用された。その他、1980年代に開館した「タイニエアリス」（新宿2丁目）（～2015年）や「シアタートップス」（1985年～2009年）などがあった。

57) 寄席は、落語、講談、浪曲などの興行を行う施設である。

58) 「KANDA MATSUNOJO 新宿末廣亭・北村幾夫会長に訊いてみた。前編」(HP)

59) 戸沼幸市編著『新宿学』

60) 中野正昭『ムーラン・ルージュ新宿座 — 軽演劇の昭和史』

61) 新宿大通商店街振興組合「新宿大通り」(HP)

62) 新宿区立新宿歴史博物館編『新宿歴史博物館特別展 田辺茂一と新宿文化の担い手たち — 考現学、雑誌「行動」から「風景」まで』

63) 松竹の記述については、「松竹株式会社 松竹の歴史」(HP)

インタビュー：池林房の太田氏

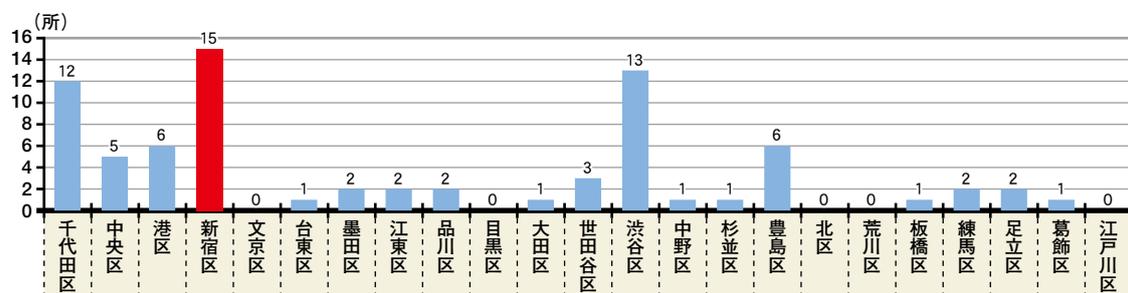
演劇関係者が多く集まる居酒屋「池林房」などを経営し、小劇場を運営していた太田氏は、「池林房では、役者が、稽古が終わった後にも働きお金を稼いでいた。新宿には、かつてシアターアップルやシアタートップスなど当時の演劇シーンには重要な劇場が複数あり、若者が集まることで飲み屋が潤っていた。芝居小屋があると若い人が集まり、下北沢のように若い人も住みつくかもしれない。まち自体に稽古場、小さい小屋が不足していると感じており、立派な小屋でなくてもよいからスペースを提供してくれるとよい」と語る。

②映画館

全国の映画館事業所は 581 あり、東京都には 87 所ある。図表 I - 29 より、23 区内には 77 所あり、

このうち新宿区には 15 所あり 23 区で最も多い⁶⁴⁾。シネマコンプレックスや名画座・単館映画館などがあり、その多くは新宿 3 丁目に立地している。

図表 I - 29 23 区の映画館事業所数(総数：77)



※2014年「経済センサス」より作成

明治から大正にかけての映画館の登場

映画館は、明治時代には「活動写真」とよばれ、アメリカのキネトスコープやヴァイタスコープなどが渡来することで始まった。小西六写真工業（現コニカミノルタ）が、撮影機を輸入し、同店の浅野四郎が日本人としてはじめて撮影、現像、焼き付けに成功した⁶⁵⁾。1899年、銀座の廣目屋が、国産の第一号の活動写真を上映した。その後、見世物・大道芸でにぎわっていた浅草で、活動写真（映画）が流行し始めた。

やがて、関東大震災で凌雲閣（浅草十二階）が倒壊したことなどにより勢いを失った浅草に代わり、銀座がカフェやデパート、東宝・松竹による興行施設などが整備され、にぎわいをみせていった。この頃、巣鴨・豊島・新宿・渋谷等の山の手・郊外の人口が増加した。新宿では、初めての映画館となる「大幸館」が1909年に太宗寺境内に建てられた。1920年には、新宿の有志によって新宿3丁目に「武蔵野館」が、洋画専門館として開館した。この他にも、新宿

駅東口を中心に18館、神楽坂に5館、早稲田に4館など、多くの映画館が存在したが、これらは戦災により焼失した⁶⁶⁾。

戦後の映画館の普及

図表 I - 30 より、新宿区内に現存する映画館の変遷をみると、戦後になると1951年に「新宿昭和館」、1957年に「新宿東映会館」、1958年に「新宿松竹会館」が開館した。1950年代には東京の映画館が、無数の小規模興行師や個人経営者が映画館経営に乗り出したことにより増えたといわれている⁶⁷⁾。新宿区内でも地元資本、個人経営者によって多くの映画館が建てられた。例えば、台湾人華僑の林以文や彼の設立した企業やグループ企業は、1947年には歌舞伎町に「新宿地球座」、1953年に「新宿劇場」、1956年に「新宿名画座」を開館した。1951年には、阿佐ヶ谷や中野で映画館を開業していた東亜興業（代表は李康友）が、歌舞伎町に「新宿オデヨン座」を開館した。東京産業文化博覧会に使用された施設が映画館に転用

64) 映画館と映画館事業所は異なる。2016年度「東京都福祉・衛生統計年報」によると映画館については、新宿区に48スクリーンある。
 65) 入江良郎「最古の日本映画について — 小西本店製作の活動写真」
 66) 東京都新宿区立新宿歴史博物館編『キネマの楽しみ — 新宿武蔵野館の黄金時代』
 67) 吉見俊哉『視覚都市の地政学 — まなざしとしての近代』

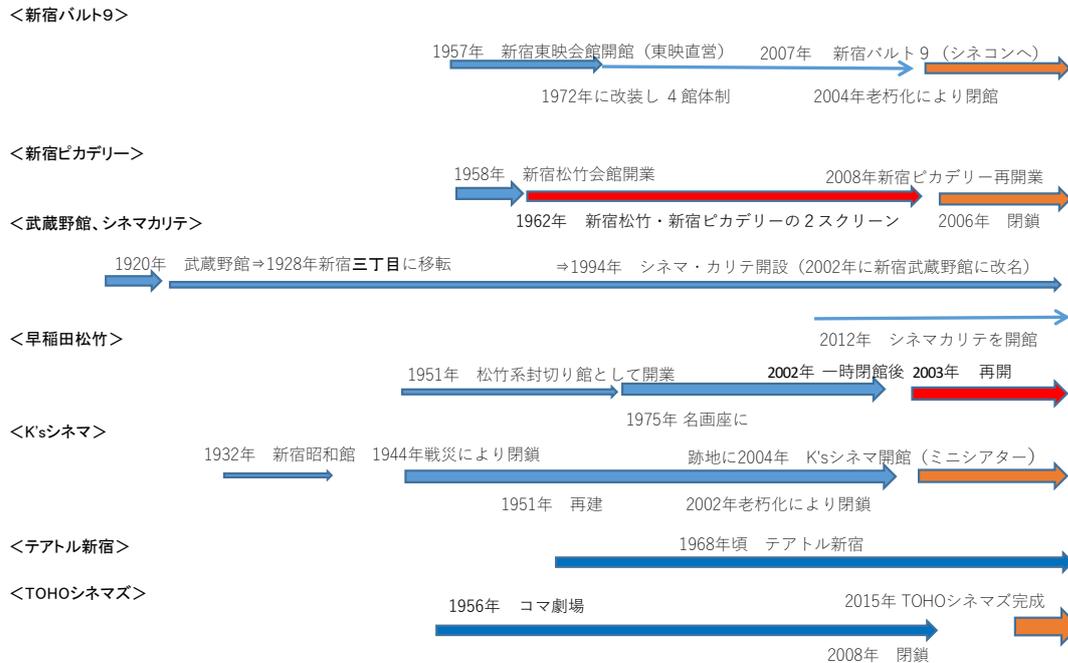
され、新宿オデヨン座や新宿劇場になった。

現在、新宿東映会館跡には「新宿バルト9」が開業し、新宿松竹会館は2006年に老朽化により閉鎖されたが、その後、2008年に「新宿ピカデリー」として再開業している。2015年にはコマ劇場跡地に「TOHO シネマズ」がオープンし、シネマコンプレッ

クスが増えている。一方、新宿昭和館は老朽化により2002年に閉鎖したが、現在は映画館「K's シネマ」が営業している。

その他、「早稲田松竹映画」「シネマカリテ」「新宿武蔵野館」「テアトル新宿」「飯田橋ギンレイホール」「シネマート」など名画座、単館映画館が6館ある。

図表 I-30 新宿区内の主な映画館の変遷



※各映画館のHPをもとに作成

③劇団

新劇をルーツとする劇団の誕生

戦前の新宿では、早稲田大学を中心に、坪内逍遙を始めとし、秋田雨雀、松井須磨子、神近市子、水谷八重子などによって演劇活動が展開され、中村屋の相馬夫妻は脚本朗読会を開くなど、演劇活動も支援していた⁶⁸⁾。

1937年、久保田万太郎、岸田國士、岩田豊雄の文学者によって創立された文学座は、1950年には、信濃町に「文学座アトリエ」が設置され活動の場としている。また、文学座を脱退したメンバーによって、1964年に荒木町で「劇団NLT」が結成された。

新宿2丁目には劇団「秋田雨雀・土方与志記念青年劇場」のスタジオが立地している⁶⁹⁾。青年劇場は、秋田雨雀と土方与志が戦後に育んだ演出家8人を中心に1964年に結成されたものである。土方与志が

未来を担う若者たちに優れた演劇を提供しようと精力を傾けた青年劇場運動によるシェイクスピアの作品によって出発した。

また、四谷に本部のある「劇団若獅子」は、1987年、新国劇（島村抱月主宰の芸術座を脱退した澤田正二郎らによって結成）の解散後に結成された。この劇団は、劇団新国劇の精神を受け継ぎ、新国劇時代の作品はもとより真に拡張ある大衆演劇の継承・保存・定着をめざし、上演活動を行っている。この他に、1960年に上落合に東京俳優生活協同組合の事業所が設立され、1982年に劇団「俳協」が生まれた⁷⁰⁾。

アングラ演劇の隆盛

1960年代から70年代にかけての新宿では、1968年の国際反戦デーや1969年の西口フォークゲリラなどが起こり、若者による新しい芸術活動ーアング

68) 「新宿中村屋 写真で見る中村屋」(HP)

69) 大正に入ると、左翼劇場が各地に登場したが、そのルーツは秋田雨雀らの小集団「先駆座」であると言われる(井上理恵編『コレクション・モダン都市文化 60巻』「新劇と移動演劇」)。日本プロレタリア文芸連盟が創立されると、先駆座を中心に演劇部が誕生し、村山知義らが参加した。村山は、柳瀬正夢、尾形亀之助らと前衛美術団体「MAVO(マヴォ)」を結成した(新宿歴史博物館編『新宿ゆかりの文学者』)。

70) 本項の劇団に関する情報は、特に記載しないときは各劇団のHPを参照

ラ演劇が生まれた。新宿末廣亭で上演を行った寺山修二、花園神社で上演を行った唐十郎、黒テントの佐藤信、「早稲田小劇場」で活動した鈴木忠志が、アングラ四天王と呼ばれ活躍した。また、1962年、「アートシアター新宿文化」が開場し、非商業的な芸術作品であるATG映画を上映し多くの若者が訪れていた。さらに、文学座を辞めた役者たちと、アートシアター

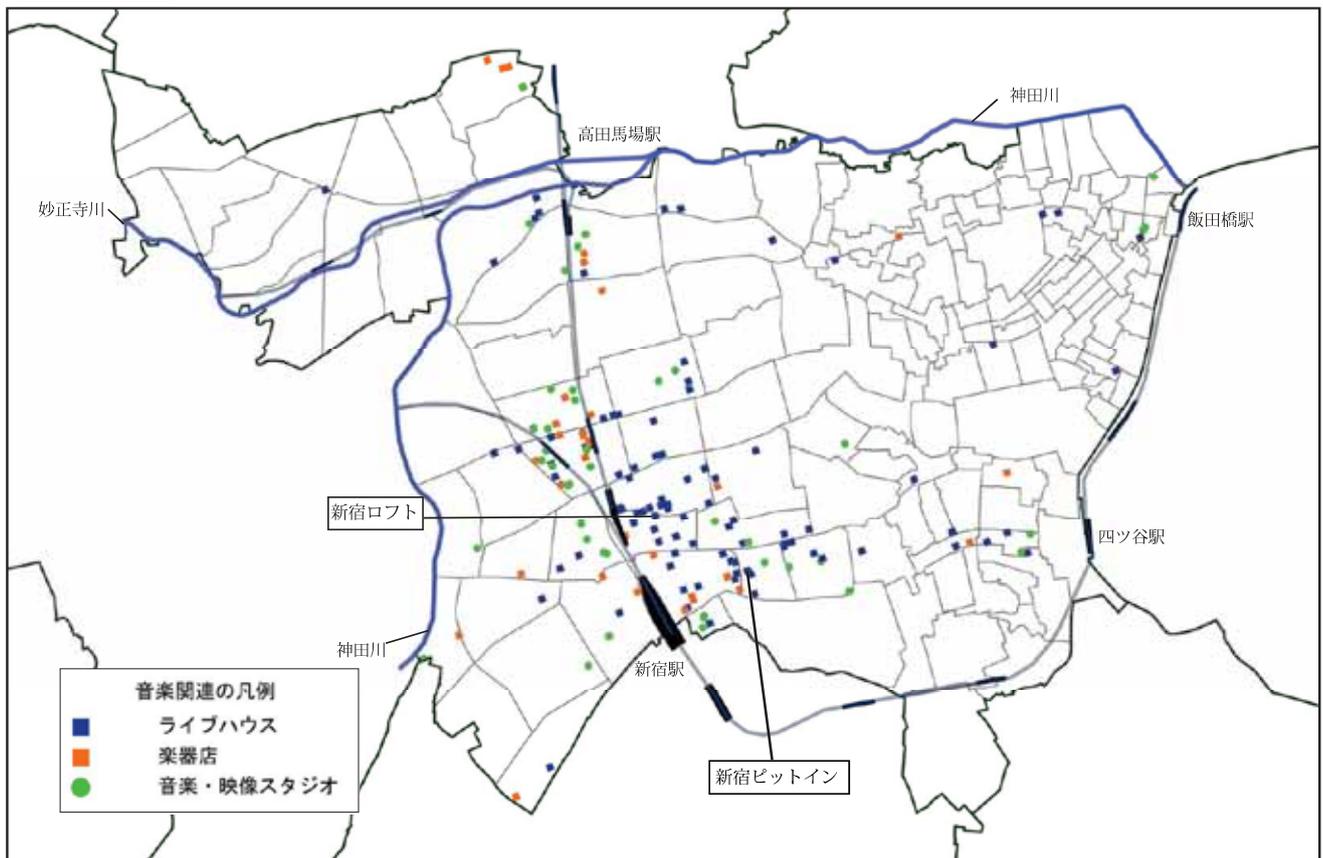
で実験劇をやりたいという支配人の葛井欣士郎の希望が合致し、演劇公演を開始した⁷¹⁾。同じ建物の地下には、小劇場「アンダーグラウンド蠍座」があり、実験的な映画や演劇を上演した。ここでは、寺山修二や蜷川幸雄、劇団青年芸術劇場の研究生を経た唐十郎が演劇上演を行ったが、現在は別の映画館になっている⁷²⁾。

(3) ライブハウス・楽器店・音楽団体

図表 I - 31 より、ライブハウス・楽器店・スタジオの分布をみると、ライブハウス（音楽堂含む）は、百人町から歌舞伎町、新宿3丁目に多く立地してい

る。楽器店は、百人町や新宿3丁目に多くみられる。音楽・映像スタジオは、百人町に多い。

図表 I - 31 ライブハウス・楽器店・スタジオ分布図



※2017職業別タウンページや各施設のHPをもとに作成

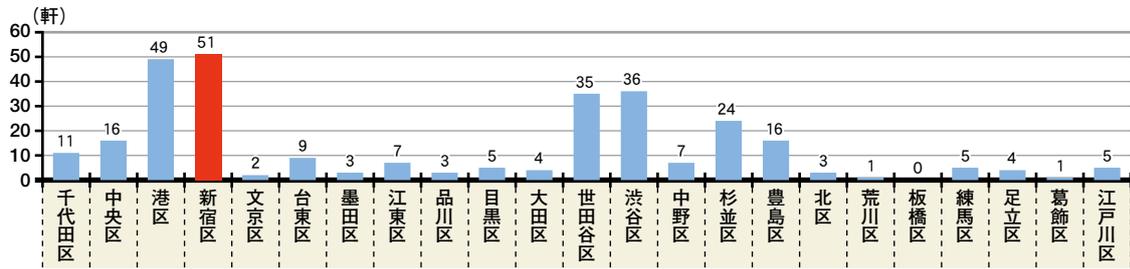
71) 葛井欣士郎『遺言 — アートシアター新宿文化』

72) 「Place(場所の記憶)」(HP)

①ライブハウス

図表 I - 32 より、23 区のライブハウス（音楽堂含む）は 297 軒あり、新宿区内には 51 軒と最も多い。

図表 I - 32 23 区のライブハウス数(総数：297)



※ iタウンページの検索結果をもとに作成(2017年10月20日)

ジャズを上演するライブハウス

新宿には、多くのジャズ喫茶が存在した。このジャズ喫茶がライブハウスの起源のひとつであると言われている。これらの中でも、1963年に二幸（現アルタ）裏に開店した「DIG」は、日本大学芸術学部写真学科を卒業した中平穂積氏が開店させた。DIGには、大学関係者、一般のジャズファン、ジャズや映画評論家の植草甚一、小説家の村上春樹、寺山修司、中上健次らが訪れた。その後、1967年には「DUG」を新宿紀伊國屋裏に開店し（2007年閉店）、1977年には新宿靖国通りに「New DUG」を開店させ2007年にはライブハウスDUGとして再スタートした⁷³⁾。

ジャズ喫茶には渡辺プロダクションをはじめとする芸能プロダクションに所属するバンドが登場するようになり、1972年にオープンした「新宿ルイード」が、そのようなジャズ喫茶のシステムを受け継ぎ、かつ音楽プロダクションが運営に携わったライブハウスの先駆けであった⁷⁴⁾。

さらに、「新宿ピットイン」は1965年に開店し、渡部貞夫、山下洋輔、浅川マキなどが出演した。もともとは、(株)ピットインミュージック代表の佐藤氏の家業である婦人用品店の倉庫の一部を利用した喫茶店であったが、ジャズ好きやミュージシャンの卵が集まるようになった⁷⁵⁾。また、「ジャズスポットJ」は、1978年に早稲田大学モダンジャズ研究会のバンド仲間であった幸田稔、森田一義たちが開業

し、ジャズミュージックのライブハウスとして営業してきた⁷⁶⁾。

フォークやロック音楽などを上演するライブハウス

1960年代後半からフォークやロック音楽を演奏するライブハウスもあった。平野悠氏は1971年に世田谷区の鳥山に「ロフト」開業し、1976年に「新宿ロフト」を西新宿で開店した⁷⁷⁾。さらに1995年にトークイベント「ロフトプラスワン」が開館した。新宿ロフトは、1999年に歌舞伎町コマ劇場横に移転している。1980年に「新宿JAM」が歌舞伎町に開店した。新宿JAMは現在、新宿ロフトで演奏する前にバンドマンたちが利用する登竜門的な存在になっている⁷⁸⁾。また、1980年代のバブル期にはライブハウスビジネスに乗り出す企業もあり、「日清パワーステーション」があったが、現在は閉鎖している。

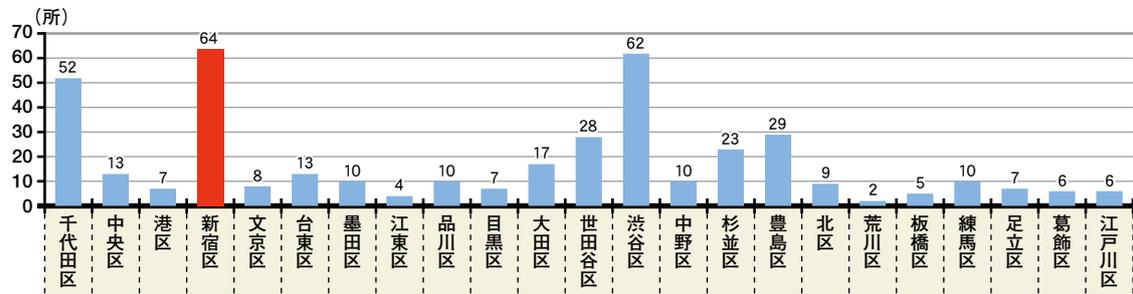
その他、新宿区内には様々なジャンルのライブハウスが立地している。戦後のうたごえ運動を受けたものに、1954年に開業した「灯」がある。シャンソンライブを行うものに、「シャンソニエ Qui」、「蟻ん子」、「シャンパーニュ」などがある。また、大久保にはKポップミュージックを中心としたライブハウスの「SHOWBOX」や「K-POP LIVE」がある。西新宿には「東京オペラシティ」のような音楽堂も立地している。

73) DUG「DIG/DUG/newDUG History」(HP)、「50年以上の歴史を誇るジャズ喫茶の名店！新宿『DUG』オーナー中平穂積さんに聞く『カルチャーの集合地が育つまで』」(HP)
 74) 宮入恭平『ライブハウス文化論』
 75) 『新宿区成立70周年記念誌 新宿彩物語～時と人の交差点～』第2章 新宿人70
 76) 「Jazz Spot J shinjuku おかげさまで39周年」(HP)
 77) 『朝日新聞』2016.11.18(夕刊) 今井智子「新宿ロフト、40年の存在感」
 78) 『新宿区成立70周年記念誌 新宿彩物語～時と人の交差点～』第2章 新宿人70

②楽器店

図表 I - 33 より、楽器小売り事業所は全国で 3,230 所、都内に 513 所ある。このうち、23 区には 402 所あり、新宿区は 64 所で最も多い。

図表 I - 33 23 区の楽器小売り業事業所数(総数：402)



※2014年「経済センサス」より作成

新宿には、楽器修理所として創業した石森管楽器、売上高が上位にある黒沢楽器店、フルートを専門に扱う村松フルート製作所、世界規模で展開するフェルナンデスの楽器店の本部があるほか、石橋楽器店、島村楽器の店舗がある。百人町は音楽や楽器のまちとして知られており、大小様々な楽器店が立地している⁷⁹⁾。

管楽器や弦楽器専門の楽器店

石森管楽器は、1951年に「石森管楽器修理所」として創業した。同社は1992年、事業の拡大に伴い社名を(株)石森管楽器に変更し、2003年にショールーム、レンタルスタジオ、ライブスペース、リペアルームを備えた新店舗をオープンしている。バンドマンが夜な夜な集まる新宿の中心街から近い大久保地域は、楽器修理店を営む場所としてもふさわしかったという⁸⁰⁾。

1967年に開業した黒沢楽器店は、豊島区高田に本部があるが、百人町にあるクロサワ楽器日本総本店は、日本最大クラスの店舗である。黒沢楽器店は、弦楽器専門店「クロサワバイオリン」の運営も行っている⁸¹⁾。

フルート専門の楽器店

1963年には村松楽器販売株式会社が設立され、村松フルートの総販売元として、直営店での小売販売、全国への卸売販売、世界各国ディーラーへの輸出を

手掛けている⁸²⁾。

③音楽団体

新宿区内には、合唱団や楽団などの音楽団体も多く活動している。関鑑子は、戦前からプロレタリア音楽家として活動していたが、1948年に中央合唱団を創設し、全国各地でうたごえ運動を展開した⁸³⁾。

大久保・百人町の地域では、全国的な音楽鑑賞団体である勤労者音楽協議会(通称「労音」)の流れからの音楽団体の展開がみられている。1953年に東京労音(本部は大久保1丁目)、1955年東京労音アンサンブルが結成され、芥川也寸志が指揮者となった。翌年、「新交響楽団」(東京労音新交響楽団)を結成し、1965年に東京労音から独立した。現在もアマチュアオーケストラとして活動し、大久保にある矯風会館の地下にある「クラシックスペース☆100」など都内の施設を練習場としている⁸⁴⁾。

同じ労音の流れでは、1957年には東京労音楽典講座修了生による合唱団が解散した日、「大久保混声合唱団」が結成された⁸⁵⁾。1946年には、東宝交響楽団が百人町において設立されたが、「東京交響楽団」となり、現在は川崎市を本拠地として活動を行っている。

79) 戦後、進駐軍のクラブミュージックが盛んであったことで、楽器店が集積したことがうかがわれる。

80) 『新宿区成立70周年記念誌 新宿彩物語～時と人の交差点～』第2章 新宿人70

81) 会社の沿革については、各会社HPより

82) 本段落の記述は、「村松孝一没後五十年メモリアル『礎 (ISHIZUE)』」(HP) 参照

83) 河西秀哉「うたごえ運動の出発——中央合唱団『うたごえ』の分析を通じて」

84) 本段落は「東京労音コンサートガイド 労音とは」(HP)「新交響楽団ホームページ 新響の50年」(HP) 参照

85) 「大久保混声合唱団 大久保混声合唱団の歴史」(HP)

5. 産業資源の集積

(1) 製造業

ここでは、新宿区の地場産業である染色業、印刷・製本関連業に加え、出版業について取り上げる。

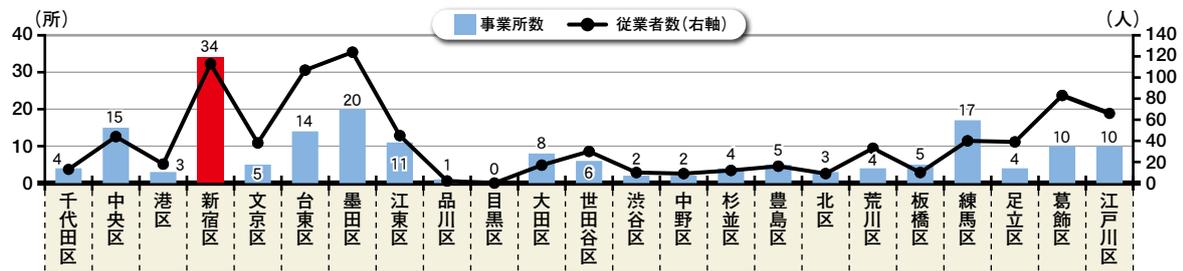
① 染色業

図表 I - 34 は、23 区の染色整理業事業所数・従業者数である。新宿区は 34 所と 23 区で最も染色整理業（染色業）が集積しているが、1 事業所あたり

の従業者数では、新宿区は 3.3 人で、台東区（7.6 人）、墨田区（6.2 人）、葛飾区（8.3 人）などと比べて少なく、新宿区の事業所は規模が小さいところが多い⁸⁶⁾。

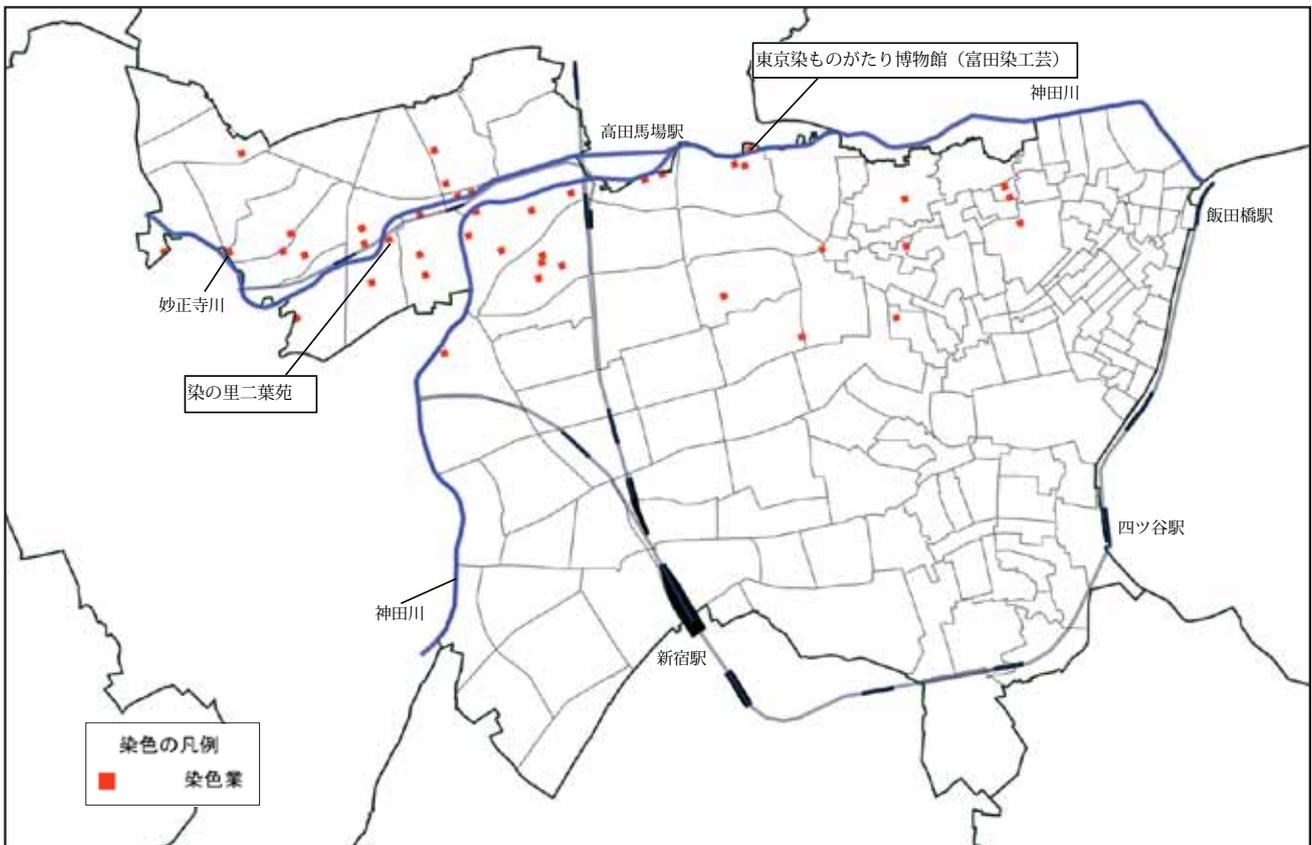
図表 I - 35 より染色業の分布をみると、染色業は、早稲田から中井にかけての「神田川・妙正寺川流域工業地帯」と呼ばれる地域に多く立地している。

図表 I - 34 23 区の染色整理業事業所数・従業者数



※2014年「経済センサス」より作成

図表 I - 35 染色業分布図



※2017年9月1日現在の新宿区染色協議会の43の加盟事業所の住所をもとに作成

86) なお、染色整理業は、主として綿状繊維、毛、ニット、繊維雑品などに精練、漂白、染色などを機械または人力によって行うものである。都内では、手加工による染色整理業（染色業）がほとんどである。

上方からの染色技術の伝承

江戸時代、政治経済の中心が江戸に移ると、上方からの産物が「くだりもの」と言われて多く集荷され、この時にお抱え染師等が多く江戸に移り住み、各種の技法が伝承された⁸⁷⁾。また、武士も平民も生活文化を楽しむようになり、職人たちはさまざまな技法に挑戦するようになった。特に、染める図柄に合わせて型を彫り、大量生産可能な「染型」が広まった。一方、江戸幕府は、贅沢な衣装を制限するなど統制を行ったため、木綿の栽培と木綿に染めやすい藍染の着物が普及した。藍染の職人や染物商たちが集まった「紺屋町」が全国各地にでき、江戸染物の中心は神田であった。

早稲田・中井への染色業の移転

明治・大正になると、神田紺屋町の染色職人たちはよりきれいな水を求めて、神田川や妙正寺川が流れる早稲田から中井一帯に集まってきた⁸⁸⁾。富田染色工房は1914年に浅草から西早稲田に移転した。また、(株)二葉の創業者の小林氏も浅草で修業をした後、1920年に下落合で独立して染工場を開いている。

当初は、家内制手工業的な染物工房が多かったが、やがて大規模な染色工場まで進出してくるようになった。三越染物工場(三越呉服店染工部)は、下落合に建設され、三越百貨店で売られる着物や浴衣、手ぬぐいの染を一手に生産していた。最盛期には300件を超える染色業者で栄えたが、1970年代以降、生活の洋風化で着物需要が低迷し、現在は約10社に減少している⁸⁹⁾。

当初は、家内制手工業的な染物工房が多かったが、やがて大規模な染色工場まで進出してくるようになった。三越染物工場(三越呉服店染工部)は、下落合に建設され、三越百貨店で売られる着物や浴衣、手ぬぐいの染を一手に生産していた。最盛期には300件を超える染色業者で栄えたが、1970年代以降、生活の洋風化で着物需要が低迷し、現在は約10社に減少している⁸⁹⁾。

インタビュー 二葉苑 小林氏

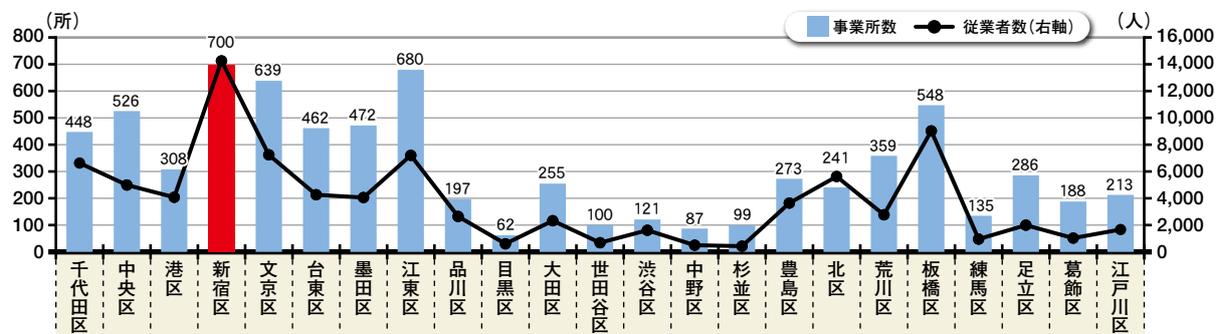
(株)二葉の現代表取締役の小林元文氏は、「二葉では海外や地方の展示会に商品を売り込みに出かけていたが、ここに人をよびこむことに発想を転換し、ギャラリー「二葉苑」を造った。神田川・妙正寺川で仲間とはつながっている。理解してくれる人、(染色業を)残したいという思いに賛同してくれる人を増やすことが大切」と話す。

②印刷・製本関連業

全国の印刷・製本関連業(印刷・同関連事業)は32,461事業所あり、東京都には全国の約4分の1の

7,964事業所ある。図表I-36より、新宿区は23区で最も多く、全国の印刷業売上高第2位の大日本印刷を始め、700の事業所が集積している。

図表 I - 36 23 区の印刷・同関連業事業所数・従業者数



※2014年「経済センサス」より作成

87) 「東京都染色工業協同組合」(HP)

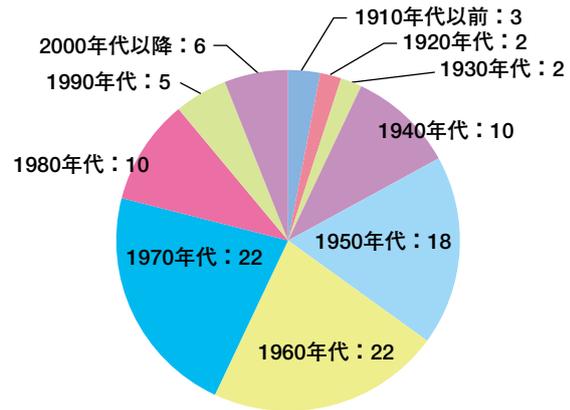
88) ミツカン水の文化センター「里山文化塾第23回 江戸の染色文化と河川 — 歴史と工房体験で知る江戸の染色」

89) 本項の記述は「染の里 二葉苑 染色と二葉苑の歴史」(HP)、「落合道人 Ochiai-Dojin」(HP)を参照

次に、図表 I - 37 より、創業・設立年代別に新宿区内の印刷業をみると、1950～1970年代に創業したところが半数以上を占め、ほとんどが、戦後に設立している90)。

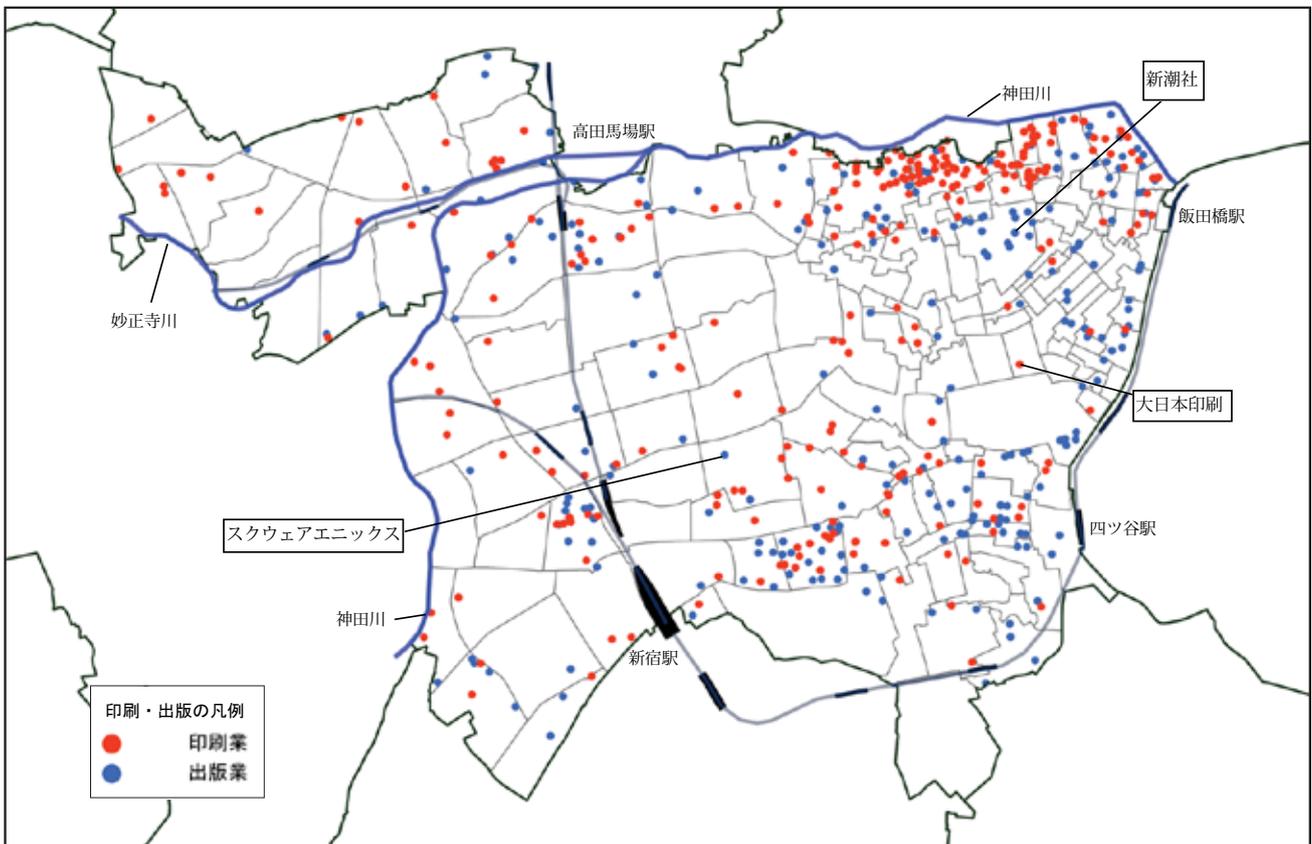
また、図表 I - 38 より、印刷業の立地分布をみると、山吹町、早稲田鶴巻町、水道町、新小川町などの神田川沿いに集中しているほか、出版社が多く立地する新宿御苑から四谷周辺にかけての立地も多い。

図表 I - 37 創業・設立年代別印刷会社数(総数：100)



※「2017職業別タウンページ」に掲載されていた(詳細が不明なものを除く)区内の印刷業299社のうち、各会社のHPより創業年が明確になった100社を対象に作成

図表 I - 38 印刷業・出版業分布図



※「2017職業別タウンページ」をもとに作成

90) 印刷会社は、製版・印刷・製本のすべての作業を賄うところから、一部の工程のみを請け負うものまで、規模も様々である。

関東大震災と大日本印刷の本社移転

日本における印刷業の本格的定着は、1871年、4種類の郵便切手の印刷によって始まった⁹¹⁾。その後、新聞社が創業し、新聞発行部数の増大とともに印刷業は急速に発展した。1876年に大日本印刷が中央区銀座に、1897年博聞館工場（現共同印刷）が中央区銀座に、1900年に凸版印刷合資会社（現凸版印刷株）が台東区に誕生している。これら大手印刷会社の周辺に、下請けとなる中小工場が集積していった。

大日本印刷は、前身の集英社が1876年に銀座で創業し、主に新聞印刷や書物の印刷を行っていたが、地価が銀座に比較して安かったこと、労働力の確保が容易であったこと、需要者に近接した場所であったことなどの理由で、1886年に市谷加賀町に市谷第一工場を開設した⁹²⁾。その後、関東大震災を契機に、本店機能を被害が少なかった市ヶ谷に集約した（1923年）。早稲田大学の印刷所として1907年に榎町に開業していた日清印刷と合併し、1935年、大日本印刷となった。

1975年からバブル経済期にかけて、印刷業の近代化が進み、印刷の主流がDTPへと移行を始め、大手印刷会社ではほぼ全行程をカバーすることが可能になった。この地域の中小の印刷業は分業システムが成熟していたため、横のネットワークが強みとなっている。

飯田町紙流通センターの流通倉庫と印刷業

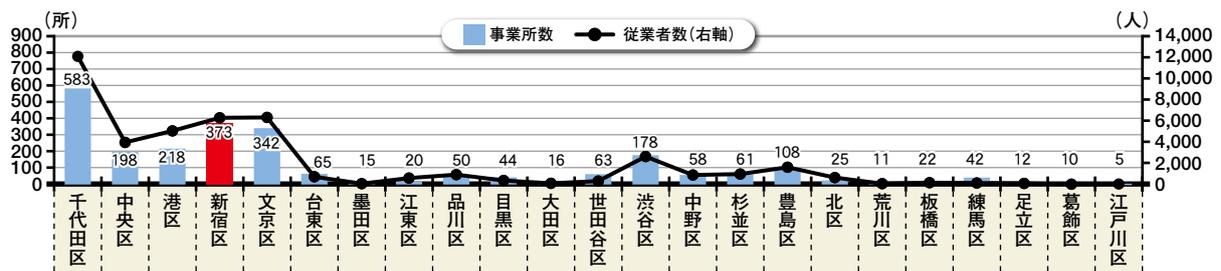
また、飯田橋駅周辺に印刷業の事業所が多く集積しているのは、「飯田町駅（千代田区）」に（株）飯田町紙流通センターの流通倉庫が整備されたことによる。関東大震災をきっかけに貨客分離を目的とした複々線工事が行われ、牛込駅と飯田町駅間に「飯田橋駅」が誕生し、飯田町駅は1933年から貨物専用駅になった。1972年飯田町駅に流通倉庫ができると、都心の紙の物流基地として、印刷業や出版業が多く集積するようになった。流通センターは1999年に現地から移転した⁹³⁾。

③出版業

図表 I - 39 より、23区の出版業の事業所数をみると、新宿区は373所で、千代田区に次いで2番目に多い。また、従業者数でみると、千代田区、文京区に次いで3番目に多く、1事業所あたりの従業者数は約16.9人で、千代田区の約20.7人と比較すると小規模な出版業が多い⁹⁴⁾。

図表 I - 38 (P.34) より、出版業の事業所の分布をみると、牛込地域や新宿御苑から四谷周辺にかけて多く立地している⁹⁵⁾。

図表 I - 39 23区の出版業事業所数・従業者数



※2014年「経済センサス」より作成

91) 印刷業の全般的な記述は、浦野正樹+産業と地域研究会編「転換期における地域社会と生活の変容 PART3 — 鐘ヶ淵、大森西、地藏通り商店街周辺地区を事例として」第4章を参照

92) 「DNP 大日本印刷(株)沿革」(HP)

93) ProjectJRS 公式ブログ「駅に歴史あり！～飯田橋編～」(HP)

94) なお、23区平均の1事業所あたりの従業者数は、18.3人である。

95) ジャンル別では専門書や業界誌が多く、特に戦後の創業ではビジネス向けや実用書、娯楽系などの出版社が多い。

出版業のはじまり

出版業の歴史は、江戸時代の木版印刷による浮世草子や黄表紙などに始まる。1770年代には地本（江戸出版）の出版数が増えると、町人の読み書き能力が向上し、出版業界が発展する要因となった。明治時代になると、文学作品や評論を掲載する「国民之友」「太陽」「中央公論」などが創刊され、新聞に連載された尾崎紅葉や夏目漱石らの小説が単行本化された。戦後の「文庫本ブーム」、1950年代後半の「週刊誌ブーム」、1979年からの「雑誌の時代」を経て、出版社は増加していった。90年代のバブル崩壊以降、フリーペーパー、インターネット広告が現れ、雑誌販売は長期低落傾向になった。なお、出版社数は1951年以降徐々に増え、96年に4,600社になり、97年をピークに減少している⁹⁶⁾。

図表 I - 40 より、創業が古い全国の主な出版社をみると、東京の出版社の多くは明治以降に創業し、神田神保町などの神田周辺に多く立地している。江戸時代の神田には武家屋敷が多くあったが、明治に入って徳川幕府が崩壊すると武家屋敷が空き家となり、この空地に、開成学校や東京医学校（東京大学）や法律学校などが多く建てられた。そのため、書物の需要が増え、神田に書店や出版社が集積したという。また、東京市電の整備のために、靖国通りが拡幅され、通り沿いに古書店街が広がっていった。しかし、その後の関東大震災で神田神保町一帯は被災し、古書店はバラックを建てすぐに再興したが、出版社は再開するのに時間がかかり、地盤の良い新宿などに移転したものと考えられる⁹⁷⁾。

新潮社と新たな出版業

新宿区内には、書籍市場の売上高が大きい出版社として新潮社とスクウェア・エニックスがある⁹⁸⁾。

新潮社は、1896年、地方から秀英社の印刷工として働きに来ていた佐藤義亮氏が創設した。佐藤氏は少

図表 I - 40 現存している創業が古い主な出版社

番号	出版社名	創業年	創業地
1	法藏館	1602年	京都市下京区
2	平楽寺書店	慶長年間	京都市中京区
3	吉川弘文館	1857年	文京区本郷
4	有斐閣	1877年	千代田区神田一ツ橋通町
5	春陽堂書店	1878年	千代田区神田泉町
6	河出書房(岐阜成美堂)	1886年	中央区本材木町(日本橋)
7	中央公論社	1886年	京都市下京区(西本願寺内)
8	富山房(ふざんぼう)	1886年	千代田区神田神保町
9	博文館	1887年	文京区本郷
10	東京堂出版	1890年	千代田区神田神保町
11	創元社(矢部晴雲堂)	1892年	大阪市西区
12	新潮社(新聲社)	1896年	新宿区矢来町
13	明治書院	1896年	千代田区神田須田町
14	実業之日本社	1897年	中央区銀座
15	婦人之友社	1903年	豊島区西池袋(現住所)
16	美術出版社	1905年	渋谷区猿楽町(現住所)
17	講談社(大日本雄弁会)	1909年	文京区関口(現住所)
18	明治図書出版	1912年	中央区入船
19	岩波書店	1913年	千代田区神田神保町
20	平凡社	1914年	千代田区神田神保町

※各社HP(沿革が不明な会社は除く)をもとに作成

年期より本を好み、徳富蘇峰の「国民之友」の影響を受け、東京の新しい思想と文学にあこがれを持ち新宿にやってきた。印刷工から校正係として抜擢され、次第に出版事業に興味を持ち始め、新聲社(現新潮社)を創設した⁹⁹⁾。

スクウェア・エニックスは、2003年にスクウェアとエニックスが合併して渋谷区で設立され、ドラゴンクエストを始めとするゲームソフトの販売・開発・出版事業を手掛ける会社である¹⁰⁰⁾。1975年に設立された(株)営団社募集サービスセンターの子会社の(株)営団不動産が、1982年に新規事業としてゲームソフトの企画販売を行うエニックス社となった。1983年、小西六(現コニカミノルタ)と合併し、小西六エニックスが設立された。一方、スクウェア社は1986年に設立されたゲーム会社であった。2012年に本社を渋谷区から新宿区に移転した。

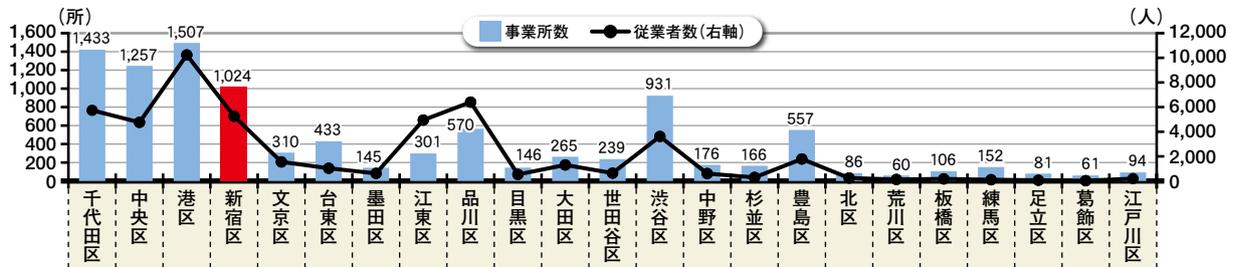
96) 日本雑誌協会「日本出版協会 50 年史」
 97) 「神保町へ行こう 特集神保町を見守り続けて 70 年 古書店街の生き字引」(HP)
 98) オリコン「オリコン 2015 年書籍年間マーケットレポート」
 99) 「仙北市 公共文化施設：新潮社記念文学館」(HP)
 100) 「株式会社 スクウェア・エニックス」(HP)

(2) IT産業

図表 I - 41 より、23 区の情報サービス業事業所数を見ると、新宿区は 1,024 所があり、港区、千代田区、中央区に次いで 4 番目に多い¹⁰¹⁾。

図表 I - 42 より、IT 産業の分布をみると、高田馬場や西新宿 7 丁目、新宿 1・2 丁目から四谷にかけての雑居ビルの多いエリアに多く立地している¹⁰²⁾。

図表 I - 41 23 区の情報サービス業事業所数・従業者数

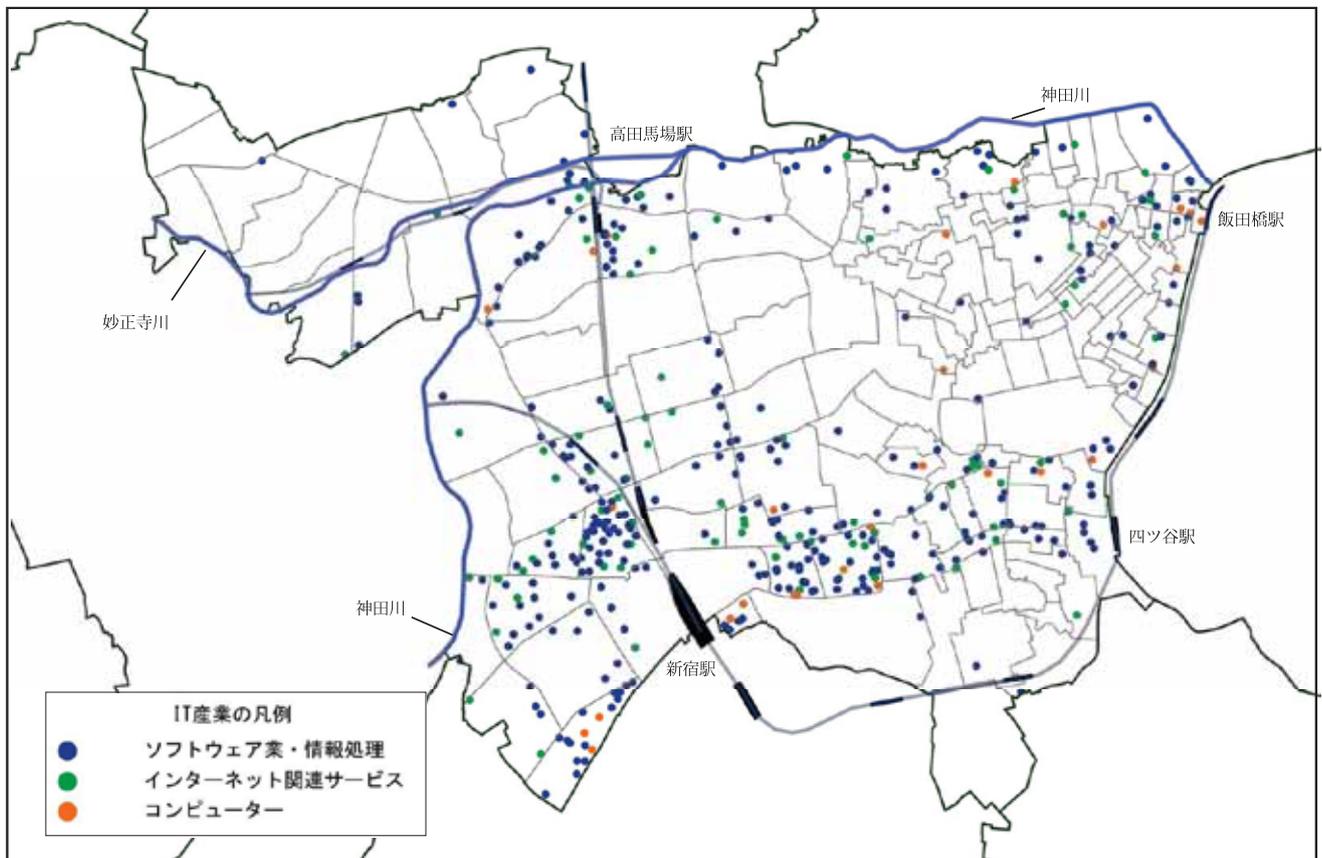


※2014年「経済センサス」より作成

IT 産業の創業年度をみると、コンピューターが企業に導入されるようになった 1980 年代以降が 8 割以上になっており、うち 2000 年代が 3 分の 1 以上を占める¹⁰³⁾。西新宿の高層ビル街に立地する事業

所は 1970 年代から 80 年代にかけて創業された比較的規模の大きな事業所が多く、2000 年代に入って創業した事業所は、新宿通りや高田馬場周辺に立地し、小規模なものが多い。

図表 I - 42 IT 産業分布図



※2017職業別タウンページをもとに作成 (区外へ移転した事業所、HPがない事業所を除く)

101) 経済センサスではIT 産業というカテゴリは無く、「情報サービス業」が該当する。
 102) なお、IT 産業としてタウンページから抽出したデータは、「情報処理サービス」「ソフトウェア業」「コンピューター」「インターネット関連サービス」で掲載されていた事業所を指す。
 103) 創業年度は、各社 HP より確認した。

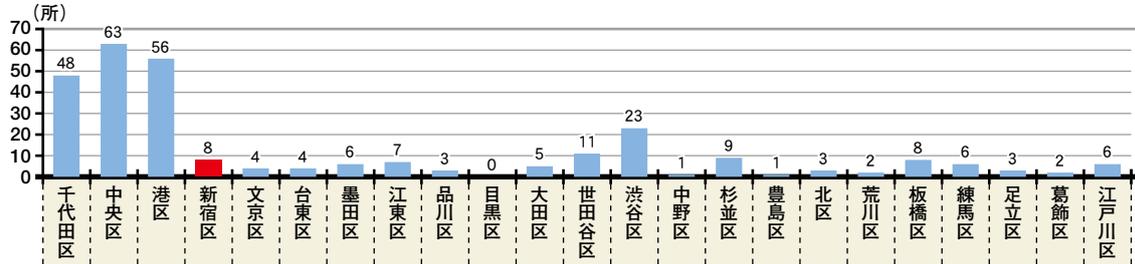
(3) メディア・芸能産業

① 放送業

図表 I - 43 より、23 区の放送業事業所数をみる

と、中央区、港区、千代田区、渋谷区の順になっており、新宿は 8 所となっている¹⁰⁴⁾。

図表 I - 43 23 区の放送業事業所数



※2014年「経済センサス」より作成

文化放送とフジテレビジョン

新宿区内には、かつて文化放送とフジテレビジョンがあった¹⁰⁵⁾。文化放送は、1948年、出版・放送を通じて布教を主務とする聖パウロ修道会が、宗教放送ネットワークを計画し、新宿区若葉1丁目の所有地にセントポール・ラジオセンターを建設したことから始まる。1951年に「日本文化放送協会」と改称し、1952年東京で2番目の本放送を開始した。1956年、日本文化放送協会を解散し、東急電鉄、旺文社、大日本印刷、小学館、講談社、東映等の会社の出資による「株式会社文化放送」を設立した。

一方、日本発の民放ラジオ局のラジオ東京（現TBSラジオ）や文化放送に続き、1954年に財界を中心に約200社の出資で「ニッポン放送」が有楽町に開局していた。1957年、文化放送はニッポン放送と

共同で「フジテレビジョン」を設立した。当初は、ニッポン放送の本社に同居していたが、1959年、新宿区河田町に本社ビルを建築し、東京で3番目のテレビ局として放送を開始した。1997年、港区台場のFCGビル（通称：フジテレビ本社ビル）に移転している。なお、文化放送は2006年に浜松町に新築した自社ビルに移転するまで、新宿区若葉でラジオ放送を続けていた。

ニッポン放送は、フジテレビジョンを設立するとともに、1962年に国内初のサテライトスタジオを新宿小田急百貨店内に開設した。1965年に全国民放ラジオ31社を結ぶ全国ラジオネットワークを発足し、1967年に長寿番組となる「オールナイトニッポン」の放送を開始した(1997年、台場のFCGビルに移転)。

104) 放送業には、公共放送業、テレビジョン、ラジオ、衛星、その他の民間放送業、有線放送業を含んでいる。近年増加している衛星放送の事業所は、親会社や関連企業に近接して立地する傾向にある。例えば、映画等のエンターテインメント系の場合は、東宝や松竹の本社がある有楽町や銀座に集積している。この他、テレビショッピングを扱う事業所は、物流倉庫が集積する品川区や江東区に立地していた。なお、主要なテレビ局は東京タワーからの電波が届きやすい位置等の理由で港区に立地している。しかし、近年は、デジタル放送への対応、顧客である広告会社との近接性、視聴者に対する先端的イメージなどが新たな要因になっていると言われている（小島龍一ほか「マスメディアの歴史と場所」）。

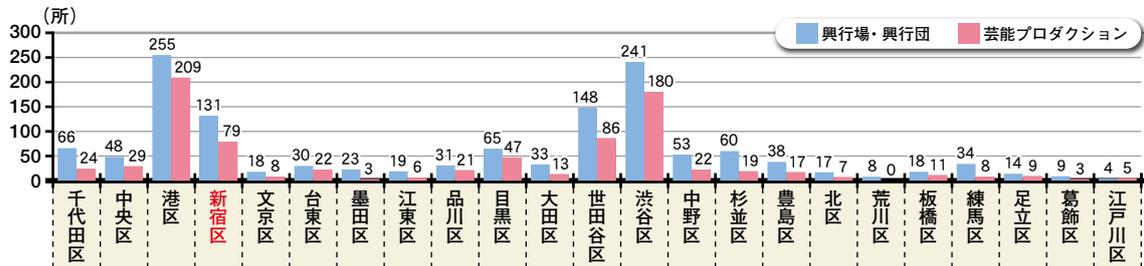
105) 文化放送の沿革については、TomaP「文化放送の開局時の歴史を探ってみた」(HP)、各社HP参照

② 芸能プロダクション

図表 I - 44 より、23 区の興業場・興業団の事業所数をみると、新宿区は 131 所で港区、渋谷区、世

田谷区に次いで 4 番目に多い¹⁰⁶⁾。同様に、新宿区の芸能プロダクション数は、79 所と 23 区で 4 番目に多い。

図表 I - 44 23 区の興業場・興業団、芸能プロダクション事業所数

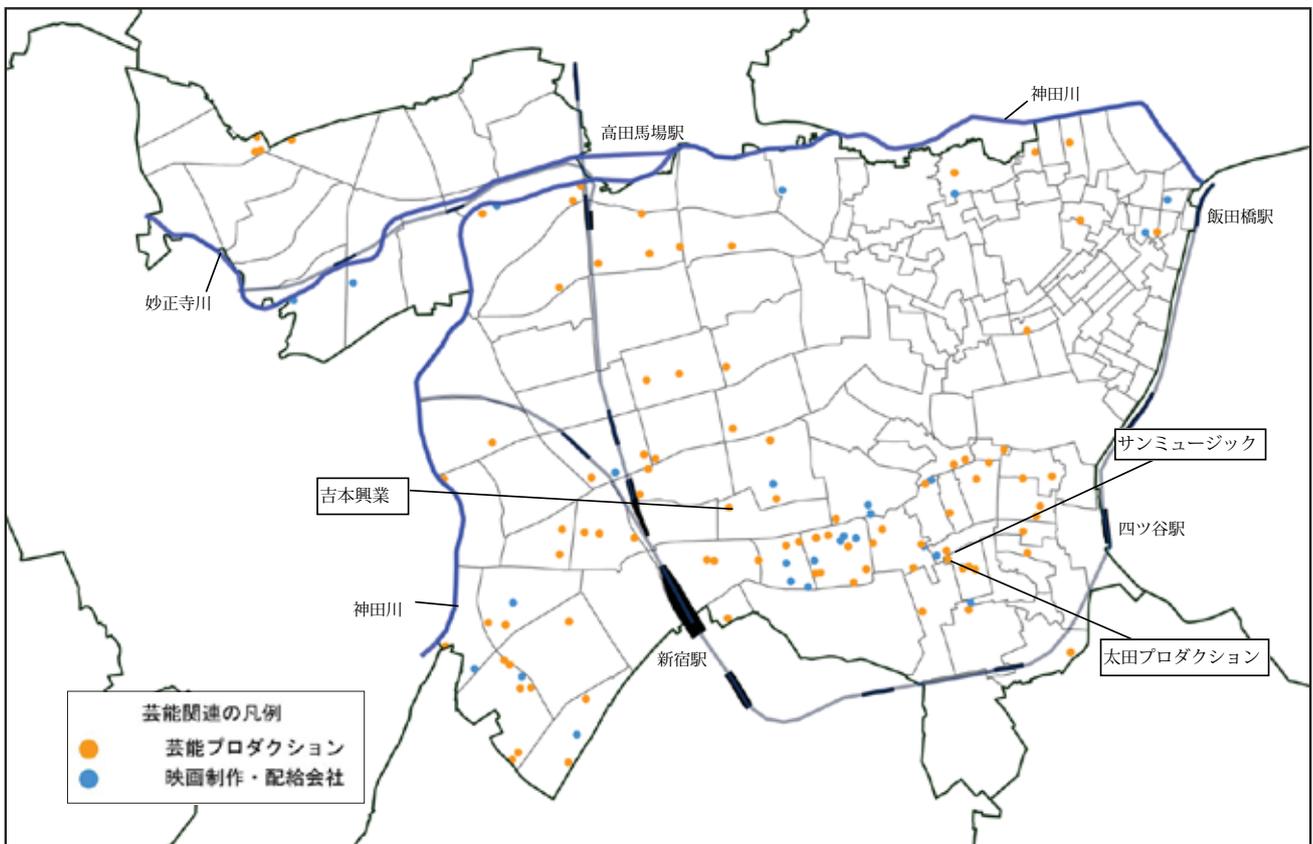


※2014年「経済センサス」、タウンページの検索結果(2017年10月17日)をもとに作成

図表 I - 45 より、芸能プロダクション、映画制作・配給会社の分布をみると、93 社があり、新宿区には新宿御苑前から四谷周辺にかけて多く立地している。また、お笑い芸人を多く抱えるプロダクションが 8 社あることが特徴である。また、これら芸能プロダ

クションに付設してお笑い芸人養成スクールも 6 校ある。新宿区には、芸能プロダクションである「吉本興業」「太田プロダクション」「サンミュージック」の本社がある。

図表 I - 45 芸能プロダクション、映画制作・配給会社分布図



※2016職業別タウンページをもとに作成(移転、廃業を除く)

106) 興業場には、劇団や音楽、芸能プロダクションなどのほか、相撲、ボクシング、プロ野球なども含まれている。

吉本興業の東京進出

吉本興業は、1912年に吉本吉兵衛・せい夫婦が大阪の天神橋にあった「第二文芸館」を買収し、寄席経営を創業した¹⁰⁷⁾。大正末期より東京への進出を開始し、1921年、神田の寄席「川竹亭」を買収し、「神田花月」として開場した。1932年に吉本興業合名会社の東京支社を開き、1935年には東京吉本の本拠地となる「浅草花月劇場」をオープンさせた。1930年代には映画にも進出し、1935年には東宝の前身の一つである写真化学研究所（PCL）と提携し、1936年にエンタツアチャコと徳川無声主演による映画を制作した。しかし、東京大空襲で神田花月や江東花月が焼失、戦後は、1946年、吉本株式会社として独立したが、浅草の斜陽化により業績が悪化し会社更生法を適用した。

吉本興業のマスコミ路線

一方、大阪の吉本興業は、1959年にうめだ花月、1962年に京都花月、1963年になんば花月を開場し、吉本新喜劇を生み出し、テレビで放映することで発展していった。かつて吉本はラジオなどの放送番組に出ると寄席への観客数が減ると考え、出演者は劇場に出てはいけなかったとしていたが、ラジオに出演した桂春団治が劇場に出て、かえって劇場に足を運んでもらえるという相乗効果が得られることがわかり、吉本のマスコミ路線を築いたのだという。1980年代に漫オブームが起こり、東京でオフィスを開設した。これ以降、「銀座7丁目劇場（1994～1999）」「渋谷公園通り劇場（1995～1998）」「ルミネ the よしもと（2001）」「吉本∞ホール（2006）」「浅草花月（2006）」「神保町花月（2007）」「品川よしもとプリンスシアター（2009～2011）」など、次々と寄席・劇場をオープンさせた。2008年に神田神保町から新宿に移転し、旧新宿区立四谷第五小学校の廃校を活用し本社ビルを構えている。

インタビュー： 吉本興業株式会社 林氏

吉本興業株式会社コーポレート・コミュニケーション本部副本部長の林尚恒氏は、インタビューにおいて、吉本興業株式会社が新宿に移転した経緯を以下のように語る。「吉本興業は1980年代、赤坂に事務所を設けたが、1990年代後半頃から、売上とタレント数ともに、東京が大きい割合を占めるようになる。2004年に事務所は神保町に移転したが、手狭になり、そのような時にKIHAIプロジェクトのことを聞き、新宿を検討することになった。吉本興業が大阪で劇場を開場している大阪ミナミと新宿東口また歌舞伎町が似ていること、庶民的で様々な大衆文化が混ざり合った日本一のエネルギーな歓楽街であること、人間らしさがある街であること、隣接する花園神社が芸能の神様であることなどの理由で新宿に移ることに決めた」という。

テレビの発展と芸能プロダクション

吉本興業以外の芸能プロダクションは、1960年代前後に創業しているものが多い。太田プロダクションは、1963年、新宿松竹文化演芸場の支配人だった磯野勉氏が新宿左門町で創業した芸能事務所である。2009年、近隣の四谷三丁目に移転している。東京や名古屋にタレント養成スクールも開設している。また、サンミュージックは、1968年、四谷で創業し、現在は左門町に移転している¹⁰⁸⁾。

③映画制作・配給業

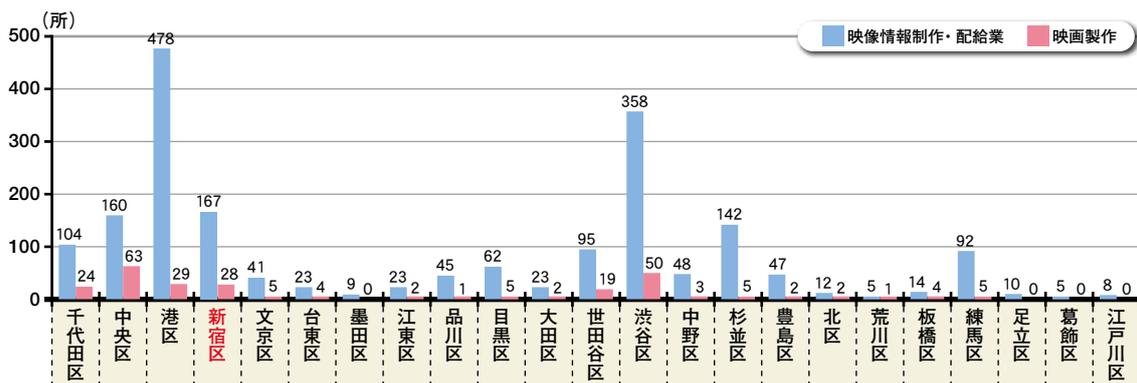
図表 I - 46 より、23区の映像情報制作・配給業の事業所数をみると、新宿区は167所と、港区（478所）、渋谷区（358所）に次いで3番目に多い¹⁰⁹⁾。映画製作会社をみると、新宿区は28社で、中央区（63社）、渋谷区（50社）、港区（29社）に次いで4番目に多い。大手の映画制作・配給会社の東宝、東映、松竹は、有楽町や銀座界隈に集積している。なお、新宿区内の映画制作・配給会社は、「現代ぶろだくしょん」の「はだしのゲン」や「プロダクション狼狽」の「十九歳の地図」などの社会派の作品を制作している会社が多い。

107) 吉本興業の沿革については、増田晶文『吉本興業の正体』、吉本興業株式会社（HP）

108) 本段落は、各事務所HPを参照。

109) 映像情報制作・配給業には、映画・ビデオ制作のほか、テレビ番組制作、アニメーション制作、映画・ビデオ・テレビジョン番組配給業を含む。

図表 I-46 23 区の映像情報制作・配給業事業所・映画製作会社数



※2014年「経済センサス」とタウンページの検索結果(2018年1月26日)をもとに作成

(4) 観光産業

① 宿泊施設

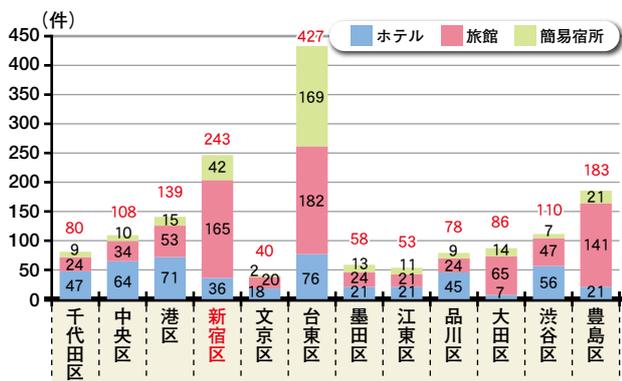
新宿区内にはホテル、旅館等の宿泊施設が集積している。「平成27年度東京都福祉・衛生統計年報」によると、平成28年3月の全国の旅館業の施設数は、78,519件で、このうち都内には2,883件ある¹¹⁰⁾。

23区のうち、客室数上位12区の千代田区、中央区、港区、新宿区、文京区、台東区、墨田区、江東区、品川区、大田区、渋谷区、豊島区で比較する。図表I-47より、下宿を除く、ホテル、旅館、簡易宿所の施設数の合計をみると、新宿区は243件で、台東

区に次いで2番目に多い。ホテルの施設数では港区、中央区、千代田区が多い。図表I-48より、ホテルと旅館の客室数の合計をみると、新宿区は17,855室で、港区(25,290室)に次いで、2番目に多い。また、1施設あたりの客室数を比較すると、港区(204室)や中央区(148室)に比べ、新宿区(89室)や台東区(50室)は小規模な施設が多い。

図表 I-47

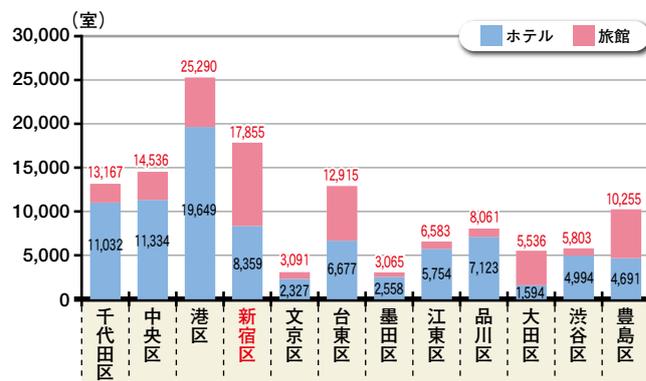
上位12区のホテル・旅館・簡易宿所施設数



※東京都「平成27年度東京都福祉・衛生統計年報」より作成。上位12区とは、客室数の上位12区を指す。

図表 I-48

上位12区のホテル・旅館客室数



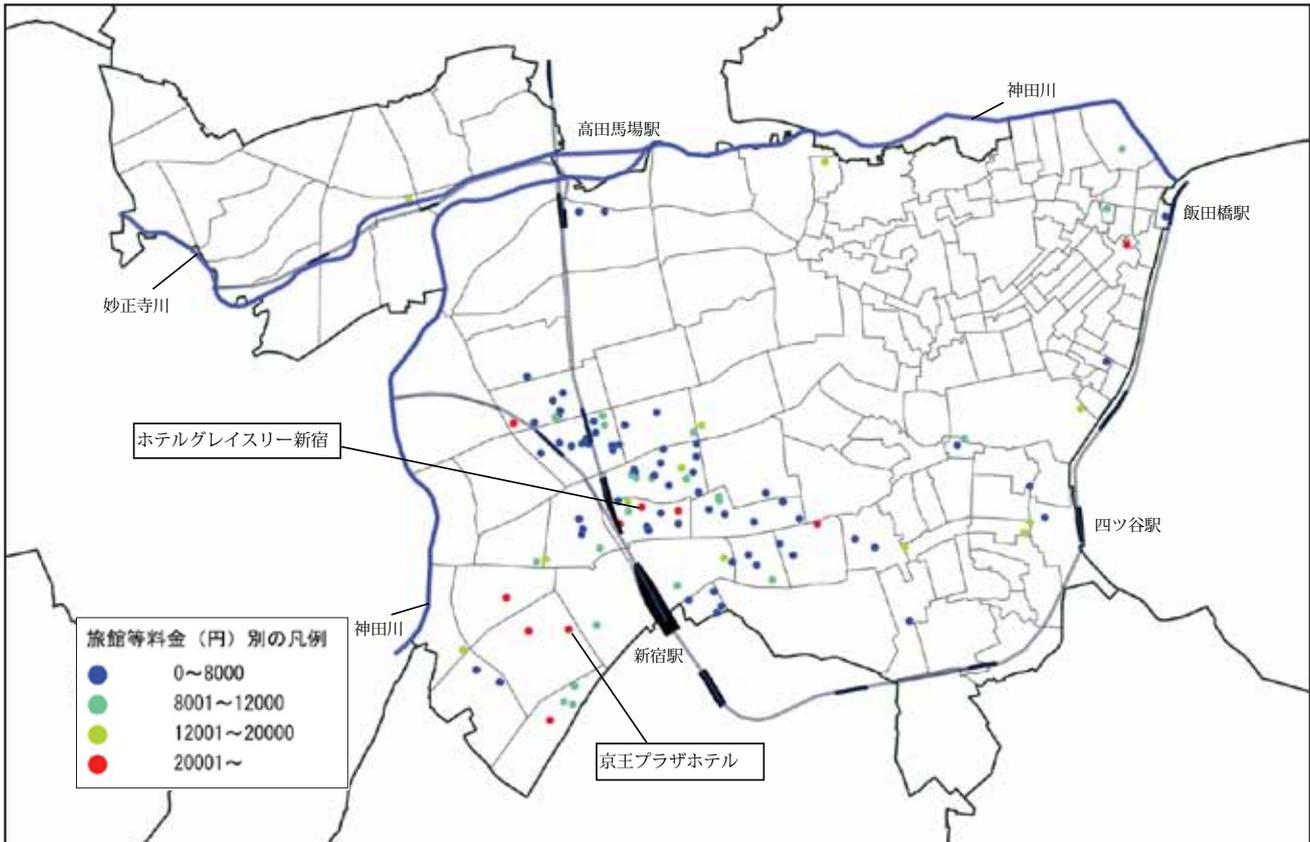
110) ホテルは洋式の設備を持つもの、旅館は和式の設備を持つものなどの基準があるが、アパホテルのように洋式のホテルであっても旅館営業の許可を取っているものもある。簡易宿所にはカプセルホテルやドミトリーなどが含まれる。また、旅館の中にはラブホテルが多く含まれている。

I 地域資源と集積のプロセス

図表 I - 49 より、新宿区内の旅館等の分布をみると、歌舞伎町に旅館が多く立地している。料金別で見ると、大久保から新宿駅周辺にかけて安価なカプセルホテルやビジネスホテルが多い。一方、西新宿の高層街には西新宿の開発の先駆けとなった京王プラザホテルが 1971 年に開業したほか、高級な外資系のホテルの集積も見られる。近年では、2015 年に

オープンした新宿東宝ビルに、1～2 階が飲食店やアミューズメントショップ、3～6 階が映画館「TOHO シネマズ新宿」、8～30 階には「ホテルグレイスリー新宿」が入っている。ホテルグレイスリー新宿では、ゴジラをみることのできるゴジラルームも登場した。

図表 I - 49 旅館等料金別分布図



※新宿区「新宿区旅館等一覧」と各ホテルのHPをもとに作成（2016年7月時点）

インタビュー： 京王プラザホテル 的場氏

京王プラザホテルのセールスディレクターの的場氏は、新宿のホテルの動向について以下のように語る。「バブルの頃は、西新宿周辺には京王プラザホテルの他にハイアットリージェンシー（1980年設立）があるくらいで、日本人観光客や中国人の団体客らの需要が高かった。徐々に外資系のホテルができてからは、欧米の旅行者はそちらを利用している。現在、京王プラザホテルの宿泊客は年間80万人で、宿泊の7割が海外からで、その半分はアジア（中国、ベトナム、タイなど）からである。また、外国人観光客は、新宿を起点にして地方に行く方が多い」

②外国人旅行者

新宿区内には外国人旅行者が多く訪問する観光スポットがある。図表 I - 50 のトリップアドバイザー株式会社の「外国人に人気の観光スポットランキング 2017」をみると、第7位に「新宿御苑」が入っている¹¹¹⁾。さらに、上記会社の人気の観光・アクティ

ビティから新宿区内の観光スポットを指すものを抜粋したものをみると、新宿御苑が第1位で、第2位に1991年に建築された丹下健三設計の「東京都庁舎」、第3位は2015年開館の「サムライミュージアム」となっている。

図表 I - 50 外国人に人気の日本の観光スポット

順位	観光スポット	所在地	順位	新宿区の観光スポット
1	伏見稲荷大社	京都府京都市	1	新宿御苑
2	アキバフクロウ	東京都千代田区	2	東京都庁舎
3	広島平和記念資料館	広島県広島市	3	サムライミュージアム
4	厳島神社	広島県廿日市市	4	新宿ゴールデン街
5	東大寺	奈良県奈良市	5	伊勢丹新宿店
6	清水寺	京都府京都市	6	明治神宮外苑
7	新宿御苑	東京都新宿区	7	神楽坂
8	金閣寺	京都府京都市	8	思い出横丁
9	箱根彫刻の森美術館	神奈川県箱根町	9	明治神宮野球場
10	高野山 奥之院	和歌山県高野町	10	歌舞伎町

111) ランキングは、2016年4月～2017年3月の1年間のトリップアドバイザー上の日本の観光スポットに投稿された外国語の口コミの評価、投稿数などをもとに独自のアルゴリズムで集計された結果であり、実際の外国人旅行者による訪問数の多さを反映しているわけではない。

本章では、主な地域資源の動向と新宿を取り巻く社会経済環境の変化を概観する。

1. 今後の大規模開発と交通網の整備

①大規模開発の状況

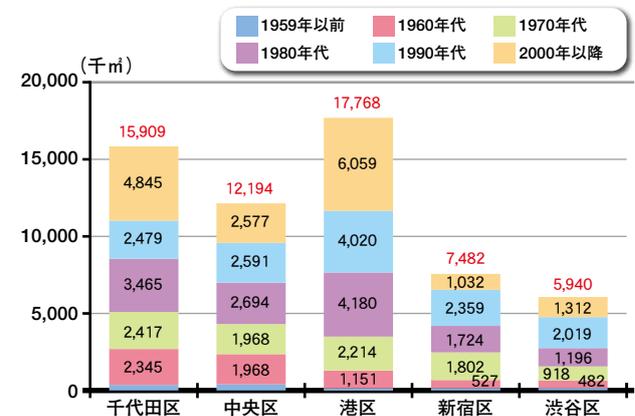
事務所面積

2014年1月1日時点の23区内の事務所(銀行含む)床面積のストックは約9,173万㎡で、前年から約31万㎡増加している¹⁾。都心5区(千代田区、中央区、港区、新宿区、渋谷区)の建築年代別の事務所床面積をみると(図表Ⅱ-1)、トータルでは港区が最も多く、次いで千代田区、中央区、新宿区になっている。千代田区、中央区、港区はバブル期の1980年代と2000年代以降の建築が多い。一方、新宿区は西新宿の再開発の時期である1970年代建築の事務所ストックの割合(24.1%)が高い。

オフィスビルの供給

大規模(事務所延床面積1万㎡以上)オフィスビルの今後の供給動向をみると(図表Ⅱ-2)、2017年から2021年の5年間の総供給量の約7割が千代田区、中央区、港区の都心3区への供給であり、3万㎡

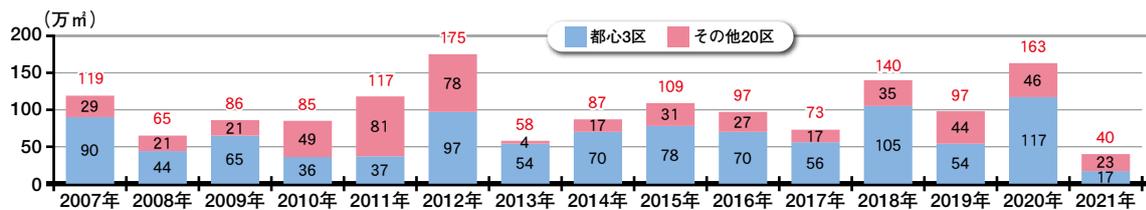
【図表Ⅱ-1】 都心5区の建築年代別事務所床面積



※東京都「東京の土地2014(土地関係資料集)の概要」をもとに作成

以上の大規模な物件が8割を超えることが予測され、大規模化と特定エリアへの集中化が進んでいる。これは、2002年の都市再生特別措置法の施行により、既存の容積率等の規制が緩和され、民間事業者主導の開発が進められやすくなったことの影響が大きい。

【図表Ⅱ-2】 エリア別大規模オフィスビルの供給量の推移



※森ビル(株)「東京23区の大規模オフィスビル市場動向調査2016・2017」より作成

開発計画

2017年から2020年にかけて整備中または計画中の開発計画の一覧をみると(図表Ⅱ-3)、千代田区、港区、中央区の都心3区に多いことがわかる。合計すると、丸の内・大手町エリア(約104万㎡)、芝浦・海岸・浜松町エリア(約61万㎡)、新橋・虎ノ門エリア(約48万㎡)、日本橋・八重洲エリア(約34万㎡)の特定のエリアで、現在大規模な再開発が行われている²⁾。

近隣では、渋谷駅周辺の7つの再開発プロジェクトが進んでいる。明治通りに接する渋谷と原宿を結ぶ「キャットストリート」の入口に、「渋谷キャスト」が2017年4月に開業し、オフィスは満室になっている。また、駅南側に、2018年秋開業予定の35階建て「渋谷ストリーム」の中に、ホテル、オフィス、文化施設が計画されている。オフィス部分では、IT企業のグーグルが六本木から移転、一括借り上げの予定である。

1) 東京都「東京の土地2014(土地関係資料集)の概要」

2) 森ビル(株)「東京23区の大規模オフィスビル市場動向調査2017」

図表 II-3 23 区の大規模複合ビルの竣工年表(2017.11.1 現在)

物件名	所在地
2017 年	
大手町ホトリア 大手町パークビルディング	千代田区大手町 1 丁目 2 番 1
住友不動産麻布十番プロジェクト	港区三田 1-4-1
GINZA SIX	中央区銀座 6 丁目 10 番、11 番
渋谷キャスト	渋谷区渋谷 1 丁目 23 番 2
赤坂インターシティ A IR	港区赤坂 1 丁目 5 番の一部
ソフィアタワー	千代田区麹町 6-1-1
日比谷パークフロント	千代田区内幸町 2 丁目 16 番 1
(仮称) 新東京武田ビル	中央区日本橋本町 2 丁目 1 番
(仮称) 目黒駅前タワープロジェクト	品川区上大崎 3 丁目 1 番、2 番
2018 年	
西品川一丁目地区市街地再開発(A)	品川区西品川 1 丁目・2 丁目・3 丁目他地内
東京ミッドタウン日比谷	千代田区有楽町 1 丁目 1 番
(仮称) 日本橋二丁目地区第一種市街地再開発(A 街区)	中央区日本橋 2 丁目 17 番 1 号
大手町二丁目地区第一種市街地再開発 A・B 棟	千代田区大手町 2 丁目地内
ニッセイ浜松町クレアタワー	港区浜松町 2 丁目 5 番 2 他
(仮) 渋谷駅南街区プロジェクト B-1 棟(渋谷ストリーム)	渋谷区渋谷 3 丁目 49-1 他
(仮称) 丸の内 3-2 計画	千代田区丸の内 3-2
(仮称) 日本橋二丁目地区第一種市街地再開発(C 街区)	中央区日本橋 2 丁目 17 番 1 号
2019 年	
西武鉄道旧本社ビル建替計画	豊島区南池袋 1 丁目 16 番 15 号
住友不動産西新宿六丁目プロジェクト	新宿区西新宿 6 丁目
(仮称) 新宿南口プロジェクト	渋谷区千駄ヶ谷 5 丁目地内
日本橋室町三丁目地区第一種市街地再開発事業 A 地区	中央区日本橋室町 3 丁目他
(仮称) 虎ノ門 2-1 0 計画	港区虎ノ門 2 丁目 10 番 4 号
(仮称) 南平台プロジェクト(東急不動産本社ビル)	渋谷区道玄坂 1 の 2 1
四谷駅前地区第一種市街地再開発事業	新宿区四谷 1 丁目
渋谷スクランブルスクエア	渋谷区渋谷 2 丁目 2 3 番 他
2020 年以降	
(仮称) OH-1 計画	千代田区大手町 1 丁目
東京ワールドゲート(虎ノ門トラストタワー)	港区虎ノ門 4 丁目 1 番地
Dタワー西新宿	新宿区西新宿 6 丁目
msb Tamachi(ムスブ田町) T GMM 芝浦プロジェクト	港区芝浦 3 丁目 1 番 20 他
竹 芝 ウォーターフロント開発計画	都港区海岸 1 丁目 22 番 1 他
(仮称) 竹芝地区開発計画	港区海岸 1 丁目 20 番 9(地番) 他
(仮称) 虎ノ門ヒルズビジネスタワー	港区虎ノ門 1 丁目 200 番 1 他
(仮称) 西新宿五丁目北地区防災街区整備事業	新宿区西新宿 5 丁目
(仮称) 豊洲二丁目駅前地区第一種市街地再開発事業 2-1 街区	江東区豊洲 2 丁目地内
浜松町二丁目 4 地区(A-3 棟)	港区浜松町 2 丁目 4 番地他

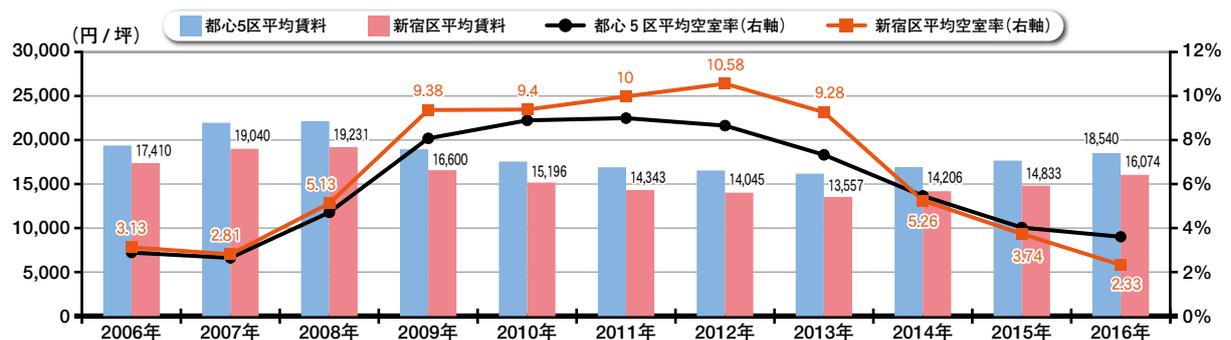
※三幸エステート㈱「オフィスビル竣工年表」、森ビル㈱「東京23区の大規模オフィスビル市場動向調査2017」等をもとに作成

オフィスビルの平均賃料・空室率

2017 年の実質 GDP 成長率の伸びや堅調な雇用情勢が続いており、業容拡大により企業のオフィスの需要が増えている。2012 年以降都心 5 区(千代田区、中央区、港区、新宿区、渋谷区)

のオフィスビルの平均空室率は減少傾向にあり、低い水準を維持し、都心 5 区の平均賃料は 36 か月連続上昇し 18,540 円/坪であった。新宿区でも同傾向であるが、平均賃料と平均空室率は都心 5 区の平均と比べて低い(図表 II-4)³⁾。

図表 II-4 都心 5 区のオフィスビル平均賃料・平均空室率の推移



※三鬼商事「MIKI OFFICE REPORT TOKYO 2016・2017」をもとに作成

3) 三鬼商事「MIKI OFFICE REPORT TOKYO 2017」

新宿区内では、2016年には「JRミライナタワー（延床面積約34,000坪）」「住友不動産新宿ガーデンタワー（同約43,000坪）」が竣工し、満室または高稼働になっている。また、西新宿では、29階建ての「Dタワー西新宿」と34階建ての「西新宿六丁目プロジェクト」の2棟の超高層オフィス複合ビルが建築中であり、新宿駅南口では、2019年8月竣工で、16階建てオフィス・商業ビル「（仮称）新宿南口プロジェクト」が進んでいる。また、東口では、新宿中村屋ビルが建て替わるなど、新宿大通り沿いの築40～50年以上経過した建物の建替えが今後も見込まれる。

②交通網の整備

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、首都圏を中心に複数の交通網の整備が計画されており、ここ数年、いくつか新たな動きがみられた。例えば、2013年3月東急東横線と東京メトロ副都心線が相互直通運転を開始し、埼玉県西部から横浜へダイレクトにつながった。これにより、横浜から新宿三丁目、池袋へ行きやすくなったことから、

新宿三丁目駅や池袋駅の乗降客数が増加しており、新たな人の流れを生み出した。2015年3月には、東京と上野を結ぶ「上野東京ライン」が開通し、北関東から東京や品川駅へのアクセスが向上した。また、2016年の春に新宿駅南口に直結して開業した「バスタ新宿」は、青森から福岡まで300都市に1,500台のバスが走る拠点となっている。

今後の整備予定としては、山手線と京浜東北線の品川と田町間に新駅が建設され、2020年の春に暫定開業を予定している。新駅は、品川・田町の車両基地跡の再開発を併せて行うことになっており、羽田空港に近く、2027年に品川・名古屋間にリニア中央新幹線が開業することから、新たな東京の玄関口になることが予想される。また、虎ノ門地区の利便性向上と、都心部とオリンピック競技場が多く存在する湾岸エリアまでの交通拠点のために、東京メトロ日比谷線に「虎ノ門新駅」を整備中であり、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催前に共用開始、2022年度最終完成を目指している。さらに、成田空港や羽田空港から都心部へのアクセス向上のための新規路線等の計画も検討中である。

2. 産業の動向

ここでは、製造業、IT産業、小売・飲食業、観光産業について、今後の動向を考察する。

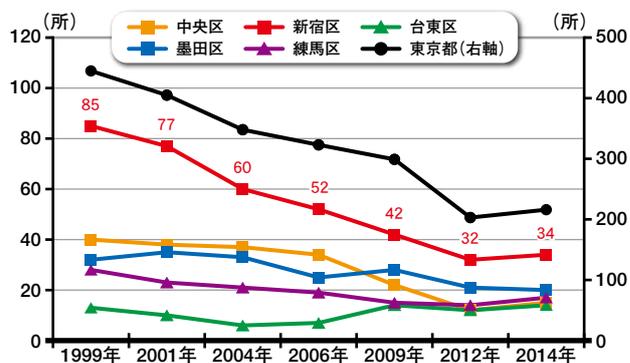
①製造業の動向

染色業

図表Ⅱ-5より、東京都の染色業の事業所数は、減少傾向にある。2014年の事業所数上位5区（中央区、新宿区、台東区、墨田区、練馬区）の推移をみると、もっとも事業所数の多い新宿区で減少幅が大きくなっている。これは、衣生活スタイルの変化により、消費者の着物離れが進んだためといわれる。しかし、近年は浴衣ブームで着物への愛好家が増えていることや、欧米やアジアからの外国人来日客の着物購入が増えるなど、新しい動きもみられる。

新宿区内では、新宿区染色協議会を中心に、染色工房の見学や染めを体験する「紺屋めぐり」や「染の小道」のイベントを行い、多くの人に染め物文化を知ってもらう活動に取り組んでいる。

図表Ⅱ-5 上位5区の染色整理業事業所数の推移



※1999年～2014年の「経済センサス」より作成（ただし、2006年までは「事業所・企業統計調査」。以下、同じ）

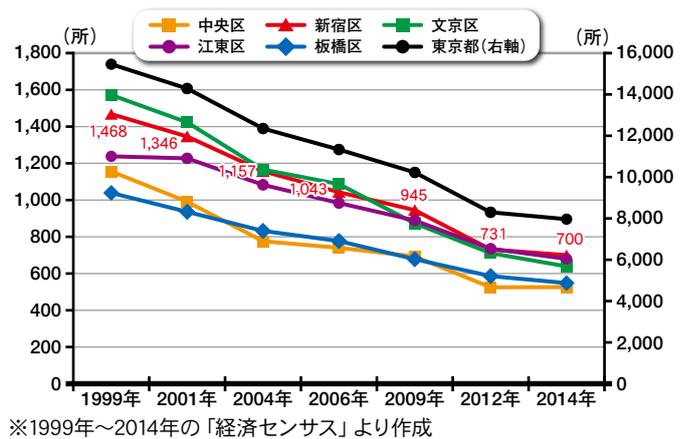
インタビュー： 染の小道 高市氏

染の小道は、妙正寺川に色とりどりの反物をかけ、作家が製作したのれんを商店街の店先に飾ってもらうことで、中井のまち全体が染物によってつながるイベントである。上落合の染色工房「二葉苑」の代表取締役の小林氏が、2009年から高市氏らと始めた。2017年度の染の小道開催時の落合・中井への来街者は16,000人にも上ったという。高市氏は、「染の小道は、イベントとしては成功した。しかし、卸を中心とした着物産業は流通改革がされておらず、染色は産業としての基盤を残すには限界がある。一企業では存続することは難しく、複数の染工房が連携しやすい仕組みづくりや個人の染職人の自活を応援する機動的な組織が必要と考え、一般社団法人染の里おちあいを2017年の3月30日付で設立した」といい、「地域にねざした共同運営的工房」に結び付けようとしている。

印刷・製本関連業

図表Ⅱ-6より、東京都の印刷・製本関連業の事業所数は、1999年以降大幅に減少している。2014年の事業所数上位5区（中央区、新宿区、文京区、江東区、板橋区）の推移をみると、5区ともほぼ同様の減少傾向を示している。この要因としては、インターネットの普及により、紙を媒体とした広告やパンフレット、雑誌などの市場が徐々に縮小していることが考えられる。これらの中には、電子書籍事業へ参入をしている印刷企業も存在している。

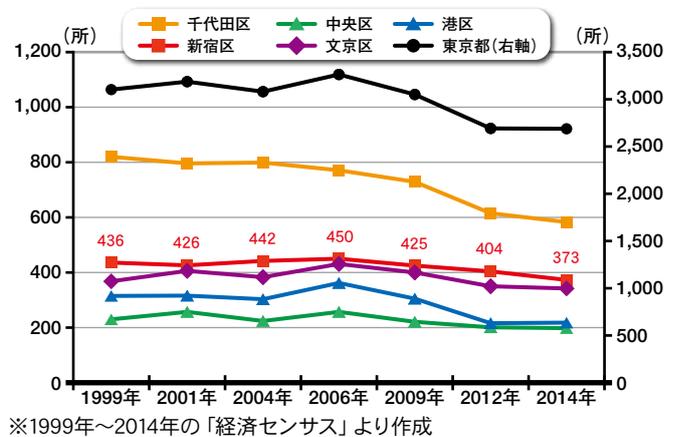
図表Ⅱ-6 上位5区の印刷・製本関連業事業所数の推移



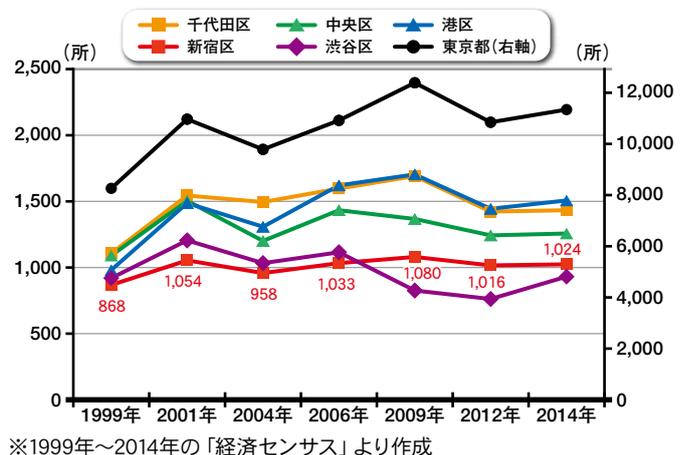
出版業

図表Ⅱ-7より、東京都の出版業の事業所数は、おおむね2006年以降減少傾向にある。2014年の事業所数上位5区（千代田区、中央区、港区、新宿区、文京区）の推移をみると、千代田区では減少幅が大きい、新宿区ではゆるやかな減少にとどまっている。日本には3,500社を超える出版社が存在するが、多くは従業員数が10人以下の中小零細企業であり、都内に集中している。出版市場の縮小が続く中で、出版社総数は毎年80社程度減少している。出版の需要が低下している要因として、読者を惹きつける魅力あるコンテンツが不足していることに加え、情報源としての出版物が、速報性や検索性に勝るインターネットメディアに代替されている点が挙げられる。成長分野として期待されている電子書籍市場規模は拡大傾向にあるが、出版市場全体に占めるシェアは小さい。

図表Ⅱ-7 上位5区の出版業事業所数の推移



図表Ⅱ-8 上位5区の情報サービス業事業所数の推移



② IT産業の動向

図表Ⅱ-8より、東京都のIT産業の事業所数は、おおむね増加傾向にある。2014年の事業所数上位5区（千代田区、中央区、港区、新宿区、渋谷区）でみると、各区ともおおむね横ばいになっている。

インタビュー：（有）そーほっと 田中氏

区立高田馬場創業支援センター（指定管理者：有限会社そーほっと）施設長の田中氏は、「新宿にあるIT企業は、自社でサービスを作るものから請負まで様々あるが、渋谷や六本木とは文化が違うと感じる。渋谷駅周辺の雑居ビルは空きテナント物件が少なくなっていると聞いており、小型のテナント物件を求めて創業間もないIT企業が新宿区内に流入してくる可能性もある。高田馬場での創業の利点としては、早稲田大学を始めとする教育機関が多く立地し、アルバイトの学生が見つつけやすいこと、山手線と東西線・西武新宿線もあり交通の便がよいこと、賃料が比較的安価な小さく古いテナントビルがあること、学生向けの安い飲食店が多くコミュニケーションがとりやすいこと、などがある。特に、IT企業では人材が重要であり、ビジネスモデルより誰と仕事をするかが重要」と語る。

③小売・飲食業の動向

百貨店・商業ビル

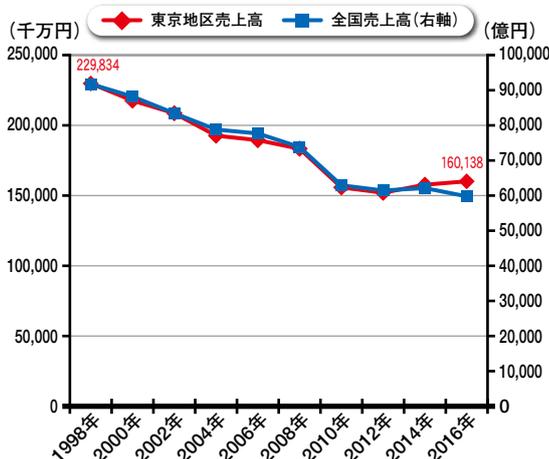
図表Ⅱ-9より、全国と東京地区の百貨店売上高は減少傾向にあり、2010年以降全国はほぼ横ばいで、東京地区はやや増加している。外国人観光客の一人あたりの購買単価については、図表Ⅱ-10より、中国人の爆買いがみられた2014年をピークに2016年まで減少していたが、その後上昇した後、おおむね横ばいとなっている。1店舗あたりの免税売上高の推移をみると、1人あたり購買単価の増減とおおむね同じ傾向をしており、購買単価が上昇すると免税売上高も上

昇していることがわかる。なお、2017年4月時点の免税売上は、前年同月比で、高島屋が6%、小田急が30%、伊勢丹が9%伸びている⁴⁾。

都内の商業地をみると、2017年にGINZA SIXが開業した銀座エリアでは、同ビルに移転したブランド店跡地にショールームなどファッション以外の出店も多くなっている。表参道エリアでは、原宿方面にヨドバシカメラの出店計画や原宿ゼロゲートなどの開発計画がある。一方、新宿エリアは、歩行者流量が多く様々な人が訪れるところから、ジョイントワークスなど新業態のファッション関連の出店が見られる。

図表Ⅱ-9

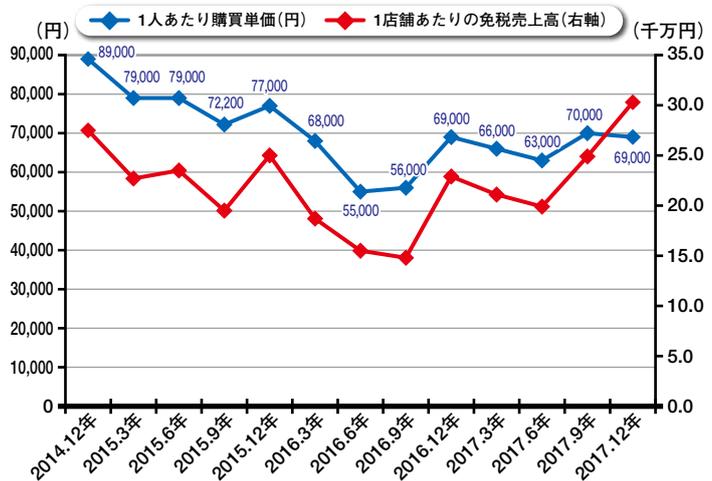
全国・東京地区百貨店
年間(1～12月) 売上高の推移



※日本百貨店協会プレスリリース（売上高）より作成

図表Ⅱ-10

全国百貨店外国人観光客 1人あたり購買単価
1店舗あたりの免税売上高



※日本百貨店協会プレスリリース（その他）をもとに作成

インタビュー： 伊勢丹新宿本店 島田氏

伊勢丹新宿本店に長年勤めている総務部島田氏は、「1996年の高島屋の進出は脅威であったが、結果は新宿を訪れる人が増え、伊勢丹の売上も増えた。新宿は銀座のように宝飾品をつけて来るよそ行きのまちでなく、ちょっとおしゃれをして来るまち。東口の課題は、人の多さに街路の幅が見合っていないことで、まちの再開発には“ゆとり”が必要である」と語る。

4) 「新宿新聞」2017年5.25

家電量販店

2010年の家電製品の国内小売額は約9兆4000億円だった⁵⁾。その後、エコポイント制度が追い風になって市場は拡大したが、2011年以降縮小傾向にある。秋葉原には、ヤマギワ、廣瀬無線、ラオックス、サトームセンや九十九電機、石丸電気などの電気部品の卸商等から始めた家電量販店が集まっていた。しかし、カメラ系量販店や郊外の家電量販店との競争激化と周辺開発による地価の高騰で経営危機に陥

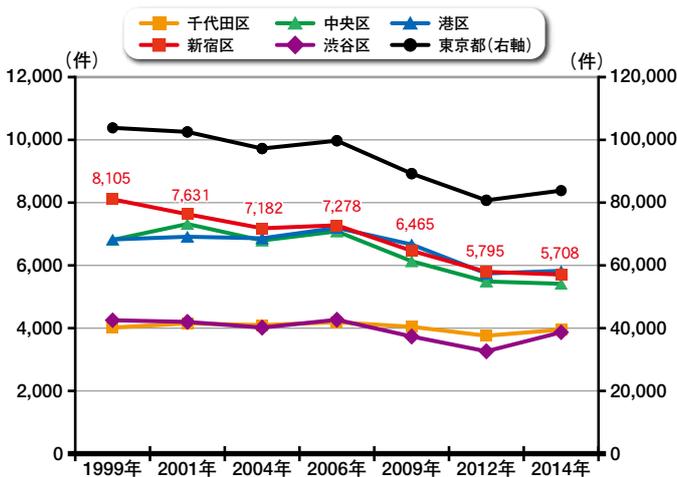
り、ヤマダ電機やビックカメラ等に吸収合併された⁶⁾。また、家電量販店大手のヤマダ電機は、2015年に郊外の大型店などを大幅に閉鎖した。少子高齢化による国内の需要が縮小していることと、ネット通販の台頭が背景にある。

飲食業

図表Ⅱ-11より、東京都の飲食業を営む事業所数は、年々減少している。都心5区（千代田区、中央区、港区、新宿区、渋谷区）を比較すると、千代田区と渋谷区はほぼ横ばいで推移し、港区、中央区、新宿区は減少傾向にあり、中でも1999年と2014年を比べると、新宿区の下落幅が大きい。飲食店の内訳をみると、「バー・キャバレー・ナイトクラブ」が大きく減少しており、企業の接待の減少などが要因として考えられる。飲食業の市場規模は、人口減や高齢化による食需要の縮小、節約志向の高まりによる低価格化の進行や中食市場の拡大などから、減少傾向にあるといわれている。

新宿区内では、2015年に歌舞伎町にTOHOシネマズや新たな施設ができ、レッドカーペットイベントが行われるなど、女性も来訪しやすくなっている。また、国道20号高架下に飲食店街の「サナギ新宿」が開店し、新名所になっている。

図表Ⅱ-11 都心5区の飲食店を営む事業所数の推移



※1999年～2014年の「経済センサス」より作成

インタビュー： 大阪家 柴本氏

歌舞伎町にある昭和55年創業のお好み焼き店「大阪家」の若女将の柴本氏は、「数年前から祭りで女神輿を担ぐなど、地域のイベントに参加するようになった。女性や子供も楽しめるエンターテインメントのまちになってほしい。そして、新宿はこれからも進化してほしい。その時代その時代にあわせて変わっていければよい」という。

インタビュー： 新宿区商店会連合会事務局 佐藤氏

新宿区商店会連合会事務局長の佐藤氏は、「活性化をさせるために新しい知も必要。顧客のニーズをどう捉えていくか。新宿の特性として約6割が飲食店。大人数入の店が多いが、アルコールが苦手な若者が多くなったこと、高齢者は小ロット（少量）でよいなど、消費者の嗜好にあわなくなっている。問題点としては土地が高いこと。消費者の需要が変わり魅力がなくなったり、担い手の高齢化などを理由として、業態変更している」と語る。

5) 調査会社ジーエフマーケティングサービスジャパン「家電・IT市場動向」
6) 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 中島嘉孝「電気街の史的変遷」

④観光産業の動向

外国人観光客

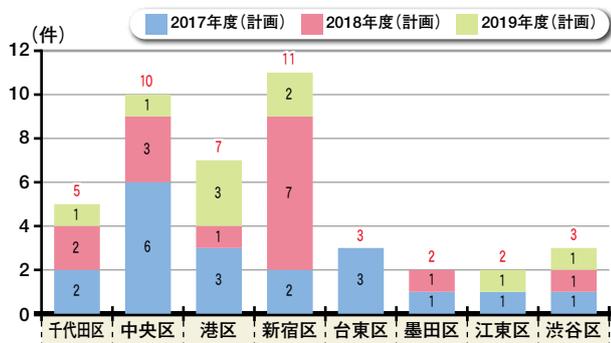
2012年以降、訪日外国人旅行者が急増し、2016年には2,404万人にまで増加した。これは、政府が観光立国を成長戦略の柱に掲げ、ビザ発給条件等を緩和しており、東南アジアからの訪日外国人旅行者が急増しているからである。このうち、2016年に東京都を訪れた外国人旅行者は1,310万人であった⁷⁾。また、訪都外国人旅行者に一番満足した場所の第1位が「新宿・大久保」であり、ショッピングや飲食、高層ビル等の探索、ナイトライフなどを楽しんでいることがわかった⁸⁾。なお、新宿駅東南口に2016年12月に「新宿観光案内所」がオープンしており、

2017年10月までに約22万人が訪れている。

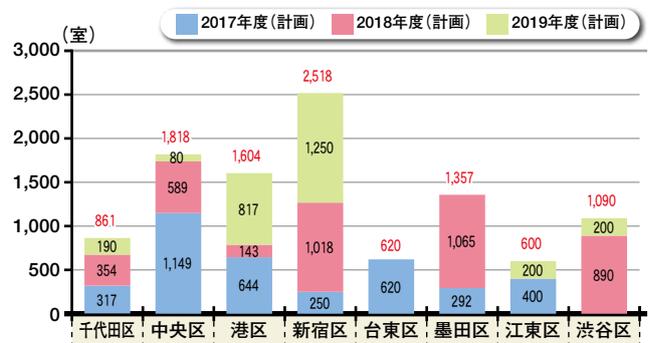
ホテル

近年、円安と訪日ビザの緩和などによる訪日観光客の増加により、東京や大阪の都市部を中心に、ホテル不足が懸念されている。ここ数年の大都市圏のホテルの稼働率は80%を超え、客室の平均販売価格も上昇傾向にある。政府は、2020年に訪日観光客4千万人を目標にしており、都心では、訪日客の取り込みをめざしたホテルの建設が相次いでいる。2017年度から2019年度のホテル・旅館建設の計画をみると(図表Ⅱ-12、13)、施設数、客室数とも新宿区が最も多く、11件2,518室となっている⁹⁾。

図表Ⅱ-12 計画予定のホテル・旅館施設数の推移



図表Ⅱ-13 計画予定のホテル・旅館客室数の推移



コンテンツ・ツーリズム

近年、コンテンツ・ツーリズム、特に地域活性化としてのアニメツーリズムが注目され、「聖地巡礼」と称して観光に結び付けていこうとする取組が各地で増えている。聖地巡礼とは、「アニメや漫画などの作品において物語の舞台やモデルとなった、ゆかりのある場所を「聖地」とよび、実際に聖地を訪問すること」である¹⁰⁾。一般社団法人アニメツーリズム協会によって公表された全国のアニメ聖地一覧によると、全国88カ所の聖地が公表されているが、東京

都では26ヶ所の聖地(23区では17ヶ所)が、アニメやゲームの背景になっている場所が取り上げられている。

新宿区内では、新海誠監督の映画「君の名は。」が指定されており、歌舞伎町や東京都庁などの高層ビル街、須賀神社の階段がスポットとして勧められている。また、東京都庁はアニメ聖地88をめぐる重要な拠点の「88番札所」として、2018年に東京都庁第一本庁1階の「東京観光情報センター」にアニメ聖地スポットを設置する予定である。

7) 東京都「東京都観光客数等実態調査」
 8) 「平成28年度 国別外国人旅行者行動特性調査」
 9) みずほ信託銀行「不動産トピックス2015.1」、インターネット調査をもとに作成
 10) 「ニコニコ大百科(仮)」(HP)

図表 II - 14 新宿を舞台とした主な作品一覧

番号	作品名	媒体	発行・放映年	原作・脚本・監督	区内の主な舞台
1	薔薇の葬列	映画	1969	松本俊夫	新宿2丁目
2	新宿泥棒日記	映画	1969	大島渚	新宿紀伊國屋書店
3	シティハンター	マンガ・映画ほか	1985-1991	北条司	歌舞伎町
4	新宿鮫シリーズ	小説	1990-	大沢在昌	歌舞伎町
5	軽蔑	小説・映画	1992	中上健次	歌舞伎町
6	海がきこえる	アニメ映画	1993	氷室冴子	西新宿の高層ビル街
7	新宿ゴールデン街の人たち	小説	1997	田中小実昌	ゴールデン街
8	GTO	ドラマ	1998	藤沢とおる	西新宿のLOVE
9	電車男	ドラマ・映画	2005	なし(実話)	西新宿のLOVE
10	初恋	映画	2006	塙幸成	新宿のジャズ喫茶
11	アンフェア	ドラマ	2006	秦建日子	西新宿のLOVE
12	時をかける少女	アニメ映画	2006	細田守	中井商店街
13	海月姫	アニメ	2008	東村アキコ	高田馬場の日本館
14	新宿インシデント	映画	2009	イー・トンシン	歌舞伎町
15	デュラララ!!	アニメ	2010	成田良悟	西新宿のLOVE
16	E D E N	映画	2012	武正晴	新宿2丁目
17	じょしらく	アニメ・マンガ	2012	久米田康治	新宿末廣亭
18	言の葉の庭	アニメ映画	2013	新海誠	新宿御苑
19	ラストシンデレラ	ドラマ	2013	中谷まゆみ	西新宿のLOVE
20	君の名は。	アニメ映画	2016	新海誠	須賀神社

※インターネット調査により作成

図表 II - 14 より、新宿を舞台とした作品一覧をみると、これまでに新宿区内のスポットが舞台となり描かれた作品は多くある。

西新宿のアイランドタワーには「LOVE」のオブジェがあり、その風景は『ラストシンデレラ』『GTO』『電車男』『アンフェア』『デュラララ!!』などの様々なドラマやアニメに映っていることから注目を集めている。新宿御苑は映画『言の葉の庭』の、新宿末廣亭はアニメ『じょしらく』の舞台であると言われている。

また、大沢在昌による、新宿署の鮫島警部を主人公とする小説である『新宿鮫シリーズ』や和久井健による歌舞伎町のスカウトを描いたフィクションである『新宿スワン』、映画では、イー・トンシン監督『新宿イン

シデント』や、漫画では、北条司による『シティハンター』など、多くの作品が歌舞伎町を舞台に描かれた。ほかに、高田馬場近辺が舞台となったアニメ『海月姫』、中井の商店街や駅周辺が背景に描かれた映画『時をかける少女』などがある。

また、新宿はコンテンツを生み出す作家とも関わりが強い。田中小見昌の『新宿ゴールデン街の人たち』では、当時のゴールデン街の様子が描かれている。早稲田大学は現在に至るまで、直木賞作家の乃南アサ、重松清、角田光代、森絵都や、芥川作家の小川洋子、綿矢りさなど、多くの作家を輩出している。さらに、新宿ゆかりの素材を活かした商品づくりも行われている。

インタビュー：(株)ナルコーポレーション 成田氏

地域開発プロデューサーの成田氏は、新宿にゆかりの野菜である「内藤とうがらし」といってコンテンツを活用して地域づくりを行っている。成田氏は、「その地域の人に誇れるものをつくる。新宿には、江戸伝統野菜があり宿場町があったため、内藤とうがらしに目をつけた」という。インタビュー当時、成田氏は新宿のエリアごとの特徴を取り入れた七味のとうがらしを開発中であったが、現在は完成し新宿武蔵野館で販売をしている。例えば、歌舞伎町の「ゴジラ七味」、高田馬場の「アトム七味」、大久保百人町の「鉄砲隊七味」などがある。「このような取組が成功するための条件は、オリジナリティがあり、ストーリー性があり、時代にあったものをビジネス化することで、持続可能になる」と語る。

3. 外国人居住者の動向

①外国人留学生

図表Ⅱ-15より、全国の外国人留学生数は年々増加しており、2010年度には141,774人であった留学生数が、政府の「留学生30万人計画」をきっかけに増え続け、2017年度には267,042人まで増加している¹¹⁾。また、地域別にみると、関東が49.9%で半数を占めている¹²⁾。なお、政府は地域格差是正のために23区の大学の定員増を認めない政策を確定したが、外国人留学生を対象外にする方針を示している¹³⁾。

大学別でみると、早稲田大学(新宿区)は留学生受け入れ数が全国で第1位であり、第2位は東京大学(文京区)、第3位は日本経済大学(渋谷区)である。

図表Ⅱ-16より、早稲田大学の外国人学生在籍者数は、2010年5月に3,972人だったが、2017年5月現在は5,413人と、約1.4倍に増加している。2017年5月1日時点では、中国からの留学生が最も多く、2,822人で全体の52%を占め、韓国15%、台湾7%が続く。出身地域別にみると、アジアからの留学生が、全体の9割以上を占めている(図表Ⅱ-17)。

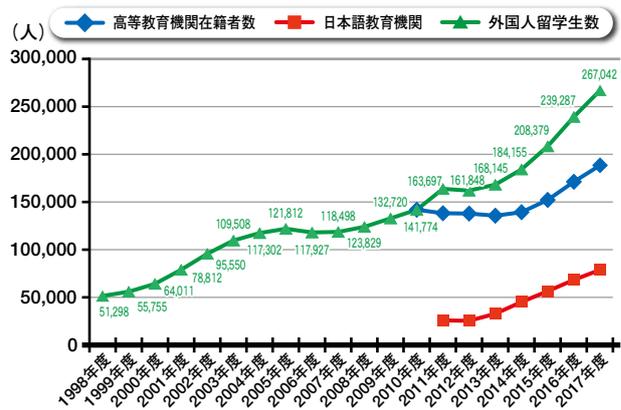
②外国人の就業

2016年の日本で働く外国人労働者は100万人を超え、そのうち、20万人以上が海外からの留学生である。留学生は週28時間以内であれば、原則自由に働くことができるようになっているため、「単純労働」に従事することができる。政府は留学生を積極的に受け入れる方針を出しており、ここ5年間で日本語学校は100校以上増え、568校になっている¹⁴⁾。

図表Ⅱ-18より、日本全体や東京都全体の留学の在留資格を有する外国人の日本の企業等への就職許可人数は増加している。また、2015年における許可状況を国籍別構成比でみると、中国が62.9%で最も多い¹⁵⁾。職務内容でみると、翻訳・通訳が減少し、かわりに販売・営業、教育、経営・管理業務が増加している。

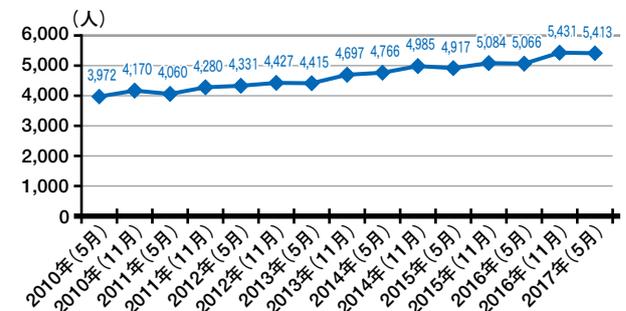
2016年には「出入国管理及び難民認定法の一部を改正する法律」が成立し、2017年には在留資格の「介護」が加えられた。2018年度には、全国で「創業準備ビザ」を在留資格に加えることが検討されている。

図表Ⅱ-15 全国の外国人留学生数の推移

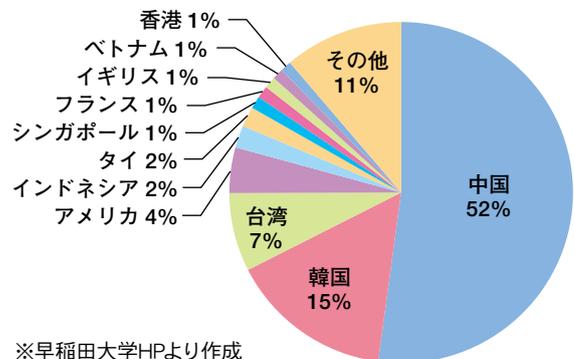


※日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査結果」より作成

図表Ⅱ-16 早稲田大学の外国人学生在籍者数

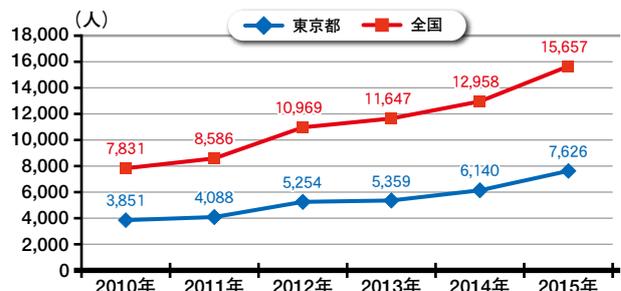


図表Ⅱ-17 国籍別にみた早稲田大学外国人学生在籍者(2017年5月1日時点)



※早稲田大学HPより作成

図表Ⅱ-18 企業等への就職許可人数の推移



※法務省入国管理局「平成27年における留学生の日本企業等への就職状況について」より作成

11) 在留資格「留学」「就学」の一本化から2010年までは高等教育機関在籍者数であり2011年以降は、外国人留学生数は、日本語教育機関に在籍する留学生も含めている。
 12) (独法)日本学生支援機構「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」(各年5月1日の留学生数)
 13) 「日経新聞」2017年6.14
 14) NHK「外国人労働者100万人時代“働く留学生”の実態は」
 15) ベトナム(7.4%)とネパール(3.2%)は増加している。

4. 大学・マンション開発の動向

①大学の都心回帰

都心に位置していた大学が郊外に移転したのは、1960年前後に制定された工場等制限法により、都市の過密を緩和するため、大都市への工場等（大学を含む）の立地を規制したことによる。しかし、2002年に同法が廃止されると、18歳人口が減少過程に入る「2018年問題」もあり、大学の都心回帰の流れが始まり、既に40前後のキャンパスが都心へ移転した。この流れは今後も続くと考えられる。

首都圏全体の大学の収容定員をみると、2009年の93.1万人に対し、2015年は94.4万人と1.3万人増加しているが、東京23区では、2009年の36.2万人から2015年の40.2万人となり、4.0万人増加した。一方、東京の多摩地区の収容定員は2009年の18.7万人から2015年の18.1万人に減少し、東京の多摩地区、千葉県、神奈川県から23区への定員移動があったと推測される¹⁶⁾。

ここ数年の都内の大学移転（計画）の一覧をみると（図表Ⅱ-19）、青山学院大学や実践女子大学のように都心のキャンパス内に高層化し集約したものと、東京理科大学のように新たな立地に整備したものがあ。新宿区内では、町田市に本部を置く桜美林大学が、大久保駅北側の国立科学博物館新宿分館跡地に百人町キャンパスを建設し、2019年4月にビジネスマネジメント学群等を開設する予定である。これにより、町田キャンパスから約2000人の学生が移ってくる予定である。また、千駄ヶ谷駅前（渋谷区）に、津田塾大学が2017年4月に総合政策学部を新設している。

②マンション開発の動き

2017年4月現在、首都圏で建設・計画されている超高層マンション（20階建て以上）は186棟・8万

図表Ⅱ-19 東京都の主な大学移転（計画）一覧

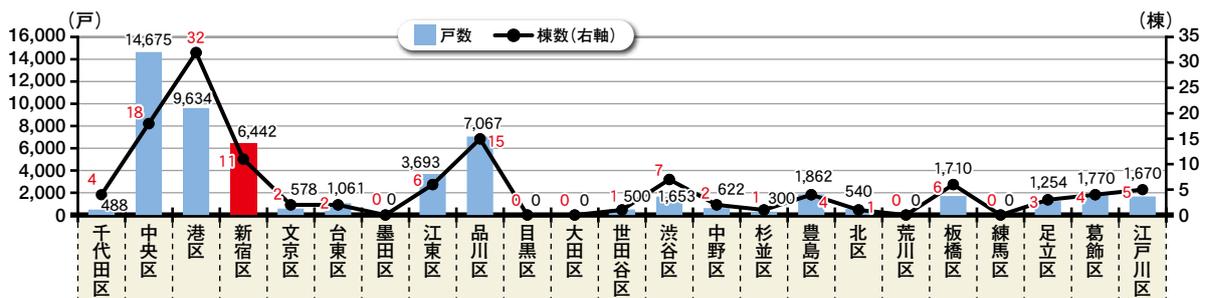
番号	大学名	実施年	移転先
1	青山学院大学	2013	渋谷区
2	帝京平成大学	2013	中野区
3	東京歯科大学	2013	千代田区
4	東京理科大学	2013~2016	葛飾区
5	明治大学	2013	中野区
6	実践女子大学	2014	渋谷区
7	東京工芸大学	2014	中野区
8	東洋学園大学	2014~2016	文京区
9	立正大学	2014	品川区
10	大妻女子大学	2015~2018	千代田区
11	川村学園女子大学	2015	豊島区
12	拓殖大学	2015	文京区
13	文化学園大学	2015	渋谷区
14	杏林大学	2016	三鷹市
15	東京理科大学	2016	千代田区
16	東京成徳大学	2016	北区
17	津田塾大学	2017	渋谷区
18	東洋大学	2017	北区
19	東京電機大学	2018	足立区
20	桜美林大学	2019	新宿区
21	東京音楽大学	2019	目黒区
22	日本女子大学	2021	文京区
23	中央大学	2022	文京区
24	東京国際大学	2023	豊島区

※各大学HPより作成

919戸で、このうち23区内は124棟・5万5519戸で全体の6割を超えている。これは、東京湾岸部を中心に大規模開発や複合再開発が行われていることが大きく影響している。図表Ⅱ-20より、2017年以降完成を予定している、23区の超高層マンションの計画戸数をみると、新宿区11棟・6,442戸、中央区の18棟・14,675戸、港区の32棟・9,634戸、品川区の15棟・7,067戸に次いで、4番目に多くなっている。

新宿区内では、50階以上の超高層マンションが、西新宿三丁目に2棟、同5丁目に1棟（分譲済み）が計画され、合計で4,000戸を超えている¹⁷⁾。

図表Ⅱ-20 23区超高層マンション計画棟・戸数(2017年以降完成予定)



※不動産経済研究所「不動産経済 マンションデータ・ニュース」(2017年4.25)より作成

16) リクルート進学総研 2015年「リクルートカレッジマネジメント195」

17) 不動産経済研究所「不動産経済 マンションデータ・ニュース」(2017年4.25)

5. 文化の動向

①劇場・ライブハウス・音楽堂

図表Ⅱ-21より、首都圏の主なホールの動向をみると、2015年までに劇場・ライブハウス・音楽堂として利用しているホールの閉鎖、改修や建替えが集中した。これにより上演会場が不足する「2016年問題」がおこった。2011年の東日本大震災の発生をきっかけにした耐震強化によるもの、老朽化を要因と

するもの（九段会館、日比谷公会堂）のほか、建築基準法等の法規的に同規模での建替えが難しくなったもの（普門館）や、仮設建築物として建築していたもの（SHIBUYA-AX）がある。また、都心部では地価が上昇し高度利用による再開発が進んでおり、文化施設の単体での利用が難しくなっている。

図表Ⅱ-21 首都圏のホールの閉鎖・改修・建替え予定

番号	名称	住所	建築年	収容人数	閉鎖・改修・建替え予定
1	東京厚生年金会館	新宿区	1961年	2,062	2010年閉鎖、2019年ヨドバシカメラ自社ビル予定
2	九段会館講堂	千代田区	1934年	1,112	2011年閉鎖、2022年開業予定
3	普門館大ホール	杉並区	1970年	約5,000	2013年閉鎖、建替予定なし
4	横浜BLITZ	横浜市	2004年	1,700	2013年閉鎖、建替予定なし
5	SHIBUYA-AX	渋谷区	2000年	1,697	2014年閉鎖、建替予定なし
6	青山劇場	渋谷区	1985年	1,200	2015年閉鎖、跡地利用未定
7	五反田ゆうぼうと	品川区	1982年	1,803	2015年閉鎖、跡地利用未定
8	日本青年館	新宿区	1979年	1,360	2015年建替、2017年オープン
9	渋谷公会堂	渋谷区	1964年	2,084	2015年建替、2019年竣工予定
10	さいたまスーパーアリーナ	さいたま市	2000年	約37,000	2016年改修済み
11	横浜アリーナ	横浜市	1989年	約17,000	2016年改修済み
12	日比谷公会堂	千代田区	1929年	2,074	2016年改修、工事中で開業予定未定
13	武蔵野市民文化会館	武蔵野市	1984年	1,354	2016年改修済み、2017年開業
14	サントリーホール	港区	1986年	2,006	2017年改修済み
15	神奈川県民ホール	横浜市	1975年	2,493	2017年改修、2018年開業予定
16	代々木第一体育館	渋谷区	1964年	13,243	2017年改修、営業再開予定未定
17	新宿明治安田生命ホール	新宿区	1961年	342	2017年閉鎖、跡地利用未定
18	東京国際フォーラム	千代田区	1997年	5,012	2018年改修、2019年開業予定
19	国立劇場大劇場	千代田区	1966年	1,610	2018年改修、2024年以降開業予定
20	中野サンプラザ	中野区	1973年	2,222	2022年閉鎖、2025年度開業予定

※日経電子版 NIKKEI STYLE (2016. 7.22)、各社HPをもとに作成

新宿区内でも、2010年東京厚生年金会館（2,062席）が閉鎖し、ヨドバシカメラの自社ビルが建設中である。2015年に日本青年館が、新国立競技場の建築のため移転しリニューアルオープンした。2017年に

は、新宿明治安田生命ホール（342席）が閉鎖している。このほか、小劇場では、「SPACE 雑遊」「SPACE 梟門」が2018年に閉鎖を予定している。また、老舗のライブハウス「新宿JAM」は2017年12月に閉鎖した。

インタビュー： 椿組 外波山氏

劇団「椿組」の主宰をつとめる外波山氏は、「新宿にも稽古場はあるが、値段が高いこと、連続借りはできないことなどから、稽古場の使用ができないでいる。シアターアプル、シアタートップスなどが閉鎖し、劇場が少なくなってきたと感じている。現在の新宿については、昔ほど、新宿イコールアングラ（芝居）というイメージは強くなく、むしろ下北沢のほうが劇場の中心になっているのではないかと話す。

②博物館・美術館

新宿区内では、2017年9月に「新宿区立漱石山房記念館」が早稲田南町に、10月に「草間彌生美術館」が弁天町に開館した。草間彌生は、前衛芸術家・小説家であり、新宿区の名誉区民の一人である。また、百人町にあったネオダダのアーティストの吉村益信、赤瀬川原平、篠原有司男らのサロンが、「カフェアリエ」となっている。さらに西新宿のエリアでは、2020年オリンピック・パラリンピックに向け、2019年に新宿住友ビルが公開空地をイベントスペースや美術館の施設として開設すること、また、2020年に損害保険ジャパン日本興亜が6階建て美術館を移転開業する予定である¹⁸⁾。

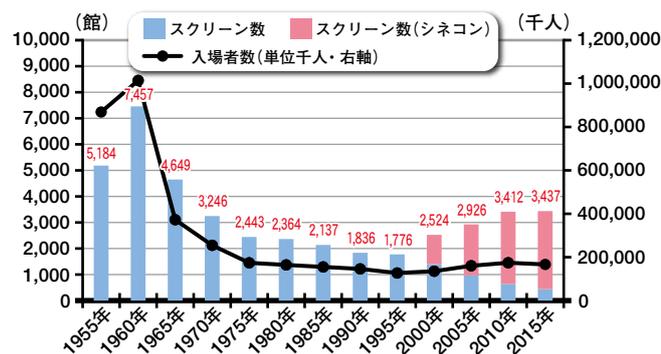
③映画館

図表Ⅱ-22より、全国の映画館数と入場者数は、1960年から1995年にかけて減少の一途をたどって

いたが、2000年代以降は、シネマコンプレックスが増えており、入場者数もやや増加している。また、図表Ⅱ-23より、東京都の映画館事業所数は減少している。新宿区内の事業所数も減少していたが、新しい映画館の開設もあり、2014年には増加に転じている。

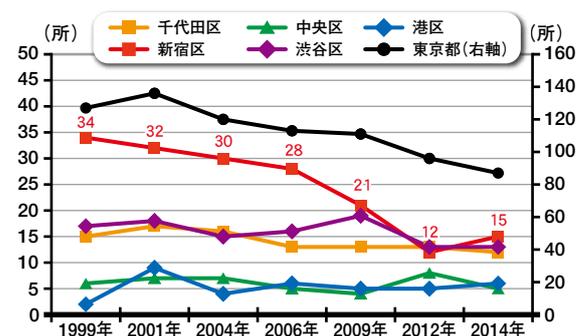
新宿区では、東急ミラノ跡地とホテル・グリーンプラザ跡地に、2022年度の完成をめざし、地上40階建てのホテルと1,500人収容のライブハウス、850席の劇場、新宿で4館目となるシネマコンプレックスが建設される予定である¹⁹⁾。単館系映画館も、大手の映画配給会社のチェーンにのらない映画制作会社の作品を取り扱い、独自の客層を持ち、作品本来の良さを伝えていく場として機能する可能性も持っている。

図表Ⅱ-22 全国の映画館数と入場者数の推移



※日本映画製作者連盟「日本映画産業統計」より作成

図表Ⅱ-23 都心5区の映画館事業所数の推移



※1999年～2014年の「経済センサス」より作成

インタビュー： 小田急電鉄(株) 内海氏

小田急電鉄が主催となり、2016年度より新宿中央公園で映画上映のイベントなど、野外での映画上映の動きもみられる。小田急電鉄 CSR・広報部の内海氏は、「西口駅周辺に関しては、東・南口に比べて、土日は誘引力が弱い。オフィス街であるということもあるが、西口はサラリーマン向けのまちのつくり方になっているのではないかと。イベントの活性化などソフトの工夫でもっと足を運んでもらえるようになるのでは」という。

18) 「新宿新聞」2017年2.5

19) 「新宿新聞」2017年7.25、2017年12.5

新たな歴史・伝統の創出

江戸幕府の開幕以降、市街地の拡充に伴い、区内には神社仏閣や庭園などの歴史・伝統資源が多く集積した。花園神社、熊野神社、百人町の鉄砲隊は、今もその名残を残し、新宿御苑では新能、茶会が開かれ、伝統文化の体験ができる。現在、これらの歴史・伝統資源を活用し、現代の目線からアレンジした活動やイベントが企画され、新た

なものとして創出されている。例えば、神楽坂では、三業地として花街の面影を残しながら、歴史的な街並みや伝統芸能に親しむ取組が行われている。四谷などでは、図書館が中心となって、地域の歴史を伝え残していく取組がみられる。また、2017年、夏目漱石等の作品やゆかりの品を展示する博物館や美術館が設立され、注目を浴びている。

インタビュー： NPO 法人粋なまちづくり倶楽部 日置氏

「神楽坂まち飛びフェスタ」の実行委員長を14年間務めている日置氏によると、「神楽坂は、長年商店会や町会を中心にまちづくりをきちんと積み上げてきたが、20年くらい前から、地元の40～50代の方を中心に、大学などの専門家も応援団になって、商店会等に限定されないまちづくりを行ってきた。このような集まりに参加する中で、伝統芸能など地元の文化を改めて掘り起こし、広めたいという気持ちで始めた。神楽坂のよさは、誠実に活動する人たちに、口を出さずに放っておきながらも見守ってくれる人間関係やコミュニティのあり方（江戸の粋）」という。

インタビュー： (株) ヴィアックス 遠藤氏

四谷図書館（指定管理者：株式会社紀伊国屋書店・ヴィアックス）の司書の遠藤氏は、「地域密着」をミッションとし、資料貸出しのほか、乳幼児からシニア世代までを対象にした多様なイベントを展開している。また新宿区立図書館の区民利用登録率は全区民の約3割で、課題である残り7割の人へのアプローチとして、「知を楽しむ空間づくり」に取り組み、歴史講座や街歩き、歴史博物館等の所蔵する古写真を使ったパネル展示などのイベント企画を行っている。地域の図書館として、地域の歴史を聞き取り、残していかなければならないと考えており、地域情報の収集や発信を積極的に行っている。

娯楽・文化の創出

大正から昭和初期にかけて、新宿駅や高田馬場駅を起点に、京王線、小田急線、西武線などの私鉄が整備され、郊外住宅地の開発が行われ、郊外から人が集まる交通の要所となった。「新宿追分駅」を中心に、伊勢丹、炭屋から業態転換した紀伊国屋書店が現れ、多くの人で賑わうようになった。第二次世界大戦後は、ターミナルであった新宿駅周辺では闇市ができ、人々は物資を求めて集まった。やがて歌舞伎町やゴールデン街のような飲食店街を形成した。また、交通利便性の良さから、テレビ局、ジャズ喫茶、学校等が立地し、芸術や芸能に関わりの強い人材が集まっていた。そして、喫茶店、カフェ、バーなど、互いに交流や議論が

できる場があった。集積していた古い映画館や劇場、神社の境内などを利用して、アンダーグラウンドなパフォーマンスが展開されていた。

そして、一時は交流の場が減っていたが、2000年代以降、「芸能花伝舎」の設立、新宿演劇祭や新宿フィールドミュージアムなどの取組が行われるようになった。芸能花伝舎は、プロからアマチュアまでの舞台の稽古や、新国立劇場の演劇・バレエ研修所の練習の場に利用されている。公益社団法人日本芸能実演家団体（以下「芸団協」という）が2005年から旧新宿区立淀橋第三小学校を借りあげ、施設を運営している。また、まち全体を屋根のない美術館に見立てた「新宿フィールドミュージアム」という取組が行われている。

インタビュー： 新宿区立歴史博物館 守谷氏

新宿区立歴史博物館副館長の守谷氏は、「歴史の観点では、規模や深さは京都などとは比べものにならないが、近くでもこういうものがあつたという気づきがある。新宿は、交通利便性などのおかげで自然と活動する人が集まってきたところに活力がある。働きに来る人も含め、その人たちの活動自体が魅力ではないか」と語っている。

インタビュー： 芸団協 佐野氏・長谷川氏

芸団協実演芸術振興部の佐野氏と長谷川氏へのインタビューによると「[稽古場が足りない]「長期で使えない」という現場の声があり、廃校に注目して物件を探していた。都心にある他の区からも廃校活用の話があったが、新宿区は長期で借りられるということで決めた。また、地理的には青梅街道に近くアクセスがよいこと、建物を稽古場に改装することができたことも理由である」という。

インタビュー： 新宿文化センター 八木原氏・平岡氏

2017年3月に公益財団法人未来創造財団が主催した「第1回 新宿演劇祭」では、演劇団体をネットワーク化する試みがみられた。新宿文化センター副館長の八木原氏、事業企画に携わる平岡氏に対するインタビューによると、「演劇祭は、区内に5つの生涯学習館でサークル活動している演劇団体の発表の場として企画した。新宿文化センターが若い世代と演劇というファクターを通じてつながることができた。今回は、新宿文化センターのみで行ったが、期間やエリアを広げられればよい」と語っている。

多国籍文化の形成

新宿区の外国人居住者の数は4万人を超えており、現在約130もの国籍の人が居住している。1980年以降、歌舞伎町やその周辺地域に多くの外国人が流入してきた。外国人は集住してコミュニティを形成し、飲食や食品スーパーなどの生活上に必要なサービスを提供するスモールビジネス

を始めた。こうした彼らの職住近接の生活スタイルが、多国籍料理店などを中心としたエスニックタウンを形成した。近年は、政府の留学生受け入れ計画やビザ取得要件の緩和などにより、新宿にある学校や飲食店などに留学・就業の場を求めて移住している。また、必要な情報交換や互助活動を行ってきている。

インタビュー： NPO法人永徳堂 馬氏

日本の大学に進学するため渡日した馬氏は大学院在学中から、中国人留学生は日本人のコミュニティに入ろうとしないことに気が付き、NPO法人永徳堂を立ち上げた。馬氏は「自分は深く日本社会と日本人を理解したい。それで、外国人観光客はたしかに地域活性・経済活性にある面としては貢献していると感じるが、彼らがみているのはまだ表面的なものである。新宿を理解し、愛する側になるためには、暮らす、働くというフェーズにつながらないといけない。彼らに対して地域活動や日本人と交流する機会を与えることが重要である」と語る。

インタビュー： NPO法人ミッターファンデーション イー・イーミン氏

NPO法人ミッターファンデーションの理事長イー・イーミン氏は、在日のマンマ一人等が言葉の不自由さにより職場でストレスをためてしまう問題や、冠婚葬祭や宗教に関する課題を解決するための活動を行っている。「現在、外国人居住者の間では高齢化の問題が浮上しており、例えば、30年前に来日した人は70代になっていて、70～80代の高齢者が日本人のコミュニティに入っていけないことを危惧している」という。

新たなつながりの創出

周縁であった新宿は、中心から排除された価値を受け入れる土壌があり、社会活動家や異色の芸術家などが活躍し、現在でも新宿二丁目の「ゲイタウン」は、LGBTのアイデンティティの醸成を助けた。多くの文化人が集い、人々の交流の場となっているゴールデン街の飲食店では、2016年の火災後多くの人の協力で再建できたことから、「子ども食堂」を始めている。このように、新宿では人々がともにつながり、情報を交換し助け合う

ことで活動を展開している。

さらに、新宿には舞台となる景観があり、そこで繰り広げられる人間模様など素材となるものが多く存在し、古くは小説や映画、現代ではアニメやゲームなどに作品化され、コンテンツとなって創出されている。例えば、お笑い系の芸能事務所の移転や芸能ホールが開館したことに関連して、歌舞伎町などのまちの生業や生活が、漫才のネタとなって新たなコンテンツを創出している。

インタビュー：（株）吉本興業 玉城氏

吉本興業に所属している、お笑いグループのセブン by セブンの玉城氏は、新宿のまちを「飽きないまち」と語り、「Greenbird の活動に参加してゴミを拾ったが、新宿はゴミにも多様性がある。店が開く前の中の様子や通行人をみることはお笑いのネタになる」という。

インタビュー： 三光商店街振興組合 石川氏

映画関係の仕事をしてながらゴールデン街の飲食店でアルバイトをしていて、BAR ダーリンを営むようになった石川氏は、三光商店街振興組合の会長を務めている。2016年のゴールデン街の火災後、多くの人の協力で再建できたことから、何か地域貢献ができないかと「子ども食堂」を始めた。「会員どうしは仲が良く、共感した店からの料理の提供や、休憩場所として店舗スペースの開放など、協力を得ている。フェイスブック等で情報発信すると、ボランティアに来るなど、人のネットワークが広がっている」という。

インタビュー： J-Nation F 氏

区内でトランスジェンダー系のバーを営むFさんは、LGBTの理解という社会潮流に、「要求過多」も「タダ乗り」もダメで、社会やまちにソフトランディングできる責任ある向き合い方が重要だと考える。新宿のまちについては、「元来新宿はLGBTに他のまちよりも寛容な風土がある。トランスジェンダーの人と気づいても慣れていて、だからその系統の店の数も全国で最も多い。しかし一方でぼったくりなど怖いまちというイメージも強く、初めての人がなかなか足を向けにくい。他のまちにもサブカルチャー的な異性装の店やイベント等も現れており、今後の経済の流れを不安視する。風土にあぐらをかくのではなく、まちとしての新宿の良さを今あらためて発信する必要がある」と語る。

III

まちの魅力形成のメカニズムと今後の方向性

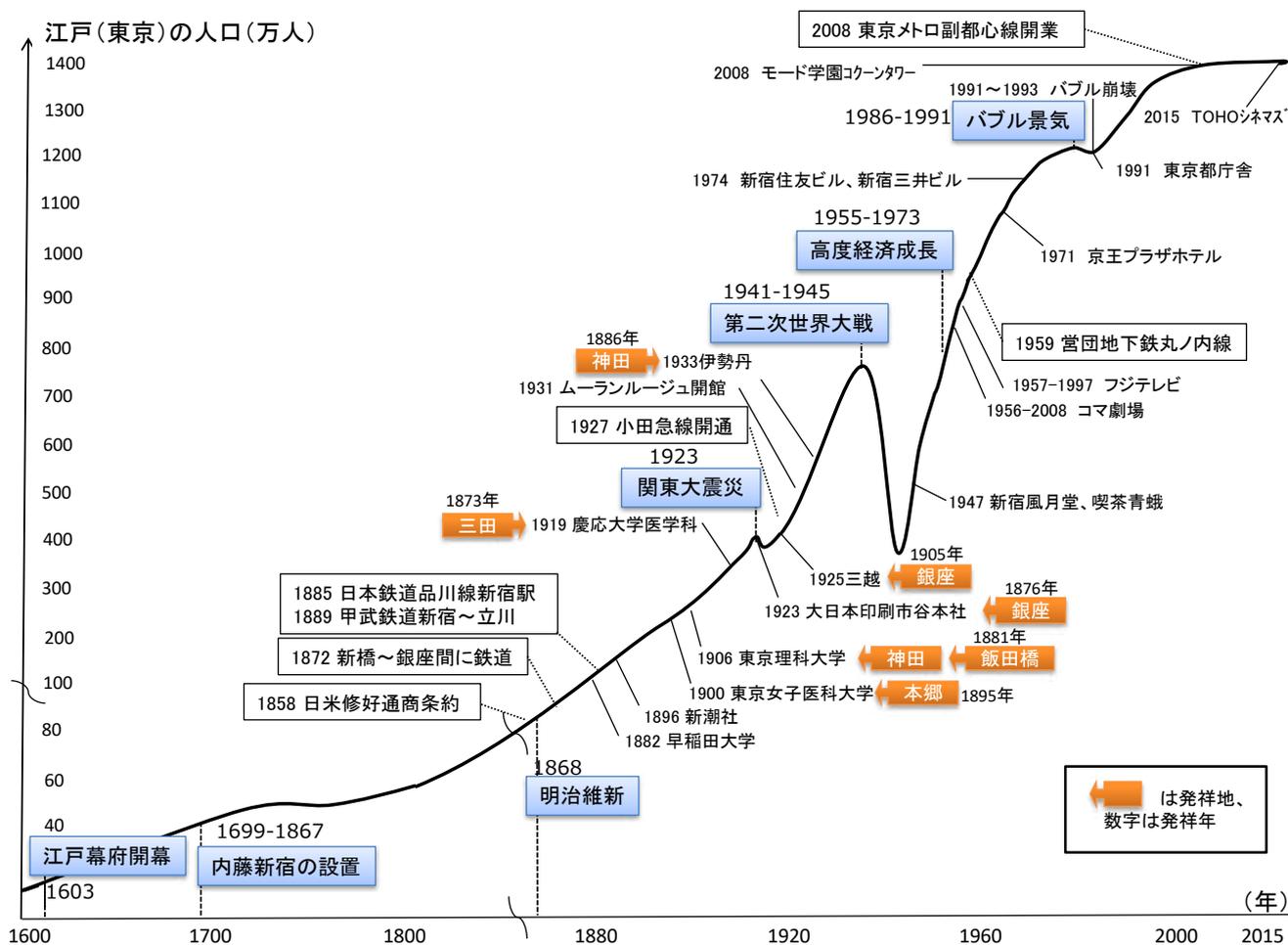
本章では、地域資源の集積を時空間軸で概観した後、地域資源がまちの魅力を形成するメカニズムのモデルを示す。そして、魅力的なまちであるための今後の方向性を提示する。

1. 時空間軸でみた地域資源の集積

図表Ⅲ-1は、江戸（東京）の人口の推移と江戸幕府の開幕、内藤新宿の設置、明治維新、関東大震災、第二次世界大戦、高度経済成長、バブル景気・崩壊などの出来事にあわせて、新宿の主な地域資源の集

積の状況をまとめたものである。また、その資源が他区から移転してきた場合はその発祥地を矢印で示す。さらに、まちづくりに密接に関係する交通網の整備をあわせて示している。

図表Ⅲ-1 主な出来事と地域資源の集積



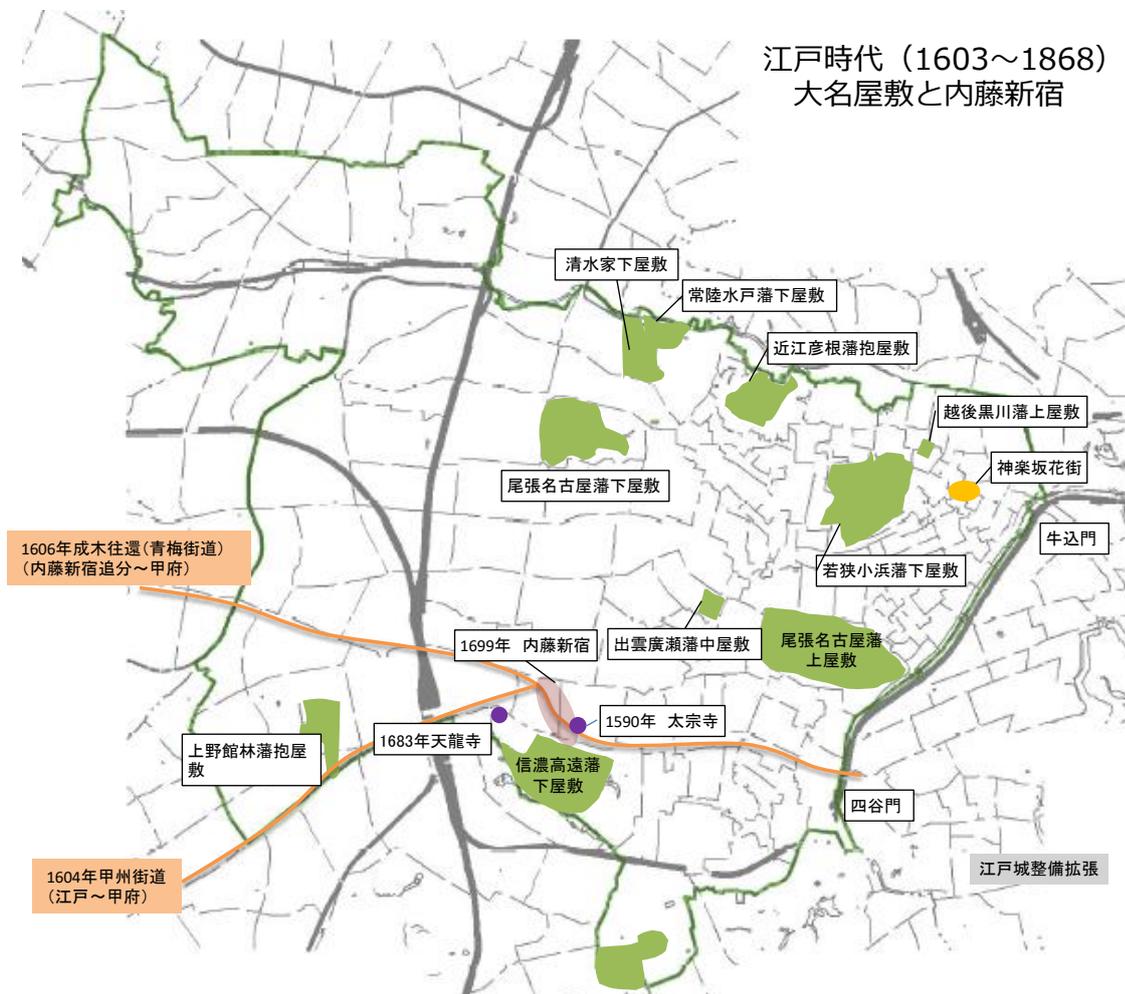
<江戸時代>

図表Ⅲ-2の地図より、江戸時代の新宿を概観する。江戸時代の新宿は「内藤新宿」と呼ばれ、江戸の城下町として多くの人や物資が行き交っていた。1604年に五街道の一つとして制定された甲州街道と、1606年に江戸城の拡張整備に必要な建築用資材である石灰の運搬道路として設けられた成木街道（現青梅街道）の分岐点「追分」に、宿駅が開設され、茶屋や旅籠屋の店が立ち並び、大変な賑わいを見せた。内藤新宿では、飯盛女とよばれる者たちが遊女商売をしていた。天龍寺には内藤新宿の旅籠屋の宿泊客を起こす、追い出しの鐘があり、太宗寺・

成覚寺は身寄りのない遊女たちの亡骸の投げ込み寺であった。

また、大名の中屋敷、下屋敷がいくつも立地する庭園都市であり、それらの屋敷が占めていた広大な土地が、後の時代の防衛省や大学、新宿御苑など、官公庁や公園・学校等の公共用地となる種地を用意した。また、1590年に太宗寺、1591年に牛込に天龍寺（1683年の火災焼失により現在地に移転）が建立されたほか、参勤交代による地方からの大名が所領内の寺院を移転させるようになり、徳川家康の江戸城の整備拡張に伴い、新宿への移転、建築が進んだ。

図表Ⅲ-2 江戸時代の新宿



<明治時代>

図表Ⅲ-3の地図より、明治時代の新宿を概観する。明治時代の新宿は、明治維新後の近代化の流れの中、鉄道や工場、学校の建設が進んだ。

1872年に日本で初めて新橋と横浜間に鉄道が敷設され、新宿区には、1885年、日本鉄道の新宿駅が開業した。1889年には、新宿から立川まで甲武鉄道が、1903年には庶民の生活の足であった東京市電が、新宿と半蔵門間で開通した。駅周辺では、洋食店や寄席が開業するなど、駅前の興行街が形成される萌芽がみられた。

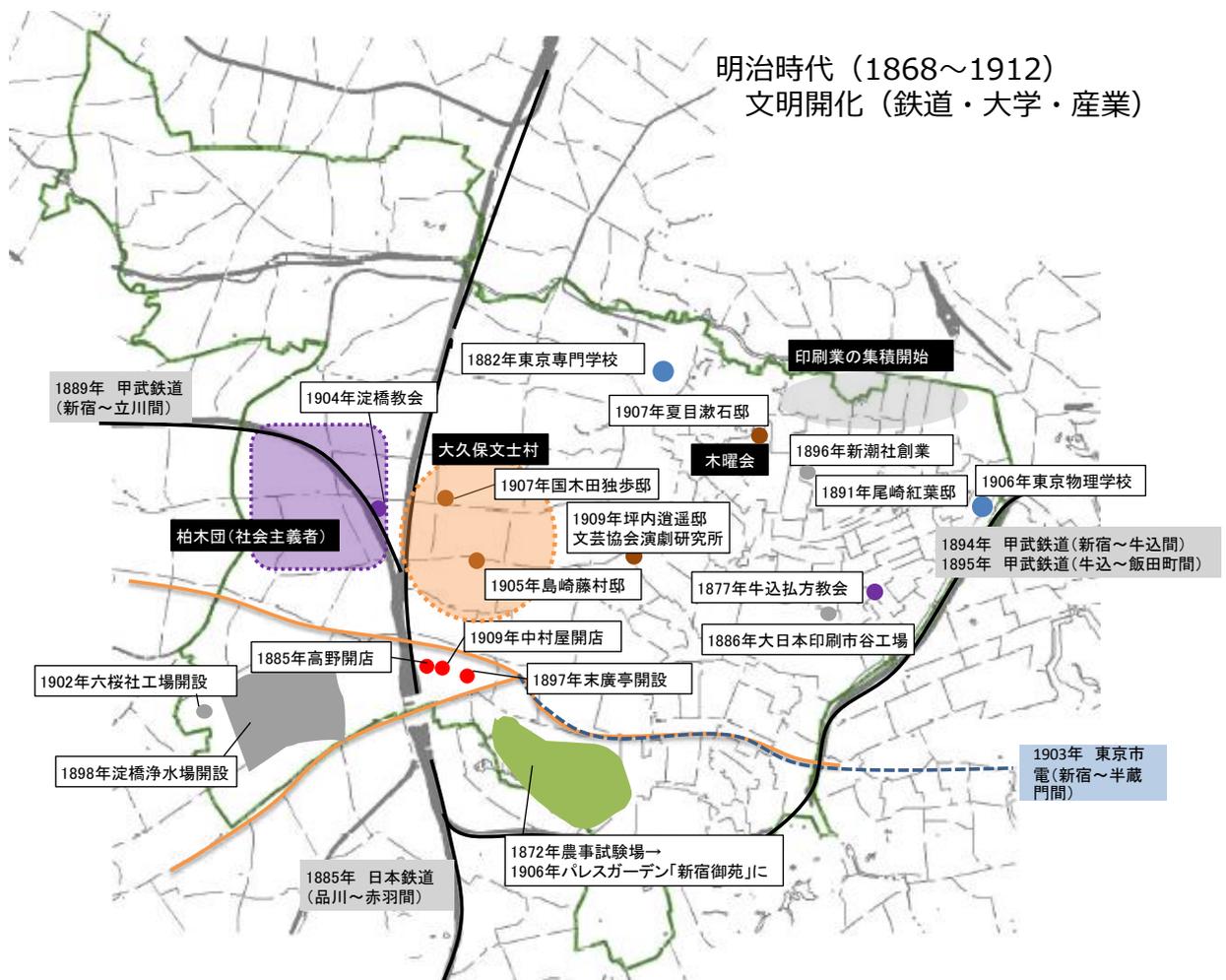
江戸時代に大名屋敷であった土地は政府の管理地になり、皇室関係、政府の官庁や軍の施設、公園・学校などの公共用地、華族や資産家などの用地として利用された。内藤家の屋敷の大部分は、その周辺を含めて農事試験場になり、1906年にはパレスガーデンになった。

やがて、欧化政策が進められると、教会、神学校、女子教育のための学校を開校するようになった。

1872年に学制が発布され、神田には多くの大学が創立されるとともに、東京開成学校と東京医学校が合併して東京大学が本郷に誕生した。そして、東京大学の卒業生たちが物理学を教える東京物理学校（東京理科大学）を創設し、神田小川町を経て神楽坂に移転してきた。牛込地区には、東京大学を卒業した文士達が住み始め、夏目漱石や尾崎紅葉を中心としたサロンが開催された。同じく卒業生の坪内逍遙は、1882年に開校した東京専門学校（早稲田大学）で教鞭をとるとともに、自宅敷地内に演劇研究所を開設した。さらに、大久保や柏木のエリアでは、島崎藤村や国木田独歩等の文士村が形成され、柏木団と呼ばれた社会主義者が多く住んでいた。

作家らが多く住んでいたことや、鉄道網の整備が進んだことで、印刷業や出版業の集積が始まり、銀座にあった集英社（大日本印刷）が1886年に市谷加賀町に工場を造った。また、大日本印刷の工場で働いていた印刷工が校正係を経て、矢来町に新潮社を創業した。

図表Ⅲ-3 明治時代の新宿



＜大正・昭和初期＞

図表Ⅲ－４の地図より、大正・昭和初期の新宿を概観する。大正・昭和初期の新宿は、郊外に延びる私鉄が整備され、住宅開発も進み、新宿駅東側を中心に歓楽街が形成されていった。

新宿駅周辺では、1915年に「新宿追分駅」が追分交差点付近に京王電気軌道の始発駅として開業し、1927年に新宿駅を起点に小田急線、高田馬場を起点に西武鉄道が開通した。新宿追分駅を中心に、伊勢丹、炭屋から業態転換した紀伊國屋書店が現れ、多くの人で賑わうようになった。そして、1923年の関東大震災の後には、地盤が硬く比較的被害の少なかった新宿に、映画館、劇場などの娯楽施設の集積が進んだ。1945年に京王線の始発が新宿西口に移り、現在のJR新宿駅を中心とした発展に影響を与えることになった。

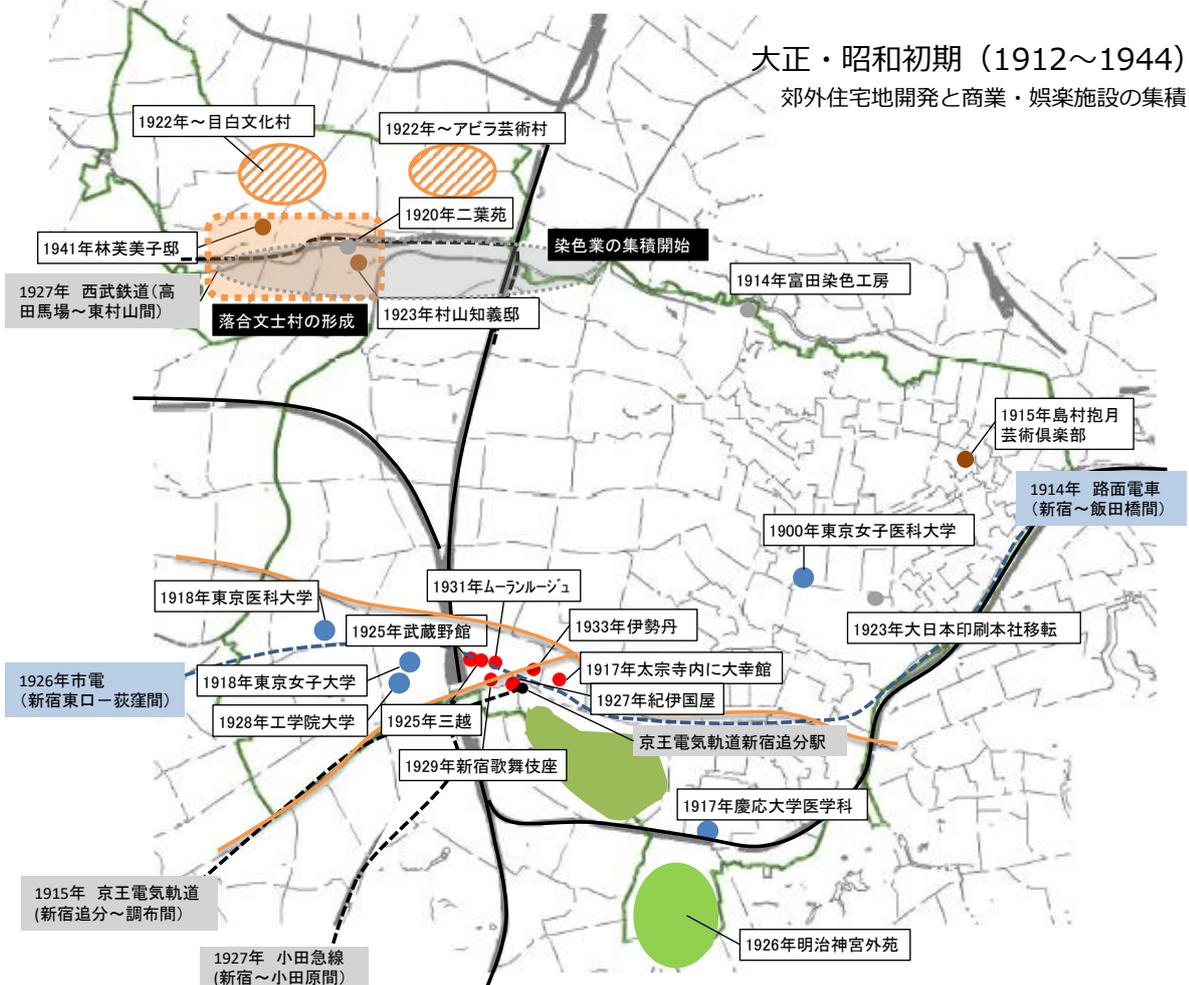
新宿区には芸術家が集まるサロンがあったが、プロレタリア文学などの異端と言われる芸術家も多かった。落合地域では住宅開発が進んだところに、画

家や知識人が多く居住し、まだ開発がされていないところに「落合文士村」が形成され、また、西武鉄道沿線の落合周辺では、「目白文化村」や「アビラ芸術村」の住宅地開発が進められた。

水がきれいな川の存在により、染色工房が神田から神田川上流の中井・落合・早稲田周辺に移転し、染色業の集積が開始した。また、印刷業は顧客である出版業の存在、出版業は需要者である大学の存在により、多数の事業所が移転や創設がなされた。これらの集積が作品や書物を流通させる手助けした。

欧化政策の影響を受け、受洗をした若いキリスト教者たちは、人口が増え始めた新宿で教会を建設し、布教や女子教育に力を注いだ。1870年代に築地居留地内で女生徒に英語を教えたことがはじまりとなって、「女子学院」が設立され、受洗した矢島楯子が初代校長になった。その女子学院の高等科が角筈に設立され、後にこの建物を使い東京女子大学が開校された¹⁾。また、東京女子医科大学、慶應大学医学科、東京医科大学と大学病院の開設がみられた。

図表Ⅲ－４ 大正・昭和初期の新宿



1) 女子学院資料室委員会『目で見える女子学院の歴史〔改訂版〕』

＜昭和戦後期～高度経済成長期＞

図表Ⅲ－５の地図より、昭和戦後期から高度経済成長期の新宿を概観する。戦後、新宿駅周辺には闇市が形成され、人々は物資を求めて集まった。やがてGHQの方針により露店撤去令が発令され、取り締まりの対象となった飲食店は歌舞伎町に集団移転し、ゴールデン街などの飲食店街が形成された。

戦後の歌舞伎町には進駐軍のクラブミュージックがみられたほかジャズ喫茶などの喫茶店が次々と現れ、若者が多く集まり、ミュージシャンらの需要を受け楽器店が生まれた。また、新宿二丁目には、戦後、遊郭が集積していたが、赤線（特殊飲食店）となり、1958年の売春防止法により飲食業や宿泊業に業態変更した。

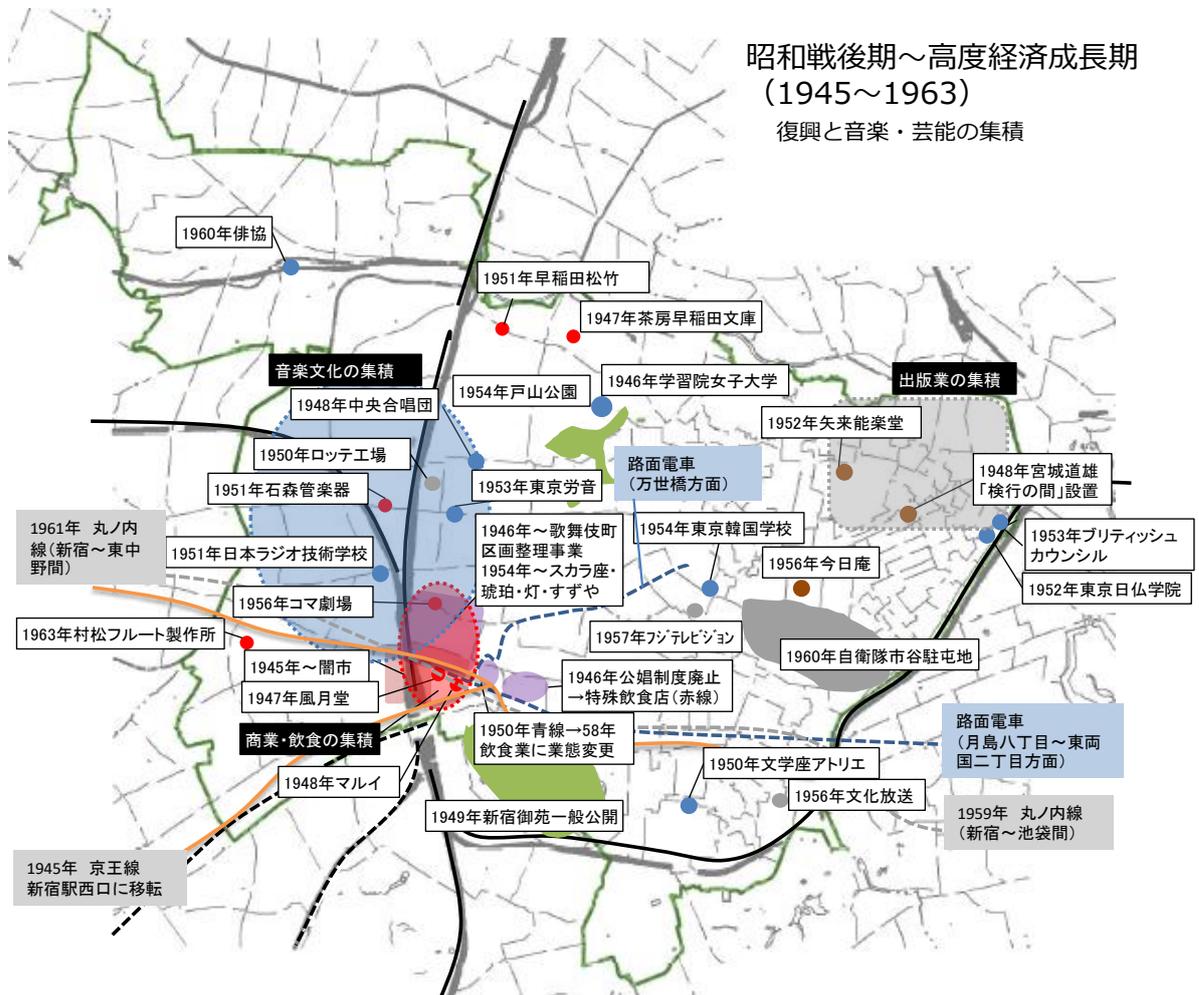
茶道では、裏千家が、高田馬場に茶道会館、市谷加賀町に東京道場の今日庵を建築した。また、神田近辺にあった能楽堂が関東大震災や東京大空襲で焼

失後、渋谷や杉並の周縁部へ移転・再興が進められる中、観世九草会は1952年に矢来町に矢来能楽堂を建築し、活動の舞台を移した。このほか、華道では、大和花道や龍生派などが創設され、箏曲では、宮城宗家をおこした宮城道雄が現在、記念館のある場所に居を構えた。

1952年、東京日仏学院が市谷船河原町に設立され、フランス語の授業を行っている。また、1953年に設立されたブリティッシュ・カウンシルの東京センターが、1986年に神楽坂に移転した。韓国人駐在員等の子弟のための韓国学校が、1954年に若松町に開校している。このような学校の設立を背景とし、新宿区には様々な国籍の人が居住するようになった²⁾。

また、出版業の集積がおこったほか、新たに文化放送とフジテレビジョンが設立され、テレビを中心に新宿の文化や情報が発信されるようになった。

図表Ⅲ－５ 昭和戦後期～高度経済成長期の新宿



2) 132もの国籍の人が居住している(2018年2月現在)。

＜高度経済成長期～バブル期＞

図表Ⅲ－6の地図より、高度経済成長期からバブル期（1964年～1991年）の新宿を概観する。新宿西口には、家電量販店の草分け的存在の淀橋写真商会（現ヨドバシカメラ）、電鉄系百貨店の小田急百貨店と京王百貨店が開業した。また、西新宿の副都心計画がスタートし、1971年竣工の京王プラザホテルを皮切りにして、高層ビルの建設が進み、1991年に都庁が移転してきて副都心が完成した。

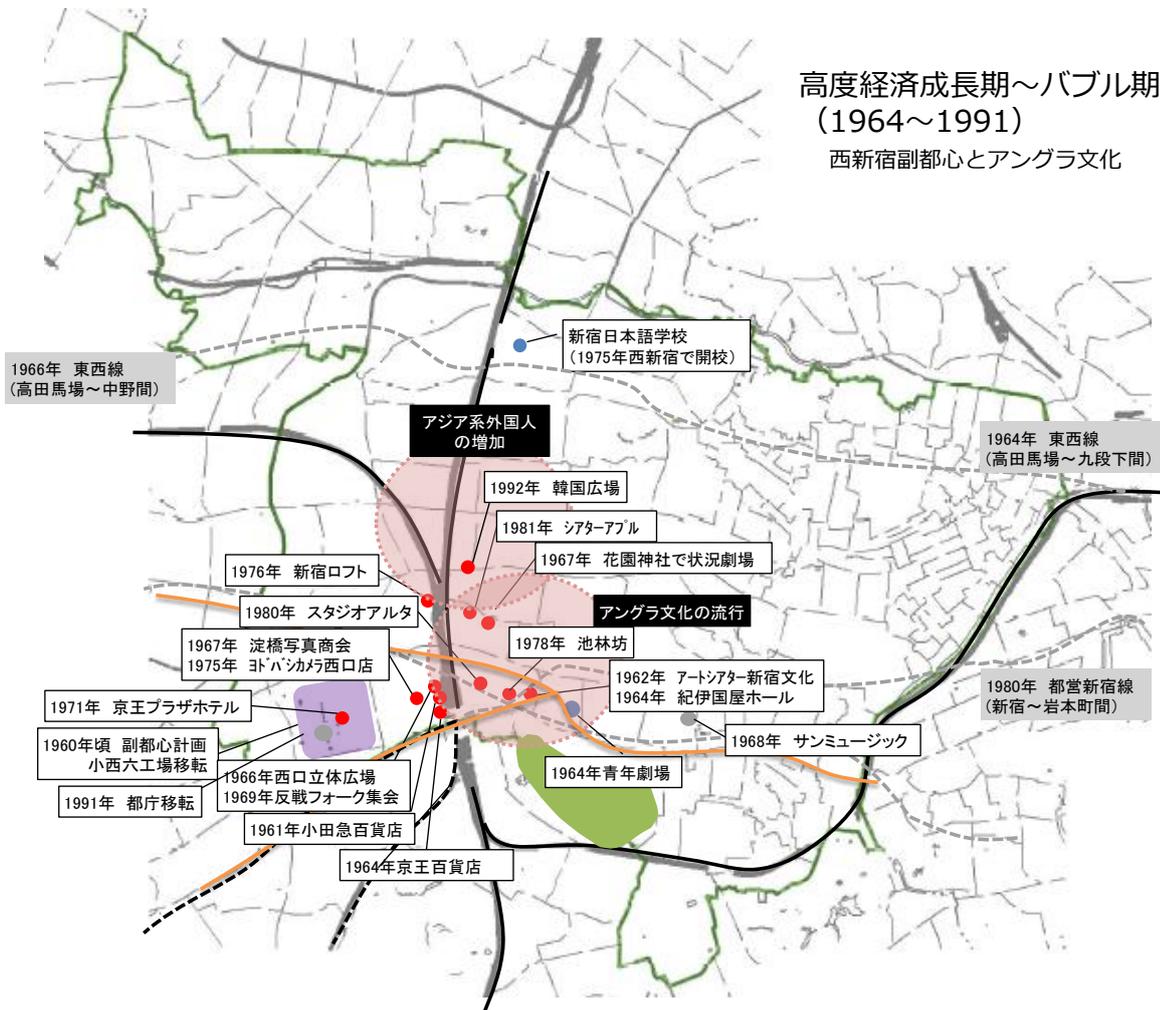
1968年の国際反戦デーや1969年の西口フォークゲリラに代表されるよう、1960年代から70年代にかけて、多くの若者が新宿に集まってきた。新宿東口周辺ではアングラ演劇が流行し、「アートシアター新宿文化」「紀伊國屋ホール」などの劇場の開業や、唐十郎等による花園神社での上演がなされ、新宿区内に住む作家や大学の演劇関係者がコラボレーションしながら、先端的でアンダーグラウンドな上演を

行っていた。花園神社では現在も新宿梁山泊、唐組、椿組の3つの劇団が公演を行っている。現在「早稲田小劇場どらま館」となっている場所には鈴木忠志らの劇団早稲田小劇場の常打ち小屋「早稲田小劇場」があった。

大久保、百人町、北新宿で、1960年代から韓国系の人々が移住してきた。1980年には、スタジオアルタが二幸の跡地に開設され、人気のテレビ番組が放映され多くの人を魅了した。また、河田町にあったフジテレビ周辺には芸能プロダクションが複数設立された。

主にカトリックの神父を対象にして日本語教育を行っていた「聖ヨゼフ日本語学院（六本木）」が前身である「新宿日本語学校」は、1975年に西新宿で設立され、1982年に学校の拡張に伴い高田馬場に移転した³⁾。日本語学校をはじめとする専修・各種学校の存在は、多くの外国人留学生を集めている。

図表Ⅲ－6 高度経済成長期～バブル期の新宿



高度経済成長期～バブル期
(1964～1991)
西新宿副都心とアングラ文化

3) 本段落については、『新宿区成立 70 周年記念誌 新宿彩物語～時と人の交差点～』第 2 章 新宿人 70

＜バブル崩壊以降＞

図表Ⅲ-7の地図より、バブル崩壊以降の新宿を概観する。1986年に乗り入れた埼京線が2002年に東京臨海高速鉄道を経由して臨海副都心と直結し、2001年には湘南新宿ラインにより湘南方面とつながった。また、2001年の都営大江戸線の全線開業、2008年の地下鉄副都心線の開通により、埼玉や横浜方面とつながった。

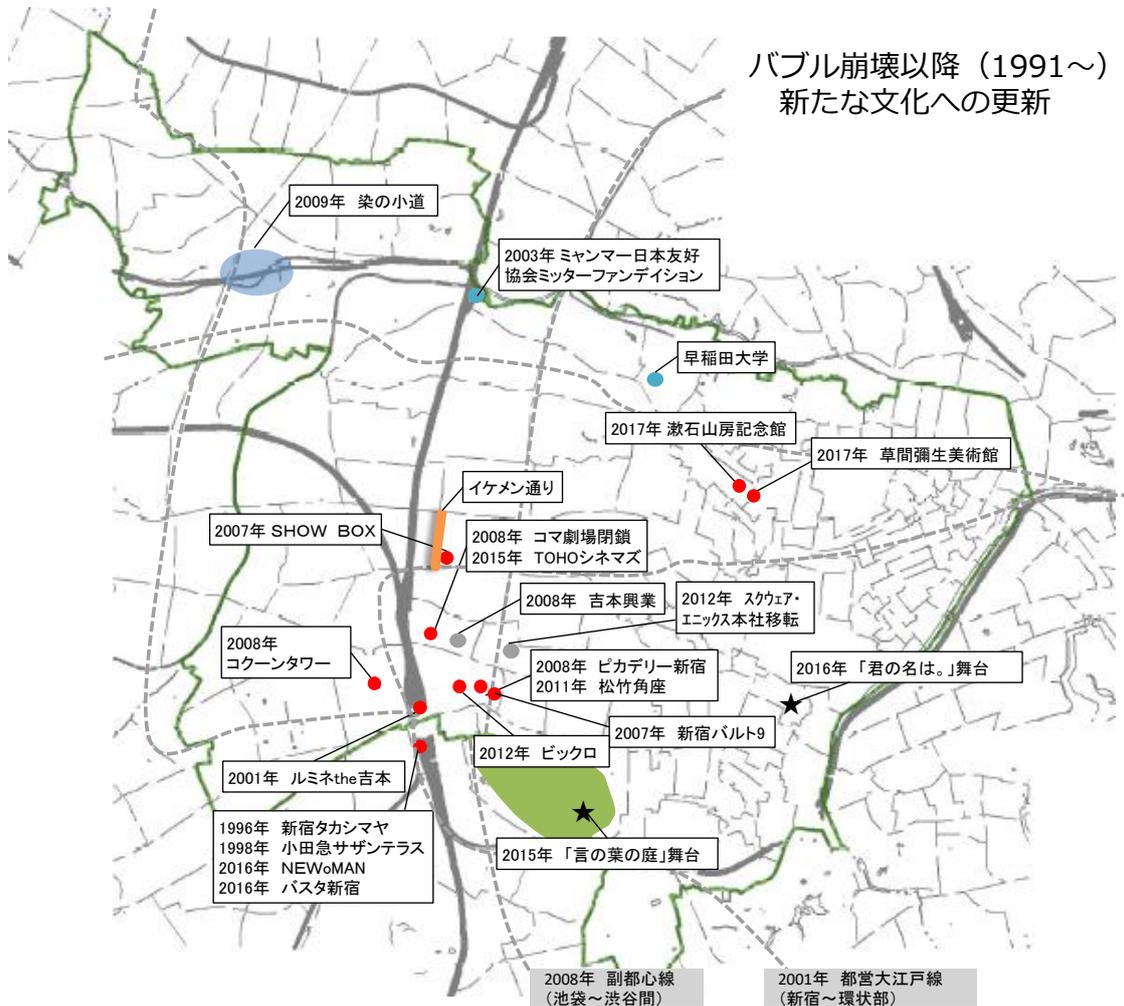
新宿東口では、3つのシネマコンプレックスの映画館が開場した。TOHOシネマズのゴジラヘッドは歌舞伎町のシンボルとなった。吉本興業の本社が旧新宿区立四谷第五小学校へ移転してきた。

大久保・百人町では、90年頃から中国、台湾、マレーシア・タイなどの東南アジア系の店舗が立地し始め、

その後韓国系の店舗に置き換わった。2004年の冬ソナブームにより「韓流」が流行し、韓国系店舗が増加した。現在は、韓国系の物販や飲食が減少し、ネパール料理店など他のアジア料理店が増加し多国籍化が進み、若い訪問客が増えている。このような飲食店の集積は、古くは小説や映画、最近では「君の名は。」のアニメの舞台になるなど、コンテンツ・ツーリズムなどの観光産業へと展開している。

現在、落合では「染の小道」、新宿区全域では「新宿フィールドミュージアム」などのまちあるき型のイベントが催されている。2017年には、新宿区立漱石山房記念館と草間彌生美術館が設立され話題をよんでいる。

図表Ⅲ-7 バブル崩壊以降の新宿



2. まちの魅力形成のメカニズム

これまで新宿の地域資源の集積状況について、地域資源ごとの集積プロセスや社会経済環境の変化に伴う動向、また、地域資源が歴史的・地理的にどのように集積してきたかについてみてきた。これらの結果と昨年度の研究成果から、地域資源がまちの魅力の形成にどのように作用するのか、そのメカニズムを考察し、モデル図を示す。

昨年度の研究成果から

昨年度は「にぎわいの実態把握と意識面からみる魅力の分析」を行った。その結果、新宿のにぎわいの特徴は、国内外から多くの人々が様々な目的で集まってくることからもたらされる「多様性」と「国際性」であることがわかった。次に、地域ブランド調査結果⁴⁾によると、新宿の魅力として高く評価されているのは、「道路や交通の便がよい」「魅力的な商店街や店舗がある」「地域を代表する産業や企業がある」ことであり、新宿区のイメージとして高く評価されているのは、「生活に便利なまち」「国際交流のまち」「IT・先端技術のまち」「デザインやセンスの良いまち」であった。また、区民や区外在住者へのアンケート調査結果から、新宿には利便性に加え、個性的で独自性のある魅力（特異性）があることが明らかになった。

地域資源の集積プロセスと独自性

このような利便性や独自性がどのようにしてもたらされたのかについて、地域資源の集積プロセスとあわせてみていく。

新宿はかつての先進地である浅草、神田、銀座などの周縁に位置し、開発が遅く、広い空地が残っており、市街地が拡大する過程で、印刷・製本等の工場や店舗・百貨店、事業所等が新たに立地することができた。江戸時代には新しい宿場「内藤新宿」が開設され、人とモノが集まる交通の要所となっていた。また、武蔵野台地の高台にあり、比較的固い地盤であったため、関東大震災では比較的被害が少なかったことで、銀座や神田から、映画館、劇場等の娯楽施設や飲食店、百貨店などの移転、新設がおり、地域資源が集積した。戦争により焼け野原となったが、ターミナルであった新宿駅周辺では店舗が立ち並び、多くの人を呼び込み発展していった。その後、

高度経済成長期には、西口副都心計画による高層ビル街や東口の日本有数の商業集積地が形成され、新たな交通網の整備等により、こうした動きは新宿区内全域で広がっていった。バブル崩壊後のいわゆる失われた20年を経て、東京2020オリンピック・パラリンピックを控える中、居住者の都心回帰の傾向や国内外からの来街者も増加しつつあり、今なお様々な資源が集まっているところである。

このように新宿には新しい人やモノを受け入れる「空間」があり、地理的条件や歴史的な出来事が重なり、さらに、交通網の整備などにより、様々な地域資源が集積する賑わいのあるまちへと発展した。

一方、新宿には、文学者、芸術家、思想家や外国人など、様々なバックグラウンドを持つ人々の活動の場があった。これらの人々が集まってきたのは、交通の要所であり様々な資源が集積する場所であったことに加え、新宿が都市の周縁にあったがゆえに新しい思想や文化を受け止めることができる「寛容性」（大らかさ）を持っていたことによる。また、新宿には自然、歴史、文化等を背景に培われてきた豊かな地域の力があり、こうした交通網の整備、豊かな地域の力、寛容な風土などにより、多様な地域資源が集積する土壌が醸成されてきた。そして、その土壌から「利便性」「寛容性」「多様性」「先端性」「国際性」といった特性が生まれ、それらが相まって新宿の個性や独自性を生み出していった。

まちの魅力形成のメカニズム

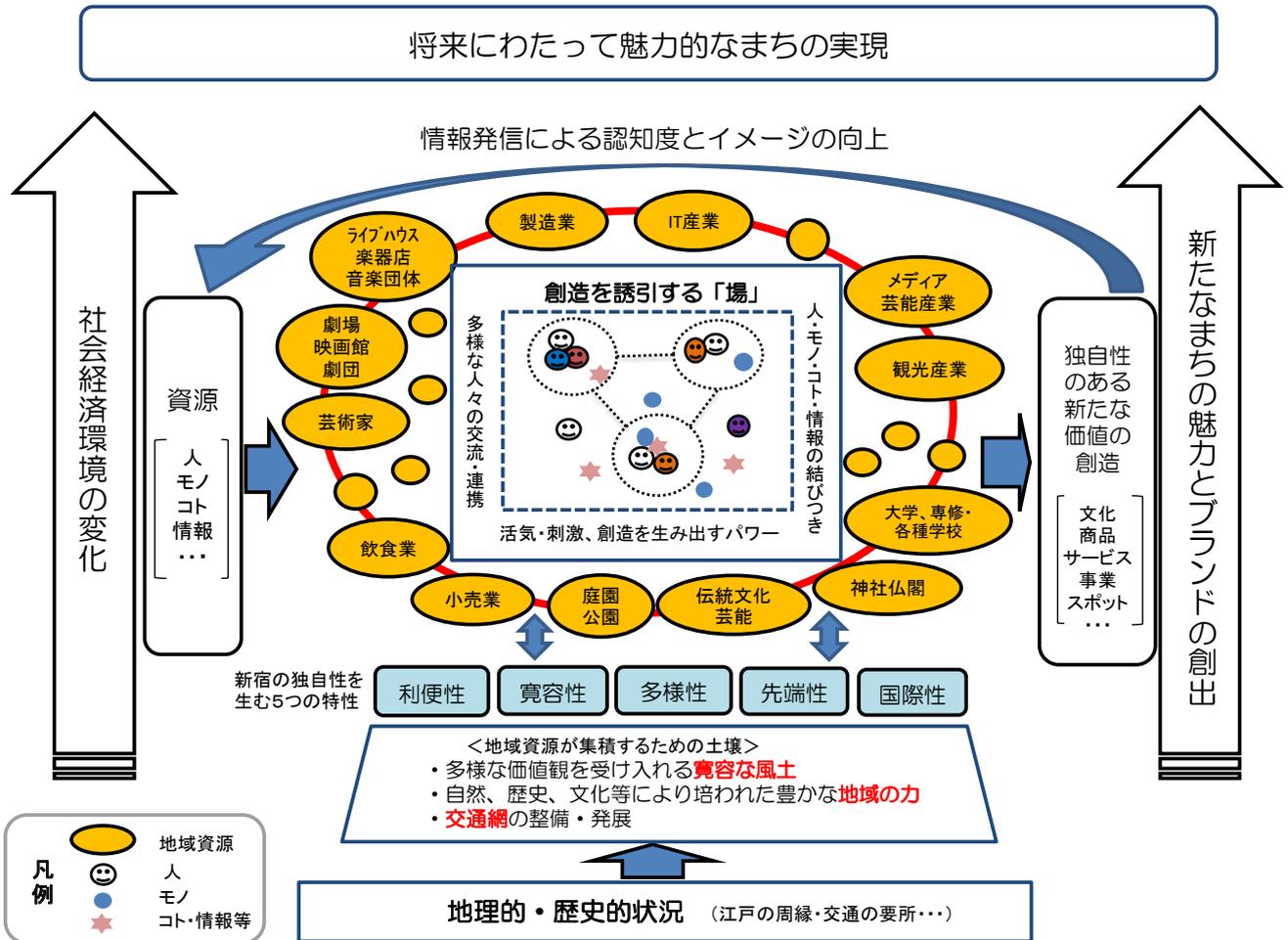
このように新宿では、地理的・歴史的状況を背景に、社会経済環境の変化や交通網の発展とともに、地理的に優位性を持つ新宿に先進地から人やモノといった資源が移転してくるようになった。新たな地域資源が集積したことで、周辺や地方からさらに多くの人々が集まり交流が始まった。特に新宿には多様な価値観を受け入れる寛容な風土があり、多様なバックグラウンドや知識、能力を持つ人々の交流や連携が行われ、「歴史・伝統」「教育」「商業」「文化」「産業」など様々な分野において、これまでになかったような新しい価値が生まれた。そこには、多様な人々が交流や連携することで創造を誘引する多くの「場」が存在し、活気や刺激、創造を生み出すパワーを推進力に人と人、人とモノなどの多様な資源が結びつ

4) (株) ブランド総合研究所が全国の居住者を対象に、自治体の魅力度等をアンケート調査した「地域ブランド調査2016」による。

きあうことで、新宿ならではの独自性のある文化や商品、サービス、事業等の新たな価値が創造される。そして、新たに生み出された価値がまちの魅力となり、その情報がメディア等によって発信され、あるいは情報を通して新宿の認知度やイメージが向上することで、新宿に惹きつけられた人々が集まり、モノ、コト、情報等の集積が再び起こる。そして創造を誘

引する「場」においてさらに新たな価値への変換が起こる。こうした循環が繰り返され、まちの魅力やブランドが次々に創造されることによって、「将来にわたって魅力的なまち」が実現される。これが新宿におけるまちの魅力の形成メカニズムといえることができる。

図表 III-8 まちの魅力形成メカニズム



3. 魅力的なまちであるための方向性

今年度は、地域資源の集積とその展開から、新宿のまちの魅力の形成メカニズムを明らかにした。メカニズムで示したとおり、新宿には「豊富な地域資源があること」、「地域資源を魅力に変換する力があること」、「地理的・歴史的状況や社会経済環境の変化を活かす力があること」、「人と人が交流し、新たなアイデアを生み出す力があること」、「他の地域にはない新たなモノやサービスを創造できていること」といった特性があることが明らかになった。

近年、23区内では東京湾岸エリアをはじめ、各地域で大規模開発が行われ、高層マンションや新たな商業・飲食・ビジネス等の機能の入った複合ビル

が次々と建設されている。また、国内外の観光客等の獲得を目的としたシティプロモーションが展開されている。こうした中、新宿区においても文化、産業、観光、まちづくりなど様々な分野においてまちの魅力を上向きさせるための取組が行われている。今後、新宿のまちの魅力とブランド力をさらに向上させ、東京2020オリンピック・パラリンピック後も、持続的に人を惹きつけるまちであり続けるためには、施策を推進していく上で、新宿の特性を取り入れ、まちの魅力形成メカニズムを生かした取組が必要である。そのためには、以下の視点からのアプローチを行っていくことが求められる。

(1) 歴史的背景、社会背景、外的要因、地理的条件などを把握し、分析する

まちの魅力となる地域資源には、集積にいたる歴史的背景、社会背景、外的要因、地理的条件などの様々な背景が存在しており、魅力を形成するに至った背景を知ることで地域資源に対する理解が深まる。地域資源を活かすためには、様々な背景を把握すること、そしてその背景がどのように地域資源に影響を与えたかを分析していく必要がある。

(2) 何でもないと思う地域資源に価値があることを見出し、評価する

何でもないと思う地域資源にも、着目することで、新たな価値を見出すことができ、まちの魅力につながる地域資源の発掘につながる。そこで、様々な地域資源にスポットを当て、調査・研究を行い、どのような価値を持っているかを評価していく必要がある。

(3) 地域資源を組み合わせ、魅力的で価値のあるものにする変換機能を強化する

人と人、人とモノなどの様々な資源が組み合わせられ、結びつくことにより、独自性のある新たな価値が創造され、まちの魅力につながっていく。そこで、新たな価値の創造をもたらす変換機能となる交流、連携などを強化していく必要がある。

(4) 人の力を引き出し、人と人が交流できるプラットフォームを形成する

地域資源の発掘、新たな価値の創造などは、そもそも人の力が源泉であり、人の力を高めていくことによって、推進力が高まっていく。また、人と人が交流することにより、相乗効果が生まれる。そこで、人の力を引き出し、人と人が交流できるプラットフォームを形成していく必要がある。

(5) 新たな創造を促進するために支援する

他のまちにはない、独自性のある文化、サービス、事業等が新たに創出されることで、新たな価値が生まれ、まちの魅力につながっていく。そこで、様々な分野の新たな創造を促進するための支援を行っていく必要がある。

(6) 戦略的な情報発信を行う仕組みを構築する

まちの魅力が様々な媒体を通じて発信され、認知度やイメージが向上することで、魅力に惹きつけられた人々が集まり、新たな資源の集積が起こる。また、ブランドの確立にもつながっていく。そこで、ストーリー性や話題性を持たせるなど付加価値を付けながら情報発信を戦略的に行っていく必要がある。

本研究レポートが「暮らしと賑わいの交流創造都市」の実現や「まちの歴史や記憶、文化、芸術など多様な魅力による賑わいの創造」、「国際観光都市・新宿としての魅力の向上」などの様々なまちの魅力形成やブランドの創出につながる施策を展開するための基礎資料として活用されることを期待する。な

お、本レポートで取り上げた魅力の源となる地域資源は一部分であり、ここで言及できなかった地域資源が多く集積していることを申し添えておく。

また、本レポートを作成するにあたり、多くの方々にインタビュー等にご協力いただいた。ここに記して心から謝意を表する。

既刊一覧

◎2008（平成20）年度	新宿自治創造研究所活動報告書	2009（平成21）年3月
◎2009（平成21）年度	新宿自治創造研究所活動報告書	2010（平成22）年3月
◎研究所レポート2010	外国人WG報告（1）	2010（平成22）年12月
◎研究所レポート2010	人口WG報告（1）	2011（平成23）年2月
◎研究所レポート2010	集合住宅WG報告（1）	2011（平成23）年3月
◎研究所レポート2011	集合住宅WG報告（2）	2011（平成23）年11月
◎研究所レポート2011	外国人WG報告（2）	2011（平成23）年11月
◎研究所レポート2011	集合住宅WG報告（3）	2012（平成24）年1月
◎研究所レポート2011	外国人WG報告（3）	2012（平成24）年1月
◎研究所レポート2011	人口WG報告（2）	2012（平成24）年3月
◎研究所レポート2011	人口WG報告（3）	2012（平成24）年3月
◎研究所レポート2012 No.1	国勢調査データからみる新宿区の特徴	2013（平成25）年3月
◎研究所レポート2012 No.2	国勢調査に基づく新宿区将来人口推計 ー将来の住宅供給を考慮したコーホート・シェア延長法によるー	2013（平成25）年3月
◎研究所レポート2013 No.1	国勢調査に基づく新宿区将来人口推計ー地域別推計ー	2014（平成26）年1月
◎研究所レポート2013 No.2	国勢調査に基づく新宿区将来世帯推計	2014（平成26）年3月
◎研究所レポート2013 No.3	新宿区の単身世帯の特徴ー壮年期を中心としてー	2014（平成26）年3月
◎研究所レポート2014 No.1	新宿区の人口移動	2015（平成27）年3月
◎研究所レポート2014 No.2	新宿区の単身世帯の特徴（2） ー単身世帯意識調査結果からー	2015（平成27）年3月
◎研究所レポート2015 No.1	新宿区の単身世帯の特徴（3） ー壮年期・高齢期の生活像ー	2016（平成28）年3月
◎研究所レポート2015 No.2	データでみる新宿区の姿	2016（平成28）年3月
◎研究所レポート2016	新宿区のまちの魅力の研究（1） ーにぎわいの実態把握と意識面からみる魅力の分析	2017（平成29）年3月
◎研究所レポート2017 No.1	2015年国勢調査に基づく新宿区将来人口推計	2018（平成30）年1月
◎研究所レポート2017 No.2	2015年国勢調査データからみる新宿区の特徴	2018（平成30）年1月

研究体制

所	長	金安 岩男	（慶應義塾大学名誉教授）
副 所	長	原田 由紀	（新宿自治創造研究所担当課長）
政策形成アドバイザー		牧瀬 稔	（関東学院大学法学部地域創生学科准教授）
テーマ別アドバイザー		梅本 龍夫	（立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任教授）
研 究 員		田中 雅美	
	〃	町田 愛美	
非 常 勤 研 究 員		阿部 名保子	
	〃	渡部 春佳	

研究所レポート2017 No.3

新宿区のまちの魅力の研究（2）

ー地域資源の集積と魅力形成メカニズムの分析ー

発行年月	2018（平成30）年3月
編集・発行	新宿区新宿自治創造研究所 （新宿区新宿自治創造研究所担当部新宿自治創造研究所担当課）
住所	〒160-0023 東京都新宿区西新宿七丁目5番8号（新宿都税事務所2階）
電話	03-3365-3474（直通）
F A X	03-3365-3472
E-Mail	jichisozo@city.shinjuku.lg.jp

新宿区新宿自治創造研究所

印刷物作成番号

2017-3-2201

再生紙を使用しています。

